平成２９年度

英語教育リーディングスクール

研究紀要

北九州市立光貞小学校

はじめに

本校では、昨年度より、北九州市教育委員会「英語教育リーディングスクール」の委嘱を受け、「英語に親しみ、英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」を主題として研究を推進してまいりました。「外国語活動・外国語科」における新学習指導要領の円滑な実施に向けた準備として、平成３０年度から本市で先行実施される「外国語活動・外国語科」のモデルとなる、授業のスタンダードづくりを行いました。

昨年度は、「英語や外国の人・外国の文化に触れる」「英語を知る」「英語に慣れ親しむ」をテーマにし研究体制づくりを行い、研究の基盤づくりをいたしました。また、今年度は、昨年度の課題を生かし、新たな体制づくりと全学級での授業実践を行い研究協議を重ねました。高学年は、外国語活動の内容に加えて外国語科（週２時間）中学年は、外国語活動（週１時間）、低学年は、英語体験活動（週１５分程度）としそれぞれの時間を確保し、担任がＴ１となり一単位時間での学習を進めて参りました。その結果①児童の変容（英語に対する関心の高まり・コミュニケーション意欲の向上・自分自身の成長の実感）②授業スタンダードの確立③全職員による主題研究の推進など大きな成果を上げることができました。

本年度は、これらの研究を１１月１７日（金）に実施した「英語教育リーディングスクール実践報告会」で発信し、参加された先生方から貴重なご意見ご指導をいただくこともできました。

まだまだ、本校の研究はスタートしたばかりです。今後も次期学習指導要領完全実施に向けて、「英語教育リーディングスクール」として、北九州市の小学校英語教育をリードしていく所存です。

おわりに、これまで、ご指導ご助言をいただきました。北九州市教育委員会の皆様をはじめ、同会指導部指導第一課指導主事山田百合子様に厚くお礼を申し上げます。また、研究同人として光貞小学校の子どもたちのために努力を惜しまない教職員に心から感謝します。

平成３０年３月３１日

北九州市立光貞小学校

校長　　吉田 理恵

目　次

英語に親しみ、英語を使って
積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

◇　英語教育リーディングスクール推進計画 ---------- 3

◇　英語教育リーディングスクール推進委員会　研修部計画 ---------- 7

◇　実践記録

第１学年　英語体験活動実践記録 ---------- 10
実践記録①，②　身体の名前　英語でチャレンジ“From Head to Toe”

第２学年　英語体験活動実践記録 ---------- 17
実践記録①，②　いろんな果物　英語でチャレンジ“A Beautiful Butterfly”

第３学年　外国語活動実践記録 ---------- 27
実践記録①　What do you like?　友だちにインタビューしよう
実践記録②　What do you want?　クリスマスパーティーをしよう

第４学年　外国語活動実践記録 ---------- 40
実践記録①，②　What's this?　クイズ大会をしよう

第５学年　外国語活動実践記録 ---------- 51
実践記録①　What do you want?　ほしいものをたずねよう
実践記録②　He can swim.　できることを紹介しよう

第６学年　外国語活動実践記録 ---------- 65
実践記録①　Let's go to Italy.　友だちを旅行にさそおう
実践記録②　What time do you get up?　一日の生活を紹介しよう

◇　光貞小「授業のスタンダード」ができるまで ---------- 81

◇　英語教育リーディングスクール推進委員会　環境部の取組 ---------- 86

◇　英語教育リーディングスクール推進委員会　調査部の取組 ---------- 89
調査内容（児童用・教職員用）
調査結果・分析

◇　本年度の成果と課題 ---------- 93

◇　光貞小学校「英語リーディングスクール」推進計画

【本校の英語教育リーディングスクール推進計画】

1　本校の研究主題

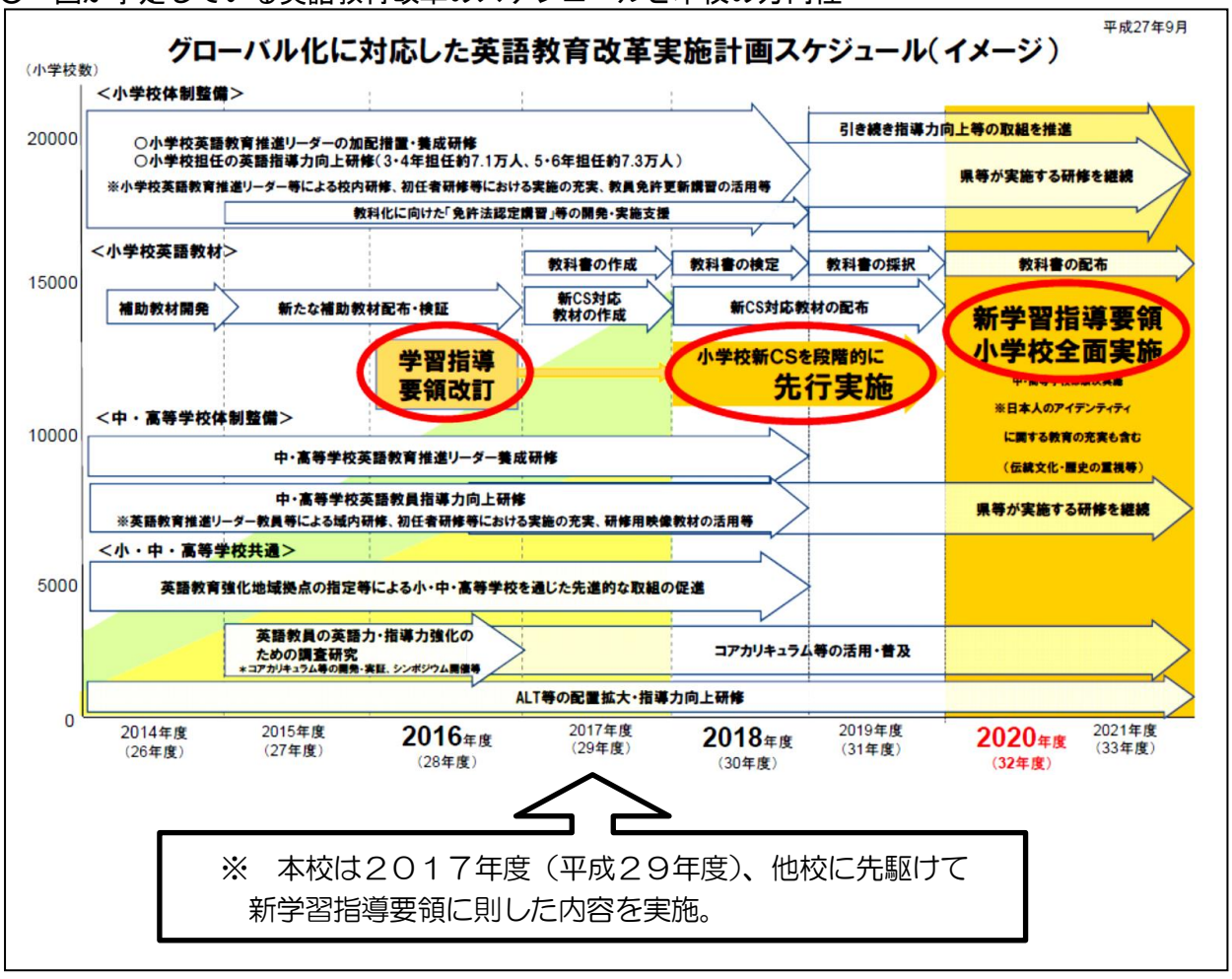
英語に親しみ、英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

2　研究推進計画

⑴　平成２９年度の取組の方向性について

◇　平成３０年度の内容等を見据え、【学習の目標等】【教育課程】の実施に向けての準備の期間とする。
◇　児童・教員ともに、外国語（英語）・ＡＬＴに慣れること、外国語活動や英語体験活動における授業のイメージをもつことを大きな目標とする。
◇　Ｔ１として、外国語活動や英語体験活動の授業の進め方や指導・支援の在り方を、授業実践を通して身に付けていく。

○　国が予定している英語教育改革のスケジュールと本校の方向性



※　本校は２０１７年度（平成２９年度）、他校に先駆けて新学習指導要領に則した内容を実施。

⑵ 学習の目標・教育課程

・　新学習指導要領の先行実施が行われる平成３０年度より、意欲的に異文化や外国語に触れるとともに、国際共通語としての英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育成するために、以下の取組を行う。

① 小学校低学年において、異文化や外国語を学ぶ素地作りを行う。
（外国人や英語に触れる）
② 小学校中学年において、コミュニケーションの素地を養う。
（「聞くこと」「話すこと」を中心に週１時間の外国語活動）
③ 小学校高学年において、コミュニケーションの基礎を養う。
（週２時間の外国語活動を通して、中学校英語への円滑な接続のための「読むこと」「書くこと」にも慣れ親しむ）
④ 中学校では、英語を使って積極的にコミュニケーションを図る
（４技能のバランスを考えた使える英語の実践）

学　年	活動名	活動内容
１，２年生	英語体験活動	朝自習のオリジナルタイム等を活用
３，４年生	外国語活動	年間３５時間 週１時間の外国語活動
５，６年生	外国語活動	年間７０時間 週２時間の外国語活動
中学校１～３年	英語科	年間１４０時間 ・週４時間

○　具体的な取組

【１学期】

◇　英語教育リーディングスクールの概要や趣旨の理解を深めるための研修を実施する。
・　指導主事等を講師として招聘し、新学習指導要領における英語教育の在り方や英語教育リーディングスクールについて、教員の共通理解を図る。

◇　教員が外国語活動や英語体験活動の授業イメージをもつための研修を実施する。
・　外国語活動の授業の様子をＤＶＤ等で視聴したり、授業参観や模擬授業を行ったりすることで、教員が共通の授業イメージをもつことができるようにする。
・　Hi, friends 等の教材への理解を深める研修を行う。

◇　外国語（英語）やＡＬＴに慣れるための研修を実施する。
・　教室英語の研修等を通して、ＡＬＴとの連携を深めるようにする。

◇　異文化理解を推進するために、校内の環境整備を図る。

［夏季休業日］　全員研修会・実践報告会に向けた指導案の作成及び検討

【２学期】

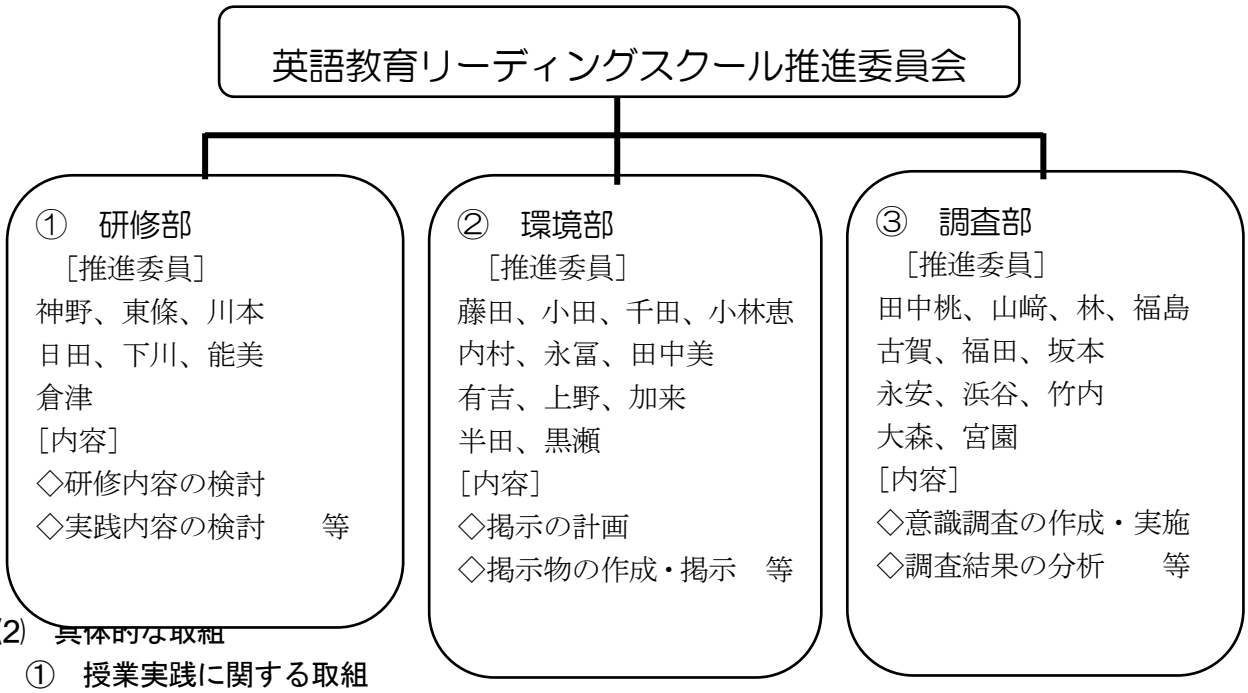
◇　平成２９年１１月１７日（金）の全員研修会・実践報告会に向けた準備とその実践

【３学期】

◇　外国語サークルや英語教育プログラムなどの先行研究を積極的に活用して、外国語活動や英語体験活動の年間計画、評価規準や評価の方法等を確認し、来年度の先行実施に向けて準備を行う。

3　これからの英語教育リーディングスクールの推進について

⑴　校内研究組織



⑵　具体的な取組

①　授業実践に関する取組

○　１・２年については、朝自習（オリジナルタイム）等を活用して、英語による読み聞かせ、英語の歌やゲームなどのアクティビティを取り入れた、英語に親しむ活動を実施する。

○　３・４年については、年間３５時間、外国語活動の授業を実施する。学習内容については、「Hi,friends!」を活用した「外国語活動 年間指導計画」を基に実践する。

○　５・６年については、年間７０時間、外国語活動の授業を実施する。「Hi,friends!」の学習内容に、「Hi,friends! Plus」等を活用して英語を読んだり書いたりする活動を取り入れ、実践する。

◎　平成２９年１１月１７日（金）の全員研修会・実践報告会について

１・２年生については、５校時開始前に１０分程度の英語体験活動（読み聞かせ等）を公開
３～６年生については、各学年１クラスが外国語活動の授業を公開

○　１学期中に外国語活動の提案授業や研修を通して授業のイメージづくりを行う。
提案授業：5 月 16 日（火）5 校時（第 5 学年 2 組）
研修：5 月 17 日（水）15:30～

○　実践記録を作成し、研究紀要にまとめる。

②　英語への興味・関心を高める環境の整備

○　国際交流室や各学年の廊下、階段等の掲示物の整備を行う。

○　教室で活用できる掲示物の整備を行う。

○　英語教育に必要な備品等の選定を行う。

③　児童及び職員の意識調査の実施及び分析

○　児童及び教員を対象に行う英語教育に関する意識調査の内容を検討し、作成する。

○　意識調査の実施及び集計を行う。（６月・１２月の２回実施）結果を基に、分析を行う。

○　英検 Jr.（ブロンズレベル）を第６学年で実施する予定。（２月）

⑶ 各部の活動計画

① 研修部

○ 研修内容の検討と計画
○ 各学年の英語体験活動、外国語活動の計画、準備、実践
○ 実践記録の作成（２学期末）

② 環境整備部

○ 国際交流室及び各学年の英語教育に関する掲示物の検討及び計画
○ 掲示物の作成及び掲示

③ 調査部

○ 児童及び職員対象の英語教育に関する意識調査の内容の検討及び作成
○ 第１回意識調査の実施及び集計（６月）
○ 第２回意識調査の実施及び集計（１２月）

◇　英語教育リーディングスクール推進委員会　研修部計画

１　実践に関する内容

学　年	実施時間	学　習　内　容
１，２年	英語体験活動 学校裁量（朝の時間）	歌、絵本の読み聞かせ等による英語体験活動 ・　色、形、動物、身体の部位などの単語や、簡単な表現を言ったり、聞いたりする活動。 ・　あいさつをする。 ・　絵本の読み聞かせ活動 ・　歌を歌う ・　チャンツを言う
３，４年	外国語活動	「聞くこと」「話すこと」の言語活動のある外国語活動。 ＊　平成２９年度光貞小外国語活動指導計画に基づいて実施する。
５，６年	外国語活動	「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の言語活動のある外国語活動。 ＊　平成２９年度光貞小外国語活動指導計画に基づいて実施する。

２　校内研修及びの公開授業の記録

○　４月　７日（金）　英語教育リーディングスクール研究推進打ち合わせ（校長・教頭・教務）

○　４月１９日（水）　英語リーディングスクール推進委員会（研究推進計画の検討）

○　５月　２日（水）　英語教育リーディングスクール全体会（推進計画）

○　５月１７日（水）　第１回　英語教育リーディングスクール校内研修会
（内容）◇　外国語活動提案授業　第５学年
Do you have　“a”？　アルファベットクイズをしよう

○　５月１９日（金）　第２回　英語教育リーディングスクール校内研修会（講師　山田指導主事）
（内容）◇　アクティビティ研修（教室英語、カードゲーム）
◇　指導講話　外国語活動における担任の役割

○　５月３１日（水）　英語教育リーディングスクール推進委員会
（「授業のスタンダード」作りについての協議会）

○　７月１９日（水）　英語教育リーディングスクール全体会（学習指導案の作成について）

○　７月２１日（金）　第３回　英語教育リーディングスクール校内研修会（講師　山田指導主事）
（内容）◇　新学習指導要領について

○　８月２９日（火）　英語教育リーディング推進委員会（講師　山田指導主事）
（内容）◇　学習指導案検討会

○　９月２２日（金）　第４回　英語教育リーディング校内研修会（講師　山田指導主事）
（内容）◇　５年A研実践授業、協議会
◇　指導講話　「読むこと」「書くこと」の指導について

○１０月　４日（水）　第５回　英語教育リーディング校内研修会（講師　相原指導主事）
（内容）◇　２年・４年A研実践授業、協議会
◇　指導講話「聞くこと」「話すこと」の指導について
絵本の活用について

○１０月１６日（月）第６回　英語教育リーディング校内研修会（講師　山田指導主事）
（内容）◇　１年・３年A研実践授業、協議会
◇　指導講話　歌・チャンツ等の指導の工夫について

○１０月２５日（水）第７回　英語教育リーディング校内研修会（講師　山田指導主事）
（太田部長　三原担当課長　河村室長　来校）
（内容）◇　６年A研実践授業及び学力・体力向上訪問代表者授業
◇　指導講話　必然性のあるコミュニケーションについて

○１１月１７日（金）　英語教育リーディングスクール実践報告会
西ブロック外国語活動全員研修会

○　１月１９日（金）外国語活動授業視察訪問　４年・５年
（佐賀教育委員会、北九州市教育委員会、市内小学校管理職・教諭）
（内容）◇　英語教育リーディングスクール公開授業・取組紹介

○　１月３１日（水）英語教育リーディングスクール全体会　（調査部報告会）

○　２月　７日（水）６年生　英検 Jr.（ブロンズ）実施

○　２月２１日（水）第８回　英語教育リーディング校内研修会
（内容）◇　絵本の活用について
○　３月　７日（水）英語教育リーディングスクール公開授業
（３年　外国語活動取材　ＦＢＳ来校）
○　３月　８日（木）英語教育リーディングスクール公開授業
（１年　英語体験活動取材　西日本新聞社来校）
○　３月１３日（火）英語教育リーディングスクール公開授業
（５年　外国語活動取材　西日本新聞社来校）

実 践 記 録

第１学年　英語体験活動実践記録
　　実践記録①，②　身体の名前　英語でチャレンジ“From Head to Toe”

第２学年　英語体験活動実践記録
　　実践記録①，②　いろんな果物　英語でチャレンジ“A Beautiful Butterfly”

第３学年　外国語活動実践記録
　　実践記録①　What do you like?　友だちにインタビューしよう
　　実践記録②　What do you want?　クリスマスパーティーをしよう

第４学年　外国語活動実践記録
　　実践記録①，②　What's this?　クイズ大会をしよう

第５学年　外国語活動実践記録
　　実践記録①　What do you want?　ほしいものをたずねよう
　　実践記録②　He can swim.　できることを紹介しよう

第６学年　外国語活動実践記録
　　実践記録①　Let's go to Italy.　友だちを旅行にさそおう
　　実践記録②　What time do you get up?　一日の生活を紹介しよう

第１学年　英語体験活動　学校裁量（朝の時間）実践記録①

指導者　藤田　むつみ
神野　翼
田中　桃子
ALT　Ga-Yen Dang

１　活動名　身体の名前　英語でチャレンジ
“From Head to Toe”（作者エリック・カール　出版社 Harper Festival）

２　指導観

○　本学級の児童（男子１３名　女子１５名　合計２８名）に，英語体験活動に関する意識調査を行った。「英語の活動は好きですか」の問いに対して，２１名の児童が「好き」「どちらかというと好き」と答えた。その一方で、７名の児童が「嫌い」「どちらかというと嫌い」と答えている。好きな理由として，「英語の本を読んでくれるから」「外国の人と会話ができる」「知らないことを教えてくれる」などを挙げている。嫌いな理由としては，「難しい言葉があるから」「得意ではないから」などである。児童にとっては，歌を歌ったり絵本の読み聞かせを聞いたりするそのものが楽しく，難しいワードや言葉を学ぶことはあまり興味を示しにくいといえる。

○　本活動は，英語の歌を歌う活動や，英語の絵本の読み聞かせを聞く活動を通して，英語に触れる楽しさを味わうことをねらいとしている。

　また，外国の文化（エリック・カール作の絵本“From Head to Toe”や“Head shoulders knees and toes”）に触れ，英語を使って，他者とコミュニケーションを楽しむことをねらいとしている。

○　指導に当たっては，児童が意欲的に活動することができるように、挨拶や歌，チャンツ、じゃんけんなど，毎時間繰り返し行うことで、子どもたちが楽しんで英語を使った活動をすることができるようにする。また、絵本に登場する語彙や表現を、チャンツや歌を通して慣れ親しんだり，フラッシュカードを用いて

本時の指導にあたっては，絵本“From　Head　to　Toe”の読み聞かせや歌の活動により，実際に動作を取り入れ，英語での身体の名前への興味を深めさせるようにする。

３　英語体験活動の目標

　英語を聞いたり，言ったりする活動を通して，体験的に英語に慣れ親しみ，英語学習への意欲や関心を育てる。

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　楽しみながら外国語体験をする。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　外国語や外国語の歌に慣れ親しむ。
言語や文化に関する気付き【気】	○　英語での表現方法に気付く。

４　活動計画

月	絵本の名前	活動内容
６月		・ハローソングを歌おう ・挨拶　英語でチャレンジ ・じゃんけんポン
７月	“What‘s color?”	・色
９月	“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?“	・いろんな動物　英語でチャレンジ ・色
１０月・１１月	“From Head to Toe”	・頭・肩・膝ソングを歌おう

１２月	“THE VERY HUNGRY CATERPILAR “	・身体の名前　英語で言ってみよう ・数（１～１０），食べ物，曜日等
１月	“A Beautiful Butterfly”	・食べ物
２月・３月	“TODAY IS MONDAY “	・曜日

５　本時の学習

⑴ 日時　平成２９年１０月１６日（月）　１年２組教室

⑵ 目標　歌や絵本の読み聞かせを通して，楽しんで英語体験活動をすることができるようにする。

⑶ 準備　絵本　ＣＤ

⑷ 展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点　【観点】評価規準（評価方法） ★　特別な教育的支援を要する児童への支援
１　あいさつをする。 T ： Hello. C ： Hello. T ： How are you? C ： I‘m fine. （I‘m good.	○　元気よく楽しそうに挨拶をする。（担任，ALT）
２　今日の活動の確認をする。 	○　ホワイトボードで活動内容を示し、見通しをもって活動を行うことができるようにする。（担任） きょうのかつどう ①あいさつ ②うたをうたおう ③えほんたいむ ④ふりかえり ⑤あいさつ
３　歌“Head shoulders knees and toes”を歌う。 	○　必要に応じて絵カードを示しながら，リズムに合わせて歌を歌う。担任が主体的に活動を楽しんでいる姿を見せる。（担任，ALT）
４　絵本“From Head to Toe”を聞く。 	★　活動に集中することが難しい児童には，寄り添い，「あの動物は何をしているかな。」など，声かけをして、活動への意欲をもつようにする。（担任） ○　動作を大きくし，子ども達が真似しやすいようにする。（担任，ALT）

5　ふり返りをする。	○　積極的にクラスルームイングリッシュを使うようにする。(担任)
6　あいさつをする。 Good-bye. See you.	○　楽しんで活動することができたことを褒める。 (担任,ALT) ○　次時も楽しんで活動できるように,「今日も本当に楽しかったね。」や、「次は何かな。」など、子どもたちが期待感をもてるような声かけをする。

６　実践のまとめ

（１） 光貞小「授業のスタンダード」について

◎　活動内容の可視化

１年生の発達段階を加味して，授業のスタンダードを確認する活動は取り入れなかったが，ボードを黒板に掲示することにより，活動が明確になった。

◎「振り返り」のある授業展開

振り返りをすることにより，他の授業と同じように一人の児童の意見をクラス全体に広げることができ，子ども達が何のために学習をしているのかがより明確になった。振り返りの際には，「視点」を大事にしてふりかえらせ，漠然とした発問やなげかけはしないようにした。

（２） 成果と課題（○成果　●課題）

○　ウォーミングで「頭・肩・膝ソング」をしたことにより，本時の活動がより活発になった。

○　身体を動かす活動を取り入れたことにより，動作の面白さによって，身体の名称を自然に学習することができた。

○　前時の活動で，パターン化した“Yes, I　can.”という答えを，他の教科の学習中にも，使用していたため，本時では子ども達が自然にその答えを使うことができるようになった。

●　英語に対する関心の低い児童がおり，すぐに活動に入り込めないことがあった。

●　個々の英語への関心の度合いにより，活動の参加度の違い（ジェスチャーや歌，声の大きさなど）が表れていた。

第１学年　英語体験活動　学校裁量（朝の時間）実践記録②

指導者 神野　翼
藤田　むつみ
田中　桃子
ALT　Ga-Yen Dang

１　活動名　身体の名前　英語でチャレンジ
“From Head to Toe”（作者エリック・カール　出版社 Harper Festival）

２　指導観

○　本学級の児童（男子１３名，女子１４名，合計２７名）は，朝の学習時間の英語体験活動において，ALT や外国人留学生による英語の絵本の読み聞かせに目を輝かせて見聞き入ったり，楽しみながら簡単な単語や表現を英語で言ったりする姿が多く見られる。活動後には，ALT や外国人留学生に積極的に話しかけたり，覚えた英語を口ずさんだりする姿も見られる。意識調査の「英語の活動は好きですか」という問いに対しても，２３名の児童が「好き」「どちらかというと好き」と答えた。その理由として，「英語の本を読んでくれるから」「外国の人と会話ができるから」「知らないことを教えてくれるから」などを挙げ，英語や外国の人との交流に意欲的に取り組んでいることがうかがえる。

一方で，４名の児童が，「あまりすきではない」と答えた。その理由として，「英語が難しいから」「なんて言っているのかよく分からないから」などを挙げた。実際の児童の様子からも，英語体験活動の中で，ALT や外国人留学生の話す英語を真似して言う場面で活動に消極的になる姿がよく見られた。また，全体的に活動を楽しんではいるが，英語の単語や表現を声に出して言うことに，恥ずかしさや抵抗感を感じていることもうかがえた。積極的に英語を言えるための環境づくりや指導の工夫が必要であると考える。

○　本活動は，ALT や外国人留学生による，英語の歌やチャンツ，英語絵本の読み聞かせを体験することを通して，様々な英語の単語や表現を聞いたり言ったりして楽しむことをねらいとしている。また，中学年から学習する外国語活動への関心が高まるようにすることをねらいとしている。絵本“From Head to Toe”には，動物の名前や身体の各部位の名称が示されており，登場する動物の動きをまねながら英語を言う活動を楽しむことができる構成となっている。また，ウォーミングアップとして，“Head shoulders knees and toes”の歌を，身体の各部位（頭，肩，膝など）を両手で触れながら歌うことで，楽しみながら英語の表現に慣れ親しみ，絵本の読み聞かせ活動をより楽しむことができると考える。

○　指導に当たっては，まず，英語での簡単な挨拶を行う。担任が手本となり，まずは児童へ元気よく英語で挨拶をしてから，真似をして挨拶を返すように促すことで，児童が抵抗なく英語を言うことができるようにする。また，毎時間繰り返し行うことで，英語の挨拶表現に慣れ親しむようにする。次に，“Head shoulders knees and toes”を歌う。身体の各部位（頭，肩，膝など）を両手で触れながら歌う活動を取り入れることで，絵本の読み聞かせ活動へとスムーズにつなげることができるようにする。

絵本の読み聞かせ活動では，“From Head to Toe”を用いて，ALT による読み聞かせを行う。ここでは，様々な動物や身体の部位の英語での言い方に触れる。自ら進んで英語を言おうとするように，絵本に登場する動物の動きを担任と ALT が手本を示しながら全員でまねて，楽しみながら活動を進めることができるようにする。絵本に集中できていない児童がいた場合は，そばに行って，「あの動物は何をしているかな。」など，日本語で分かりやく声かけをすることで活動への不安を取り除き，意欲をもつようにする。

３　英語体験活動の目標

英語を聞いたり，真似をして言ったりする活動を通して，体験的に英語に慣れ親しみ，英語学習への意欲や関心をもつようにする。

４　活動計画

月	絵本の名前	活動内容
６月		・歌“Hello song” ・挨拶 ・じゃんけん
７月	“What's color?”	・色
９月	“I LIKE ME!”	・一日の生活
１０月	“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?”	・色，動物
１１月	“From Head to Toe”	・動物，身体の部位の名称
１２月	“THE VERY HUNGRY CATERPILLAR”	・数（１～１０），食べ物，曜日等
１月	“A Beautiful Butterfly”	・食べ物
２・３月	“TODAY IS MONDAY	・曜日

※　６月より英語体験活動を朝の時間に取り入れる。
（６月は絵本を使用せず，英語表現を用いた遊びの活動を行う。）

５　本時の学習

⑴　日時　　平成２９年１１月１７日（金）　１４：００～１４：１５　　１年１組教室

⑵　目標　　歌や絵本の読み聞かせの体験活動を通して，楽しんで英語を聞いたり，真似して言ったりしようとする。

⑶　準備　　絵本　ＣＤ

⑷　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点 ★　特別な教育的支援を要する児童への支援
１　挨拶をする。 	○　元気よく楽しそうに挨拶をする。（担任，ALT） T：Hello. C：Hello. T：How are you? C：I'm fine.（I'm good.
２　本時の活動を確認する。 	○　外国語の体験活動なのでめあては黒板には書かずにホワイトボードを活用して活動を確認する。（担任） きょうのかつどう ①　あいさつ ②　うたたいむ ③　えほんたいむ ④　ふりかえり ⑤　あいさつ

3　歌“head shoulders knees and toes”を歌う。 	○　担任と一緒に絵カードを見せながら，リズムに合わせて歌を歌う。(ALT)
4　絵本を聞く。“From Head to Toe” 	★　活動に集中することが難しい児童には，寄り添い，「あの動物は何をしているかな。」など，声かけをして、活動に目をむけるようにするとともに活動への意欲をもつようにする。(担任)
5　振り返りをする。 	○　意欲的に活動に参加していたことなどを褒める。 (担任，ALT)
6　挨拶をする。	 T: Good-bye everyone. C: Good-bye ～sensei. T: See you. C: See you.

６　実践のまとめ

(1)　光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　担任とALTの役割を意識した授業展開

事前にALTと打ち合わせを行うことで,担任とALTの役割を明らかにしておくことができた。その中で，担任が児童の反応を見ながら進めていくことができた。児童の反応を見ながら進めていくことで，児童が困っている際や児童の声を揃えて言葉を言わせたい際に，一旦止めることができた。児童の反応を見ながら進めることで，児童にとって負担や抵抗が少ない英語体験活動にすることができた。

◎　「振り返り」のある授業展開

「今日は新しい動物の真似ができたよ。」「ゴリラの動きがおもしろかったよ。」など，今日できたことや学んだことについて振り返り，発言することが増えた。「今日できたことや，新し

くわかったことをみんなに教えてください。」という視点を与えた振り返りを取り入れることで，１５分間の中で、できたことや学んだことを一人一人が振り返ることができた。

◎　活動内容の可視化

「次はふりかえりだね。」「最後に，ガーイェン先生に挨拶しなきゃ。」など，次第に次の活動についてのつぶやきが聞かれるようになった。ボードを黒板に掲示することによって，次にする活動を示すだけでなく，１５分間の活動の全体の流れを明確にすることもできた。また，毎回同じパターンで英語体験活動を進めることができ，どの児童も活動内容に不安を感じずに，楽しく取り組むことができた。

⑵ 成果と課題　（○成果　●課題）

①　ウォーミングアップ　“Head shoulders knees and toes”の歌の活用について

○　担任やALTが一緒に，リズムに合わせて歌を歌ったり，両手で触れたりすることで，児童が抵抗なく，楽しく取り組むことにつながった。

○　歌の間奏の際に，担任が児童の様子を見ながら“Good job.”などのほめ言葉を使ったり，「次はもっとスピードアップだよ。」と伝えたりすることができた。

●　教室前方に担任とALTどちらもが立っていて，進める役割を担うのではなく，担任とALTそれぞれの立ち位置と役割について，打ち合わせをしていく必要がある。

②　絵本の読み聞かせ活動　“From Head to Toe”について

○　座る＋聞く活動から，動く＋聞く活動を取り入れたことで，児童が動物になりきって，さらに楽しく活動する意欲につながった。

○　打ち合わせの中で，担任とALTの役割を明確に決めておくことができた。ALTが本を読む役割と動物の動きの真似をする役割，一方で担任が動物の動きの確認をする役割と児童の様子を見てほめる役割をするようにした。

○　本の中の英文の構成が，どの動物でも共通であった（動物の名前＋その動物ができること＋“Can you do it?”）ため，ALTの本の読み方と担任からの問いかけを，どの動物でも同じように進めることができた。そのため，新しい動物が登場しても，児童が抵抗なく取り組むことができた。

●　３名の児童が大勢の人の前で動物の動きを真似ることを恥ずかしがり，担任が「一緒にしよう。」と誘っても，最後まで断り続けていた。

ALTや担任が言葉だけでなく，大きな動きを取り入れることで，さらに楽しく活動ができるようにする工夫が必要であった。また，大きな動きを取り入れている児童を具体的にほめることで，「この動きがよいんだな。よし，やってみよう。」「私も○○さんみたいに動いてみよう。」と意欲づけをしていく必要があった。

③　１５分間の英語体験活動の展開について

○　毎時間同じパターンで挨拶をするうちに，担任が言っているのを真似て一緒に挨拶をしたり，自然と英語の挨拶をしたりする姿が見られるようになった。繰り返し行うことで，英語の挨拶表現に慣れ親しむことができた。

○　動物の動きの真似に入る前に，担任が体を触る部分を意図的に間違えたり，担任がどうすればよいのかわからずに困ったりしている場面(担任による意図的なデモンストレーション)を取り入れたりした。担任が意図的に間違えることで，その様子を見た児童が「先生，首だよ。」「首を曲げたらいいよ。」と動物の動きにつながる言葉を自由に発言することができた。また，担任による意図的なデモンストレーションを取り入れることで，児童一人一人が動物の動きについてイメージし，自分にもできそうという意欲をもって動物の動きの真似に入っていくことにつながった。

●　ALTを教室に呼ぶときの方法や，絵本の出会わせ方を工夫することで，児童にとって興味・関心が持続する英語体験活動となるようにしていく必要がある。

第２学年　英語体験活動　学校裁量（朝の時間）実践記録①

指導者　山﨑　尋
千田　美智子
東條　仁美
日本人 ATL　江口　ひとみ

１　活動名　いろんな果物　英語でチャレンジ
“A Beautiful Butterfly”（中本　幹子　アプリコット出版）

２　指導観

○　本学級の児童（男子１４名，女子１４名，合計２８名）に英語体験活動に関する意識調査を行った。「英語の活動は好きですか」の問いに対して，２５名の児童が「好き」「どちらかというと好き」と答え，３名の児童は「嫌い」「どちらかというと嫌い」と答えた。好きな理由として，「クイズやゲーム，音楽，絵本が楽しい」「色々な英語を教えてもらえること」などを挙げた。嫌いな理由としては，「言葉を覚えることが難しい」「言葉を繰り返し言うことが面白くない」などを挙げた。

朝の学習時間を活用した，実際の英語体験活動では，外国人留学生による英語の絵本の読み聞かせを，学級児童の全員が毎回楽しみにしている様子がうかがえる。読み聞かせの活動が始まると，留学生の読み進める絵本に，夢中になって本に覗き込む姿が見られる。読み手が外国人であることや，英語で書かれたものであることが，日本語による絵本の読み聞かせ以上に，児童にとっては興味が増す要因になっているようである。

これらのことから，本学級の児童の多くは，英語体験活動に興味・関心をもって，積極的に取り組んでいることが分かった。その一方で，不慣れな言語を用いての活動に難しさを感じ，活動に消極的になっている児童が数名いることも分かった。本学級の全ての児童が，英語で楽しく活動できるような指導の工夫が必要であると考える。

○　本活動では，外国人による英語の絵本の読み聞かせの活動や，英語の歌やチャンツの活動を体験することを通して，英語の表現や外国の文化への興味・関心をもつことをねらいとしている。また，来年度，先行実施として行う中学年の外国語活動へスムーズにつなぐこともねらいとしている。果物を英語で言ったり聞いたりする本活動は，カタカナ語として日常で見聞きする機会が多く，児童にとっては親しみやすいため，抵抗なく英語を用いた活動を行うことができると予想される。また，絵本を使った活動は，英語を聞くだけでなく，絵やイラストを視覚的に捉えて，英語の意味を推測する体験を，自然と行うことできるという利点がある。加えて，同じ表現が繰り返し出てくるため，語彙や表現を自然と身に付けやすく，これから外国語活動を学習する児童に適した教材であると考える。

○　活動するにあたっては，絵本“A Beautiful Butterfly”の読み聞かせや，絵本の巻末にある“Action colors”の替え歌，ゲーム“Fruit basket”等を通して，様々な色の果物を英語で言ったり聞いたりする活動を行う。

絵本“A Beautiful Butterfly”の読み聞かせ活動では，チョウの幼虫が食べた果物を，色を手がかりに当てる活動を取り入れる。物語の展開に興味をもつようにしながら，色や果物などの英語表現に自然と慣れ親しむようにしたい。また,絵本の巻末にある“Action colors” の曲のメロディーに乗せて,色や果物を英語で言う活動を行うことで,楽しみながらそれらの表現に親しむようにする。ゲーム“Fruit basket”では，普段学級活動で行っている「フルーツバスケット」を，英語の絵カードを使って行う。

３　英語体験活動の目標

英語を聞いたり，言ったりする活動を通して，体験的に英語に慣れ親しみ，英語への意欲や関心をもつようにする。

４　活動計画

月	絵本の名前	活動内容
４月	“From Head to Toe”	・身体の名前　英語でチャレンジ
５月	“Today Is Monday”	・曜日の言い方　英語でチャレンジ
６月	“A Color of His Own”	・いろんな色　英語でチャレンジ
７月	“Polar Bear, Polar Bear What Do You Hear?”	・いろんな動物　英語でチャレンジ
９月	“Dear Zoo”	・いろんな動物　英語でチャレンジ
１０月	“A Beautiful Butterfly”	・いろんな果物　英語でチャレンジ
１１月	“The Carrot seed”	・いろんな野菜　英語でチャレンジ
１２月	“A Cheese and Tomato Spider”	・食べ物，生き物　英語でチャレンジ
１月	“Five　Little　Monkeys”	・英語で One　Two…１０までの数
２・３月	“How are you?”	・英語でコミュニケーション 気持ちを表そう

５　本時の学習

（１）日時　　平成２９年１０月４日（水）　　１３：４５～１４：００　　２の１教室

（２）目標　　英語を使った活動を通して，進んでいろんな果物を英語で言おうとする。

（２）準備　　絵カード　絵本　　ＣＤ

（４）展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点　【観点】評価規準（評価方法） ★　特別な教育的支援を要する児童への特に困難とされる場面での支援のポイント
１　挨拶をする。 HRT : Hello everyone. C　: Hello. ALT : How are you? C　: Fine. / Good. ALT :OK. Let’s start English time.	○　元気よく楽しそうに挨拶をする。（担任，ALT）
２　本時の活動を確認する。 きょうのかつどう ① あいさつ　④　ふりかえり ② うたタイム　⑤　あいさつ ③ 絵本タイム	○　ミニホワイトボードを使って本時の内容を伝える。（担任）

3　絵本“A Beautiful Butterfly”の巻末にある Action colors の替え歌を歌う。

4　絵本“A Beautiful Butterfly”を使った活動をする。

5　振り返りをする。

6　挨拶をする。

T：Good-bye everyone.
C：Good-bye ～sensei.
T：See you.
C：See you.

○　ALT と一緒に絵カードを見せながら，色と果物を英語で言う。

○　身体表現の手本を示し，リズムに乗って楽しく歌う。（担任，ALT）

○　前時で読んだ内容を想起するように絵本の前半をもう一度読む。（ALT）

○　絵本の後半を読んで，色から何を食べたのかを答えさるようにし，繰り返しの表現を楽しむようにする。

HRT：What’s color ？　　何色のチョウになったかな
C：　pink
ALT：I have to eat something pink.What is it?
C：　peach
ALT：That’s right. Pink peach.
C：Pink Peach. Yum-yum-yum. It’s good.

○　意欲的に活動に参加していたことなどを褒める。（担任，ALT）

６ 実践のまとめ

（1）　光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　学習活動の可視化

活動内容をホワイトボードに示して，学習活動を見通せるようにした。それぞれの活動が終わるごとに，担任が花丸を描き加えることで評価の可視化ができるようした。実際にアンケートの結果からも，ほぼ全員の児童が「分かりやすかった。」と答えている。学習活動を可視化することによっ

学習活動と評価の可視化

て，達成感を味わいながら，意欲的に次の活動に取り組むことができたといえる。

◎　コミュニケーションのポイントを示した掲示物

本校では，円滑なコミュニケーション活動を行うためのポイントをホワイトボードを使って掲示している。低学年の児童向けのポイントとしては「元気よくスマイルで」「目で見る」「耳で聞く」「ジェスチャー」の４点とした。アンケートでも，全員の児童が「ポイントを意識しながら英語を言ったり聞いたりすることができた」と答えている。本時の活動後に，これらのポイントが達成されたかどうかを児童と一緒に評価・確認するようにしたことで，積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童が増えてきた。

コミュニケーションボードの活用

◎　教室英語（褒め言葉・励ましの言葉を中心に）

毎時間，活動の始まりや終わりの挨拶を英語でやり取りした。自然と“How are you?”“I’m fine.”“See you.”などの教室英語が浸透していった。本活動後も，「英語であいさつできて楽しかった。」「江先生に英語でほめてもらえて嬉しかった。」という感想が見られた。児童同士で“Good ”“Nice”などの英語を使い，お互いを褒め合う姿も見られるようになった。担任が積極的に“Very good”や Good job.” などの誉め言葉を使うことで，児童の意欲を高めることにつながっていった。

挨拶の絵カード掲示

◎　絵本の活動

本活動では，絵本“A Beautiful Butterfly”の読み聞かせを繰り返し行った。チョウの幼虫が食べた果物を，色を手がかりに当てる活動を取り入れ，色や果物などの英語表現に自然と慣れ親しむようにした。実際に，ALT が“I have to eat something pink. What is it?”と聞くと“Peach”“Yum-yum-yum. It’s good.”と，繰り返しのリズムを楽しみながら元気よく英語で答える児童の姿が見られた。また，物語の前半で話を区切り，「最後は何色のチョウになったのかな」と投げかけたことで，児童はわくわくしながら話の続きを想像し，意欲的に絵本の活動に取り組むことができた。

絵本を楽しむ児童の姿

◎　学級担任と ALT の役割を意識した授業展開

「うたタイム」の前に，前活動の振り返りとして ALT が絵カードを使いながら色当てクイズを行い，９つの色を英語で確認した。その後，ALT，担任共に“Action colors“のメロディーに合わせて身体表現の手本を示した。児童も，手本を見てジェスチャーを入れながら，リズムに乗って楽しく英語で歌うことができた。「絵本タイム」では，主に ALT が中心となって読み聞かせを行った。担任は，「何色のチョウになったかな」など，児童にとって分かりにくい言葉を日本語で補足説明を加え，内容を理解できるようにした。アクティビティーでは，担任が児童役となり，幼虫が果物を食べる場面のデモンストレーションを行った。担任が手本を示すことで，活動に見通しをもち，「自分達もやってみたい」という児童の意欲へとつながった。

担任と ALT のやり取りを楽しむ児童の姿

（２）成果と課題（○成果　●課題）

○　本活動までに，「子犬のビンゴ」や「ロンドン橋」の曲に合わせて，リズムに乗って英語で歌うことを楽しんできた。「ロンドン橋」では，色や動物バージョンにした替え歌なども，英語で歌ってきた。本活動においては“Action colors“の曲に合わせて楽しく歌い，色や果物などのたくさんの英語に慣れ親しむことができた。歌やチャンツなどは，低学年の児童にとって英語に親しむために効果的であったといえる。

○　絵本“A Beautiful Butterfly”では，最後は何色のチョウになったのかは描かれていない。読み聞かせの後，何色のチョウになったのかを想像し，白いチョウに色を塗る活動を行った。一人

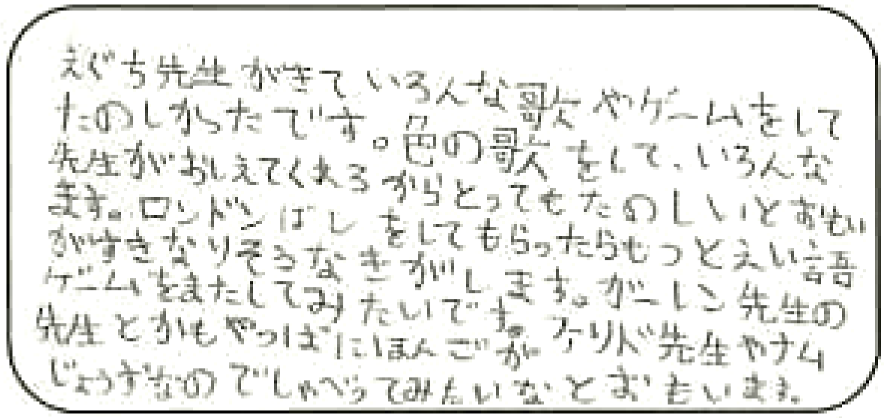
ひとりが思い思いの色を塗り，自分だけのチョウを完成させることができた。さらに，「メロンを食べたから緑になりました。」「トマトを食べたから赤になりました。」など，絵本に出てきた果物から語彙を広げ，色々な食べ物と色を結び付けて発表することもできた。

児童が作ったチョウ

絵本を使った活動は，絵を視覚的に捉えて英語の意味を推測したり，同じ表現を繰り返し言ったりすることができるので，児童にとって分かりやすく，語彙や表現を自然と増やすことにつながっていった。

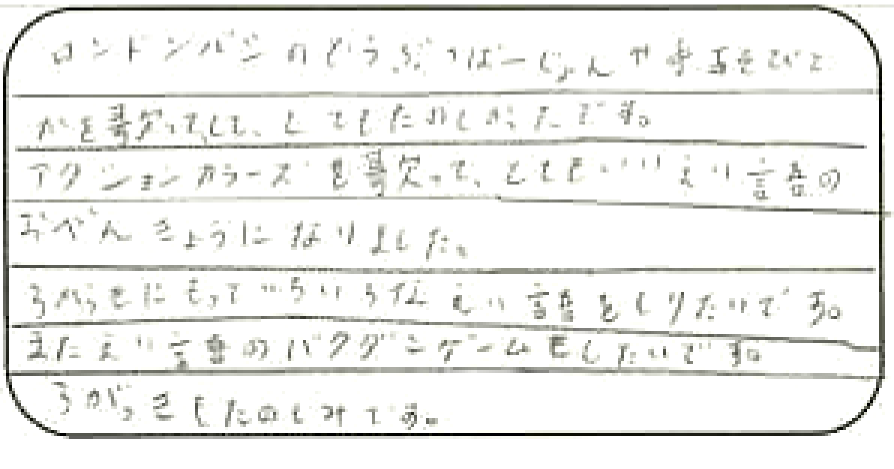
○ 英語体験活動後の振り返りでは,「フルーツバスケットの時に英語で言えて楽しかった。」「栗をチェスナッツと言えてよかった。」など，たくさんの言葉を英語で言えるようになり嬉しく思っている児童の様子が分かった。給食時間や休み時間などでも，友達同士で色や果物などを英語で言い合う姿も見られるようになった。ALT や担任が積極的に英語で褒め言葉を使ったことも,児童の自信になり意欲を高めることにつながったと考える。

● 英語体験活動の中で「ゲーム」を一番楽しいと感じている児童が多い。振り返りでも「今度はフルーツバスケットのアニマルバージョンがしたい」「英語のカルタをしてみたい」など，ゲームに興味をもつ記述が多かった。今後は，このようなゲームなどの活動を多く取り入れ，児童が興味や関心をもって英語体験活動を楽しめるようしていきたい。中学年の外国語活動につなげるためにも，見通しをもって活動計画を立てることが大切である。まずは,担任と ALT の役割を明確にして活動内容を見直し，効果的な指導を行えるようにしていきたい。



えぐち先生がきていろんな歌やゲームをしてたのしかったです。色の歌をして、いろんな先生がおしえてくれるからとってもたのしいとおもいます。ロンドンばしをしてもらったらもっとえい語がすきなりそうなきがします。ゲームをまたしてみたいです。かーにこ先生の先生とかもやっぱにほんごがケリド先生やナムじょうずなのでしゃべってみたいなとおもいます。

活動後の児童の感想　①



ロンドンバシのどうぶつばーじょんや[illegible]とかを歌ってとてもたのしかったです。
アクションカラーズを歌って、とてもいいえい語のおべんきょうになりました。
これからもっといろいろなえい語をしりたいです。
またえい語のバクダンゲームをしたいです。
これからもたのしみです。

活動後の児童の感想　②

第２学年　英語体験活動　学校裁量（朝の時間）実践記録②

指導者　東條　仁美
山﨑　尋
千田　美智子
ALT　Rosemary Bannerman

１　活動名　いろんな果物　英語でチャレンジ
“ A Beautiful Butterfly”（中本幹子　アプリコット出版）

２　指導観

○　本学級の児童（男子１４名，女子１４名，合計２８名）は，朝の学習時間の英語体験活動における ALT や外国人留学生による英語の絵本の読み聞かせを，とても楽しみにしている。読み聞かせの活動が始まると，夢中になって本を覗き込む姿が見られ，読み手が外国人であることや絵本が英語の文字で書かれたものであることが，児童にとっては，日本語による絵本の読み聞かせ以上に興味をもつことにつながっているようである。意識調査の「英語の活動は好きですか」の問いに対しても，２６名の児童が「好き」「どちらかというと好き」と答えた。好きな理由として，「クイズやゲーム，音楽，絵本が楽しい」「色々な英語を教えてもらえること」などを挙げており，楽しんで活動に取り組んでいることがうかがえる。

一方で，英語という児童にとって不慣れな言語を用いての活動に難しさを感じ，活動に消極的になっている児童も数名いる。全ての児童が英語を用いた活動に，さらに楽しく取り組めるような指導の工夫が必要であると考える。

○　本活動は，ALT や外国人留学生による歌やチャンツ，絵本の読み聞かせなどの活動を通して，英語を聞いたり,真似をして言ったりする活動を楽しむ中で,英語に親しむことをねらいとしている。また，中学年の外国語活動へスムーズにつなぐことをねらいとしている。

本活動で扱う果物の名称は，片仮名語として，日常で見聞きする機会が多く，児童にとっては親しみやすいため，果物の英語を聞いたり言ったりすることにあまり抵抗はないと考える。絵本“A Beautiful Butterfly”を使った活動は，読み手が発音する英語の意味を，絵やイラストを見ながら推測することができるという利点がある。また，この絵本には，同じ表現が繰り返し出てくるため，それらの表現を英語で聞いたり言ったりする機会が自然と多くなり，英語表現に十分に慣れ親しむことができる教材であると考える。

○　指導に当たっては,絵本“A Beautiful Butterfly”の読み聞かせ活動や巻末にある“Action Colors”の替え歌，また，フルーツバスケットのゲームを通して，様々な色の果物を英語で言ったり聞いたりする活動を行う。

絵本“A Beautiful Butterfly”の読み聞かせ活動では，チョウの幼虫が食べた果物を，色を手がかりに答える活動を取り入れることで，物語の展開に興味をもつようにしながら，色や果物の英語表現に自然と慣れ親しむようにしたい。さらに，絵本 “A Beautiful Butterfly”の発展的な活動として動物を取り上げ，動物が食べた果物を，色を手がかりに答える活動を取り入れ，英語でのやりとりを楽しむようにしたい。また，“Action Colors”を基に，曲のメロディーに乗せて色や果物を英語で言う活動を設けることで，楽しみながら自然とそれらの表現に慣れ親しむようにしたい。フルーツバスケットのゲーム活動では，日本語で行っているフルーツバスケットを，段階的に英語を使って行うようにすることで，絵本やチャンツで覚えた果物や動物の英語を進んで使えるようにしたい。

３　英語体験活動の目標

英語を聞いたり，言ったりする活動を通して，体験的に英語に慣れ親しみ，英語への意欲や関心をもつようにする。

４　活動計画

月	絵本の名前	活動内容
４月	“From Head to Toe”	・身体の名前　英語でチャレンジ
５月	“Today Is Monday”	・曜日の言い方　英語でチャレンジ
６月	“A Color of His Own”	・いろんな色　英語でチャレンジ
７月	“Polar Bear, Polar Bear What Do You Hear?”	・いろんな動物　英語でチャレンジ
９月	“The Carrot seed”	・いろんな野菜　英語でチャレンジ
１０月	“Dear Zoo”	・いろんな動物　英語でチャレンジ
１１月	“A Beautiful Butterfly”	・いろんな果物　英語でチャレンジ
１２月	“A Cheese and Tomato Spider	・食べ物，生き物　英語でチャレンジ
１月	“Five Little Monkeｙs”	・英語で One Two…１０までの数
２・３月	“How are you?”	・英語でコミュニケーション 気持ちを表そう

５　本時の学習

⑴　日時　　平成２９年１１月１７日（金）　１４：００～１４：１５　　２年２組教室

⑵　目標　　英語を使った活動を通して，進んでいろんな果物を英語で言おうとする。

⑶　準備　　絵カード　絵本　ペープサート

⑷　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点 ★　特別な教育的支援を要する児童・生徒への支援
1　挨拶をする。 HRT ： Hello everyone. C　： Hello. ALT ： How are you? C　： Fine. / Good. ALT :OK. Let’s start English time.	○　元気よく楽しそうに挨拶をする。(HRT, ALT)
2　本時の活動を確認する。 今日のかつどう ⑥ あいさつ　④ ふりかえり ⑦ うたタイム　⑤ あいさつ ⑧ 絵本タイム	○　外国語の体験活動なので，めあては黒板には書かずにホワイトボードを活用して活動内容を示す。 ○　ミニホワイトボードを使って本時の内容を伝える。(担任)

3　絵本“A Beautiful Butterfly”の巻末にある“Action colors”の替え歌を歌う。

4　絵本“A Beautiful Butterfly”を使った活動をする。

HRT：What's this?
C: Elephant.
ALT: I want to be a pink elephant.
I have to eat something pink.
HRT：何食べたのかな？
C：Pink peach.
ALT：That's right. Pink peach.
C：Pink Peach. Yum-yum-yum. It's good.

5　振り返りをする。

6　挨拶をする。

T ： Good-bye everyone.
C ： Good-bye ～sensei.
T ： See you.
C ： See you.

○　絵カードを使いながら一緒に歌う。(ALT)
○　児童の様子を見取りながら一緒に歌う。(担任)

○　前回,読んだ絵本の内　容を思い出させため，もう一度,読むの後,児童が作った動物のペープサートを使って絵本を基にしたやりとりを行う。(担任，ALT)

★　前方に座っているので，指示の内容を理解しているか再確認の声かけをする。

○　できたことや楽しかったことなどを発表するように促す。また，意欲的に活動に参加していた児童を褒める。(担任，ALT)

6　実践のまとめ

（2） 光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎学習活動の可視化

本校では，外国語活動と同様に低学年用に言葉を分かりやすくして学習の流れをホワイトボードに示している。本時でも，どのような活動をしていくのか児童が見通せるようにした。第２学年では，それぞれの活動が終わるごとに，活動の取り組みがどうだったのか

学習活動と評価の可視化

ＡＬＴに評価してもらい，担任が花丸を描き加えることで評価の可視化ができるようした。このような取り組みによって，次に何をするか分かるので，９２％の児童が「分かりやすい」と答えた。児童の姿を客観的にとらえて評価できるとともに，児童にとっても次の活動への意欲を高めることができた。

◎コミュニケーションのポイントを示した掲示物

本校では，円滑なコミュニケーション活動を行うためにコミュニケーションのポイントについて，ホワイトボードを使って掲示している。低学年の児童向けにコミュニケーションのポイントは「スマイル　げんきよく」「目で見る」「耳で聞く」「ジェスチャー」の４点とした。コミュニケーションのポイントを提示したことで，７５％の児童が「意識して活動ができた」と，答えた。活動前後に，これらのポイントが達成されたかどうか児童と一緒に評価・確認をすることで，意欲的に活動に取り組む児童が増えた。

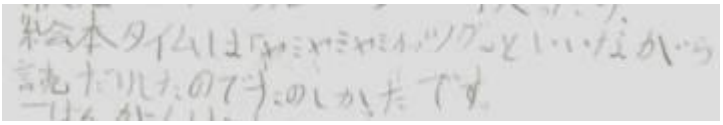
コミュニケーションのポイントの提示

◎教室英語（褒め言葉・励ましの言葉を中心に）

教師が“Stand up.”　“Sit down”“Are you ready?”などの英語表現を毎回，使うことで低学年の児童でも理解して活動に取り組むことができた。その際，教師がジェスチャーを入れて英語を使うと，より多くの児童が指示を理解することができた。英語で元気よく挨拶ができたときや歌を英語で上手に歌えた時などに，教師が積極的に“Very good.”.や”Good job.”などの誉め言葉を使うことで,児童の意欲を高めることができた。また,教師が英語で褒めた後に,児童同士で“Good job.”とお互いを褒め合う姿も見られるようになった。

◎絵本の活動

絵本の活動は話の展開が気になり，楽　しみにしている児童が多い。本時では，絵本“A Beautiful Butterfly”を通して，色や果物の英語表現に慣れ親しんだ。チョウの幼虫が果物を食べる際に言うセリフ“Yum-yum-yum. It's good”は，リズムがあるので児童は楽しんで英語を言うことができた。また，多くの児童が挿絵の助けを借りながら,教師の英語を聞き,英語を繰り返し言ったり,知っている英語を言ったりした。このことから，児童自身が「英語を聞いて分かる」という体験をし，絵本を効果的に活用することができた。


絵本の活動が楽しいという児童の感想

◎学級担任（Ｔ１）とALT（Ｔ２）の役割を意識した展開

それぞれの役割について，打ち合わせを密に行って本時を実践した。歌の活動では，ALT は児童の手本となってもらうために児童の正面に立ってもらい，児童と一緒に歌を歌ってもらった。その際，学級担任は特別な支援が要する児童や苦手意識をもつ児童のとろへ行き，声かけなどの支援を行うようにした。

ALT とのデモンストレーション様子

絵本の活動では，主に ALT に中心になって読んでもらい，学級担任は児童にとって分かりにくい部分「幼虫は何の果物を食べたかな」などを簡単な言葉で質問や説明をするという役割に分けて実践した。また、絵本を使った活動では、ペープサートを使って、ALT が児童役となりデモンストレーションを見せることで活動に見通しをもたせた。

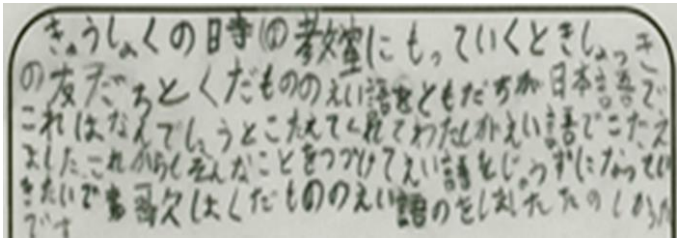
他にも、それぞれの活動後や振り返りの際に，ALT に英語で褒めて　もらい児童の意欲を高めるようにした。

（２）成果と課題（○成果　●課題）

○　最初に”A Beautiful Butterfly”の巻末にある Action Color を使って色の歌を繰り返し歌い、そ

の後「色＋果物」を組み合わせて歌うことができた。また，リズムや身体表現を入れることで，児童は多く英語に親しむ姿があった。

○　英語体験活動の時間だけではなく，給食時間などの他の時間で児童が色や果物の英語を友達同士で言い合う姿も見られるようになった。



活動後の児童の感想

● 色や果物の英語を覚えなければならないと思い，英語に対する難しさや不安を感じている児童が少数見られた。英語を正しく言うことにこだわるのではなく，楽しむことが大切という指導を繰り返す必要があった。また，アンケート結果によると，多くの児童が英語を使ったゲームに興味・関心があるとの傾向が分かった。児童が興味や関心をもって取り組める活動を計画していくようにしたい。

● 学級の２６名の児童が３年生で始まる外国語活動を楽しみにしている。どの児童も興味をもつように工夫するとともに，中学年の外国語活動へ円滑につなげるための研究を続けていく必要がある。

第３学年　外国語活動実践記録①

指導者　　川本　麻美
福島　由美子
小林　恵子
ALT　Ga-Yen Dang

１　単元名　What do you like?　友だちにインタビューしよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１５名，女子１４名，合計２９名）に対して，外国語活動に関する意識調査を行った。「外国語活動の時間は好きですか」という問いに対して，１７名が「好き」，７名が「どちらかと言うと好き」と回答した。その理由として，「いろいろなゲームができる」「歌やチャンツが楽しい」「難しいけど，いろいろ覚えられて楽しい」という理由が挙げられた。これは，学習中，多くの児童が楽しそうにゲームやチャンツに取り組んだり，ＡＬＴの発音を聞いて，真似して英語を言ったりする姿からも感じられる。また，反対に，「どちらかと言うときらい」，「きらい」と回答した児童は５名であった。理由としては，「何を言っているのか分からない」「ゲームのときにみんながうるさくなる」ということが挙げられた。

これらのことから，ゲームや歌，チャンツを通して楽しく学習している反面，ゲーム＝遊びになっている児童もいるのではないかと考えられる。また，外国語活動を通して，誰とでも気軽に話せるようになりたいと思っている児童が１４名だった。外国語に苦手意識をもっていても，気軽に話せるようになりたいと思っている児童もいることから，学習を通して，積極的にコミュニケーションを図る楽しさを味わおうとしていることが分かる。

○　本単元は，様々な色や形を英語で言ったり聞いたりする活動を通して，日本語と英語の音には違いがあることに気付くようにすることをねらいとしている。また，“What ～ do you like?”，“I like ～.”の表現を用いて，相手の好みを尋ねたり，自分の好みを相手に伝えたりする活動を通して，英語表現に慣れ親しむとともに，伝え合う喜びを味わうことでコミュニケーションへの意欲を育てることをねらいとしている。本単元で取り扱う，自分の好きな色や形を使ったＴシャツを紹介する活動では，進んで，自分の好きな色や形の英語での言い方を知ろうとする意欲を高めることができると考える。また，紹介する相手を設定することで，活動に相手意識や必要感をもつようにすることができると考える。本単元のコミュニケーション活動を通して，友達や自分自身への理解をさらに深めることができると考える。

なお，本単元では，英語の絵本の読み聞かせの時間を設定している。読み聞かせの活動を通して，児童がますます英語の学習に興味・関心をもつとともに，自然と本単元に関わる言葉や表現に慣れ親しむことができると考える。

○　指導に当たっては，まず，様々な形のイラストがプリントされたＴシャツ見ながら，英語を聞いて一致させるＴシャツクイズを行う。ここでは，クイズ形式でそれぞれの形を表す英語を聞くことで，楽しみながら形の英語での言い方を知り，自然と日本語と英語の音の共通点や相違点に気付くようにしていく。また，ポインティングゲームやミッシングゲームなど，段階的に様々なゲーム活動を設定し，表現への慣れ親しみをさらに深めるようにする。次に，好きなものは何かを友達に尋ねたり答えたりする表現を知る活動を基に，友達にオリジナルＴシャツをつくる活動を設定する。その際，必要感をもたせながら，“What ～ do you like?” を繰り返し言うことで，自信をもって英語を使って相手に尋ねたり答えたりすることができるようにしたい。最後に，“What ～ do you like?”“I like ～.” を使って友達にインタビューする活動を通して，積極的に他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を育てていく。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

〇　主体的・対話的な深い学びの工夫について

本単元では，導入場面で，クイズやデモンストレーションを行い，これからどんな学習をして

いくのか考えるようにする。展開場面では，ゲームやＴシャツづくりを行い，好きなものを尋ねたり，答えたりする。この時，ペア，グループ，クラスと関わる人数を増やすことで，慣れ親しんだ表現を使って，積極的に活動できるようにする。

○　学習評価の工夫について

振り返りシートとゲームなどの活動での児童の様子を見取る。進んで活動に取り組んだか，学習のめあてが達成できたかを自己評価するようにして，授業の感想（新しい発見や学んだこと）を振り返りシートに記入するようにする。インタビュー活動では，ジェスチャーを交えて表現したり，インタビューに答えたことに対して，相づちを打ったりすることにより，さらに豊かなコミュニケーションを図ることができているかについて評価する。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　好きなものについて，積極的に尋ねたり答えたりしようとする。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　色や形を，好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しむ。
言語や文化に関する気付き【気】	○　色や形などの言い方で，日本語と英語の音の違いに気付く。

５　単元計画（総時数４時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準〈方法〉
1	日本語と英語の音の違いに気付き，形の言い方を知る。 ○Ｔシャツクイズ①をする。 ○形の言い方を知る。 ○ポインティングゲームをする。 ○Ｔシャツクイズ②をする。 ○ミッシングゲームをする。(形) ○絵本の読み聞かせをする。 「Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?」 ○振り返りをする。			○	形の言い方のカタカナ言葉と英語の音の違いに気付いている。 〈発言分析・振り返りカード分析〉
2	形の言い方に慣れ親しみ，好きなものは何かを尋ねる表現を知る。 ○形の言い方の復習をする。 ○ポインティングゲームをする。 ○ミッシングゲームをする。(色と形) ○チャンツをする。 “What shape do you like?” ○オリジナルチャンツをつくる。 “What color do you like?” “What animal do you like?” ○絵本の読み聞かせをする。 「Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?」		○		形を言ったり聞いたりしている。 〈行動観察・振り返りカード点検〉

	○振り返りをする。				
3	形の言い方や，好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しむ。 ○チャンツをする。 “What shape/color do you like?” ○絵本の読み聞かせをする。 「Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?」 ○友達にTシャツをつくる。 ○振り返りをする。		○		好きな色や形は何かを尋ねたり答えたりしている。 〈行動観察・振り返りカード点検〉
4 （本時）	好きなものについて，積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 ○チャンツをする。 “What shape/color do you like?” ○絵本の読み聞かせをする。 「Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?」 ○インタビュー活動をする。 ○友達の好きなものを紹介する。 ○振り返りをする。	○			進んで好きなものを尋ねたり，答えたりしている。 〈行動観察・振り返りカード点検〉

６　本時の学習

（1）日時　　平成２９年１０月１６日（月）　第６校時　３の３教室

（2）目標　　好きなものについて，友達に尋ねたり，答えたりする活動を通して，進んで他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

（3）準備　　形，色フラッシュカード，絵本，ワークシート，振り返りシート

（4）展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点　【観点】評価規準＜方法＞ ★　特別な教育的支援を要する児童への支援	
	HRT	ALT
1　あいさつをする。	○　英語であいさつをして，楽しい雰囲気をつくる。	○　ジェスチャーを取り入れ，楽しく表現する。
2　チャンツをする。 What shape/color do you like? 	○　児童が好きな形や色を選ぶように声をかける。 ○　児童と一緒にチャンツを言う。	○　カードを見せながら，チャンツに出てくる言葉（形，色）を確認する。
3　絵本を聞く “Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?”	○　児童に，読めるところはALTと一緒に読むように促す。 	○　絵本の読み聞かせをする。

4　本時のめあてを確認する。

めあて　友だちのすきなものを，インタビューしてしょうかいしよう。

5　インタビュー活動をする。

・　動物と果物についてインタビューする。

・　中間評価後，様子を見ながら，形と色のインタビューを追加する。

・　合図があるまでたくさんの人に聞いていく。

6　友達の好きなものを紹介する。

・　友達の好きなものを日本語で紹介する。

7　本時の学習を振り返る。

○　ALTと共に，デモンストレーションをする。

＜デモンストレーション＞
ALT：Hello，〇〇先生.
担任：Hello，Ga-Yen 先生.
ALT：What fruit do you like?
担任：I like strawberry.
　　What animal do you like?
ALT：I like lion.
担任：Oh，I see. Bye.
ALT：Bye.

○　一つインタビューしたら，他の人にインタビューすることを伝える。

○　I like ～.と答えたものをワークシートに書き込んでいくときは日本語で書いてよいことを伝える。

★　活動中は，児童の行動を見取る。A児の活動が困難な場合は，声かけをしたり，他の児童とつなげるなどの支援をする。

○　積極的に活動している児童を中間評価で褒め，全体によりよい行動を示す。

【コ】進んで好きなものを尋ねたり，答えたりしている。
＜行動観察・振り返りカード点検

○　積極的に発表した児童をほめる。

○　めあてに沿った活動ができたか確認する。

○　尋ね方や答え方が分からない児童に助言をする。

７　実践のまとめ

（１）Ｂ研→Ａ研に向けての変更点

◎　学習の場の設定

これまでの学習では，机と椅子を使用していた。本時では，インタビュー活動が中心となるため，Ｂ研では机を使用せず，椅子に座り探検バッグを使用した。探検バッグはインタビュー中に記入できてよかったが，中央に椅子があると活動スペースが思ったほど確保できなかった。そのため，Ａ研では探検バッグを使用し，机と椅子は使用せず床に座ることにした。机と椅子がないことで児童は自由に動き回ることができ，たくさんの友達や先生と積極的にコミュニケーションを図ることができた。

◎　中間評価を取り入れる

インタビュー活動の際，Ｂ研では動物，くだもの，色，形の４種類の中から児童が聞きたいものを自由に選んでインタビューをしたが，ワークシートの記入欄が多く活動時間内で記入できた児童がほとんどいなかった。そのため，協議会で聞く項目か記入欄の数を減らす，「全部書けなくてもいいよ。時間内に何人の人とできるかな。」と子どもの意欲を高めるような声かけをするなどの改善策が出された。そこでＡ研では，はじめに声かけを行い，インタビュー活動の途中で中間評価を行った。中間評価前は動物とくだものの２つについてインタビューを行い，中間評価後に形，色を加えた４つについてインタビューするようにした。中間発表で友達がどのように言っているのか，ジェスチャーしているのかを見ることができ，その後の活動でそのよさを取り入れようとしている姿が多く見られるようになった。また，「笑顔で，元気よく」「たくさん」「男女仲よく」と，コミュニケーションボードで再確認し，「ワークシートの表の最後まで行きたいね」と声をかけることで，インタビュー活動の後半ではよりよいコミュニケーションを心がけ，意欲的に取り組む児童の姿が多く見られるようになった。

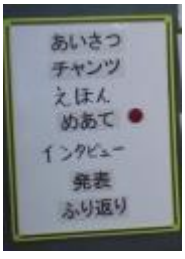
中間発表の様子

コミュニケーションボード

（２）光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　学習活動の可視化

学習活動の項目の横に磁石を貼って今何をしているのかを示した。また，活動の流れをはじめから掲示しておくことで，今日は何をするという本時の展開を見通すことができていた。いつもは「アクティビティ」となっているところが本時では「インタビュー」となっていたが，児童はすぐに気付き，「今日はインタビューをするんだ。」「発表もある。」という声があがった。



学習活動の可視化

◎　絵本の活用

本単元から，“Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?”を読んでいた。同じ絵本を何度も読むことで，児童は繰り返し出てくるフレーズをＡＬＴやＨＲＴと一緒に言ったり，ジェスチャーを付けたりして楽しんでいた。絵本のページを少しずつめくることで，「次は何の動物だろう。」「英語で何て言うんだったかな。」と児童の興味をひくことができた。児童は動物の名前を英語で言おうと考えたり，日本語で言った後，友達やＡＬＴが言った英語を聞いて「あっ，そうか。」と納得したりと，教師の質問に対して，英語や日本語で積極的に答えようとしていた。絵本の内容だけでなく，“What’s color?”“How many lines?”など，これまでに学習したことを途中で質問することは，「今日は何を聞かれるんだろう。」と児童にとって毎回が新鮮な活動になった。

最初のページを使ったやりとりの場面

◎　デモンストレーションを取り入れた説明

インタビュー活動を始める前に，ＡＬＴとＨＲＴでデモンストレーションを行い，よくない例を見せた。何がよくなかったのかを児童に考えさせると，「目を合わせていない。」「先生の機嫌が悪そう。」「元気がない。」ということに気付くことができた。そこで，コミュニケーションのポイントである「元気よく，スマイル」「アイコンタクト」をボードで確認し，再度デモンストレーションを行った。そうすることで，インタビュー活動の見通しをもたせることができ，コミュニケーションのポイントの大切さに気付くことができた。

（3）成果と課題（○成果　●課題）

○　あいさつのときは，児童が自分の思いや考えをジェスチャーも交えながら自由に表現するようになった。発表場面では“Let me try.”と手を挙げて進んで発表しようとしていた。また，絵本やインタビュー活動の説明のときなども，“Me too.”“OK”などの英語をたくさん使っていた。これは，日頃から教師が進んでクラスルームイングリッシュを使うことで，児童も少しずつ英語を言うようになっていったと考えられる。

○　インタビュー活動のときに，身体でリズムを取りながら“What ～ do you like?”と尋ねている児童が多くいたので，チャンツが生かされていると思われる。

○　友達の好きなものを紹介する場面で，「～さんの好きな形はスクエアです。」と言った児童がいたので，「スクエアって日本語で何？どんな形？」と尋ねた。その児童はなかなか答えられなかったが，手で表現した。「これは日本語で何て言えばいいだろう」とさらに尋ねると，周りの児童が「正方形」と答え，みんなで学び合うことができた。

●　インタビュー活動で児童は意欲的に活動していたが，自分が尋ねるときは友達を見ていたが，友達が答えるときにはワークシートに記入することに一生懸命になり，ずっと下をむいてしまっていたところがある。相手が話をしているときこそアイコンタクトや相づちが必要であるので，“Bye.”と言った後でワークシートに書くようにすればよかった。

○　中間評価を行い友達のいいところを見ることで，その後の活動でそのよさを取り入れようとしている姿が多く見られるようになった。また，コミュニケーションボードでポイントを再確認することで，そのポイントを心がけ，意欲的に取り組む児童の姿が多く見られるようになった。

○　毎時間振り返りの時間をきちんと確保していたので，できるようになったことやがんばったことを少しずつ書けるようになってきた。その中で，本時では「インタビューをして友達のことをよく知れてうれしい」といった感想が多く出てきた。その児童の言葉を，教師が価値付けることが大切だと感じた。

児童の振り返り

●　友達の好きなものを紹介する場面で，数名の児童しか紹介（発表）ができなかった。めあての中に「紹介しよう」と入っている今回のような学習の場合は，一人一人が紹介できる時間が取れるときはよいが，時間がなく全体の場で発表できなかった児童の中にはめあてが達成できなかったと感じる児童がいるので，どのようにすればよいのか。

●　児童の振り返りシートを見ると，書くことが苦手な児童は「ゲームが楽しかった」などの感想だけになっていたり，めあてと整合性がとれていなかったりすることが多くある。どのようなことを書くとよいのか視点を明確にしたり，個別の声かけをしたりする必要がある。

第３学年　外国語活動実践記録②

指導者　小林　恵子
福島　由美子
川本　麻美
ALT　Rosemary Bannerman

１　単元名　What do you want?　クリスマスパーティーをしよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１５名，女子１５名,合計３０名）は，外国語活動に意欲的に取り組んでいる。外国語活動の学習以外でも，朝の会で英語の歌を体全体で表現しながら歌ったり，健康観察で“How are you?”と尋ねると，“I am ～.”で答えたりするなど，英語を表現する楽しさを生活の中でも味わっている。意識調査では，本学級の児童全員が外国語活動が好きと答えている。好きな理由として，「覚えた英語をゲームに使うことが楽しい」「何て言っているのかを考えることが楽しい」「英語を話すことができるから」などを挙げている。また，２学期からは，外国語活動の学習に毎時間，読み聞かせ活動を取り入れている。外国語の絵本は色も鮮やかで，児童は目を輝かせながら熱心に聞き入っている。担任が，ALT と一緒に英語で読み聞かせをすることで，児童にとっても英語がさらに身近なものになっている。

これまでの学習で身の回りで使われている大文字のアルファベットに気付き，隠れているアルファベットを見つけたり，チャンツを使ってアルファベットを言ったりして，文字と音に慣れ親しんできた。また，ALT による発音や放送から流れる英語を何度も耳にすることで，自分が日常的に使用している片仮名語と英語の発音は少し違うところがあることに気付いている児童も多い。

○　本単元では，日本語と外国語では，似たような発音でもアクセントが違うなど，日本語と外国語の音には違いがあることに気付くとともに，欲しいものを伝え合う活動を通して，欲しいものの言い方や尋ね方を理解して，コミュニケーションを図ることをねらいとしている。さらに，絵本を活用して，アルファベットの大文字を見付けたり，紹介したりすることで，アルファベットがいろいろな場所で使われていることに気付き，文字への興味を深めることができる単元となっている。

○　指導に当たっては，はじめに，本単元への学習意欲が高まるように，絵本“Today Is Monday”の読み聞かせの活動を取り入れ，絵本の内容から，自分たちの日常の話題（クリスマスプレゼントに何が欲しいか）へとつなげていく。事前に自分がほしい物についてのアンケートを行い，関心や意欲をもって，自分や友達の欲しい物を英語で言ったり聞いたりする活動ができるようにする。また,片仮名語と英語の言い方について,対比させながら言ったり聞いたりする活動を行い,自然と日本語と英語の発音の違いに気付くことができるようにする。

次に，かるたゲーム，ステレオゲーム等の絵カードを用いたゲーム活動を行い，“What do you want?”“I want ～.”などの表現について，楽しみながら慣れ親しんでいけるようにする。

最後に，自分の欲しい物についてサンタクロースに向けて絵カードを作成する。作った絵カードを見せながら，英語で発表する。ここでは，自分の発表を友達に聞いてもらったり，友達の発表を聞いたりする活動を通して，英語でコミュニケーションを図ることへの意欲を高めるとともに，自他のことを知り，互いに認め合う態度を育てるようにする。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

〇　主体的・対話的で深い学びの工夫について

新学習指導要領では，外国語活動の目標⑶「話すこと［発表］」イに，「自分のことについて，人前で実物などを見せながら，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。」と示されている。好き嫌いや欲しい物など，自分のことについて話したり，学級の友達について知ったりする機会であることから，話したり聞いたりすることに興味・関心が高まることを期待している。

そこで，本単元では，事前に自分が欲しい物についてのアンケートを行い，単元の導入時にお

いて，絵本“Today Is Monday”の読み聞かせの活動から，クリスマスプレゼントに何が欲しいかという話題につなげていくことで，関心や意欲をもって，自分や友達の欲しい物を英語で言ったり聞いたりする活動につながるようにする。

単元末の活動では，自分の欲しい物について，サンタクロースに向けて絵カードを作成する。その絵カードを用いて，全体の前で発表する活動を設定することで，自分の発表を友達に聞いてもらうだけでなく，友達の発表を聞いて，自他のことを知るよい機会にする。

○　学習評価の工夫について

気づきの振り返りカードの工夫を行う。その際，評価方法に示されているように，英語と日本語の物の言い方で気付いたことを書くようにする。ワークシートにもどの視点でどのように書くのかが分かるように予め書いておく。毎時間，振り返りカードを用いて学習の振り返りをする時間を設定する。「活動を楽しんだか」「進んで英語を言ったり聞いたりしたか」「めあては達成したか」などの質問に答えたり，感想について自由に記述したりすることで，児童が自己評価をして，学習効果を高めるだけでなく，教師が児童一人一人を評価するための資料の一つとして活用する。

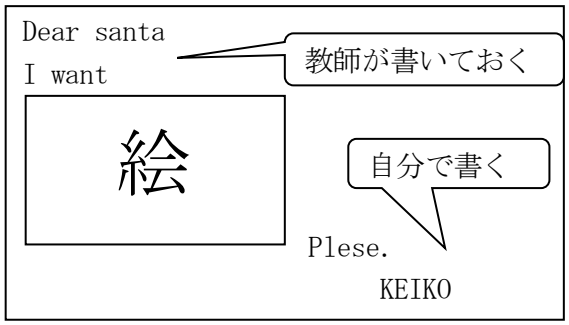
また，本時については，振り返りカードの振り返る視点や書き方を示すことで，日本語と英語の音の違いについて，気付いたことを記述できるようにする。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　自らアルファベットの大文字を読んだり，欲しいものについて言ったり尋ねたりしようとしている。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　欲しい物について言ったり，尋ねたりしている。
言語や文化に関する気付き【気】	○　日本語と英語の音の違いに気付いている。

５　指導計画と評価計画（総時数５時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準＜方法＞
1（本時）	日本語と英語の音声の違いに気付く。 ○　チャンツをする。(“Hello song”, “How many dog”, “Alphabet Chant”) ○　絵本を聞く“Today Is Monday” ○　ALT と HRT のデモストレーションから“What do you want?”“I want ～.”の意味を想像する。 ○　自分や友達欲しい物を英語で言う。 ○　「クリスマスプレゼントチャンツ」をする。 ○　日本語と英語の音の違いについて気付いたことを振り返りカードに書き，発表する。			○	日本語と英語の音の違いに気付いている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞
2	欲しい物について言ったり，尋ねたりする。 ○　チャンツをする。(“Hello song”, “How many dog”, “Alphabet Chant”) ○　前時の振り返りをする。 ○　「プレゼントかるたゲーム」をする。 ○　「ステレオゲーム」をする。 ○　絵本“Today Is Monday”を聞く。 ○　振り返りカードに書き，発表する。		○		欲しい物について言ったり，尋ねたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞

3	欲しい物について言ったり，尋ねたりする。 ○　チャンツをする。(“Hello song”，“How many dog”，“Alphabet Chant”) ○　「ほしいものあつめようゲーム」をする。 ○　絵本“Today Is Monday”を聞く。 ○　振り返りをする。		○		欲しい物について言ったり，尋ねたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
4	欲しい物を言ったり尋ねたり答えたりする。 ○　チャンツをする。(“Alphabet Chant”) ○　「ほしいものあつめようゲーム」をする。 ○　「クリスマスカードづくり」をする。  ○　絵本“Today Is Monday”聞く。 ○　振り返りをする。		○		欲しい物について言ったり，尋ねたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
5	自分の欲しい物について言ったり，尋ねたりする。 ○　チャンツをする。(“Alphabet Chant”) ○　自分の欲しい物について発表する。 ○　絵本“Today Is Monday”を聞く。 ○　振り返りをする。	○			○　進んで欲しい物について言ったり尋ねたりしようとしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞

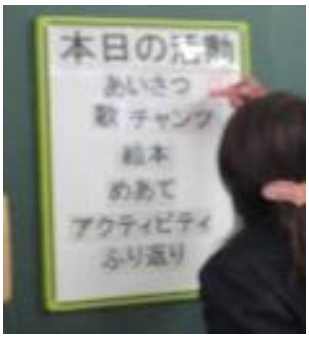
６　本時の学習

⑴　日時　　平成２９年１１月１７日（金）　１４：２０～１５：０５　　於　３年１組教室

⑵　目標　　欲しい物を英語で言う活動を通して，日本語と英語の音の違いに気付く。

⑶　準備　　サンタの帽子（教師用）　単語カード（１０語）　単語カード（子どもが描いたもの）
　　絵本“Today Is Monday”（エリック・カール　出版社 SCHOLASTIC）

⑷　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点　【観点】評価規準＜評価方法＞ ★　特別な教育的支援を要する児童への支援	
	HRT	ALT
1　歌を歌う。チャンツをする。 “Hello song”, “How many dog” “Alphabet Chant” 	○　児童と一緒に楽しく歌う。 	○　ジェスチャーを取り入れ，楽しく表現している児童を褒める。
2　絵本“Today Is Monday”を聞く。  ・　自分や友達の欲しい物を英語で言う。	○　ALT と交代で読む。日本語による解説はできるだけ行わず，英語で問いかけるように読むようにする。 ○　絵本の一部を，クリスマスパーティーの場面になるように細工する。	○　担任と交代で読む。キーワードとなる単語については，ゆっくりと読むようにする。 ○　ジェスチャーを取り入れながら，動物や食べ物の名前に親しむ。
めあて　　みんなのほしいものを英語で言ってみよう。		
3　本時の活動のめあてを確認する。		
4　自分や友達の欲しい物を英語で言う。 ・自転車・一輪車 ・ヘアーアクセサリー ・バッグ・カメラ ・ゲーム・ペット ・サッカーボール ・グローブ ・ローラーシューズ 等	○　デモンストレーションを見せ，ALT の英語での説明を補足する。 デモストレーション① HRT：先生，何がほしいですか。 ALT：“I want～.” HRT：聞きとれない姿を見せる。	○　デモンストレーションを見せる。ゆっくりと発音する。子どもたちが困っていたら繰り返し行う。
≪子どもが描いたプレゼント≫ 		○　何度も繰り返し発音することで，児童から音の違いに気付くことができるようにする。

≪カメラ≫　　≪ねこ≫

≪ブック≫　　≪ピザ≫

≪ハンバーガー≫≪自転車≫

5　「クリスマスプレゼントチャンツ」を作って言う。

6　振り返りをする。

・　振り返りカードに書く。
・　気付いたことや感想を発表する。

デモントレーション②（ALT がサンタクロース役をする。）
ALT:　“What do you want？”
HRT :“I want bag.”（あえて日本語の発音で言う。）
　　先生はバッグがほしいと言ったのに通じないな・・
HRT :「先生は何て話していたかな。」「みんな，何がほしい。」

○　デモンストレーションを見せる。

○　児童が欲しい物を取り上げることで，「英語で言ってみたい。」という気持ちをもたせるようにする。

○　デモンストレーションを見せる。

HRT:「バッグじゃなくて…。」
ALT :「bag.」

○　言い方が分からない児童に助言する。

○　デモンストレーションを見せる。

【気】日本語と英語の音の違いに気付いている。
＜発言分析・振り返りカード分析＞

○　進んで発音できた態度でよかったところをほめる。
○　めあてに沿った活動ができたかを確認する。

○　進んで発音できた態度でよかったところをほめる。

7　実践のまとめ

（1） 光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　学習活動と評価の可視化

スタンダードを表示したボードが大きく，言葉だけでなく絵もあったので、分かりやすかった。常に児童が意識できるように，些細なことでも「元気に言えたね。」「○○さんは、笑顔がいいね。」と伝えるようにした。さらに当日は，「ジャスチャー」も付け加えられたが，児童がすぐに気付き，「ジェスチャーはできているね。」という声もあがった。３年生の児童にとっては，文字を読むのではなく，「イラストを見る」ということで，理解することが多い。だからこそ，ボードを見ながら，「今はこれができたね。男の子も女の子も一緒に楽しく活動しているね。」と声をかけることで児童の意欲が高まり，他の児童も真似することができ効果的だった。

コミュニケーションボード

◎　絵本の活用

前単元から“Today Is Monday”を読んでいた。これまでに学習した大文字や色，形，などを質問するのに適していたからだ。当日の金曜日に合わせて金曜日のページから始めた。それから本時の「クリスマスパーティーをしよう」に合うように，挿絵にクリスマスツリーを付け加えたり，子どもたちが描いたプレゼントを貼り付けたりして，関心を持たせた。絵本の中から“Whats this？”などの質問には慣れていたので，クラスルームイングリッシュを活用するために，児童の生活に結びつける質問などを加えた。絵本の中にある色や形，動物だけでなく鳴き声や，ジェスチャーなども進んで行っていた。

パーティーの場面

◎　デモンストレーションを取り入れた説明

プレゼントチャンツを行う前に，学習への意欲が持てるように，絵本　からめあて，そして活動の流れへとつなげた。まずは，ＡＬＴと担任との会話の中で，担任がＡＬＴに伝えたいことが伝わらない場面を設定した。担任が困っている姿を見せることで，児童たちにも「なぜ」という疑問がわいてくると考えたからだ。先生の英語がＡＬＴに通じないということで児童は考えるようになる。そこで，何度もデモストレーションを見せることで「音の違いがある」ということに気付くことになる。正しい言い方を一緒に発音することで，先生と一緒に楽しく発音する、ＡＬＴに教えてもらった英語が言える、という自信につながる。さらに，自分が欲しいプレゼント，友達が欲しいプレゼントを英語で発音できるという喜びにもつながった。子どもたちは、ＡＬＴの発音をしっかりと聞いてリズムに合わせてプレゼントチャンツを言うことができた。

チャンツを楽しむ姿

（2） 成果と課題（○成果　●課題）

○　本単元は，導入だったので，子ども同士のコミュニケーションをどのように設定するかが課題だった。しかし，こちらが指示しなくても，友達と一緒に笑顔でチャンツをしたり，挨拶の歌にジェスチャーを付け加えたり，進んでコミュニケーションを図っていた。

○　２学期から，江口先生のご指導の下，絵本を読み聞かせてきたので，こちらから質問しなくても絵本に載っている色や形など，自然と児童の口から出るようになった。ただ色や形を聞くのでなく，児童が英語を言えば，「日本語では何て言うの」など，質問の工夫を取り入れた。絵本を読み始めた頃は，自信がなくこちらから質問しても特定の児童しか答えなかったが，繰り返し読み聞かせを行うことで，自信がつき進んで答えるようになった。友達の力が大きかったようだ。

○　クラスルームイングリッシュでは，日頃から“Good job!”　“OK.”などを使っているため，発音に関しては間違っているかもしれないが，たくさんの英語が飛び交っていた。友達同士で言い合うことで，「自分も英語が言える」「大丈夫だ」と、安心感と満足感に満ち溢れていた。
○　ＡＬＴと担任とのデモストレーションを見たり聞いたりする中で，先生も間違うことがある、ということから間違いをおそれず主体的・意欲的に学び合うことができた。
●　導入の場面ということで，子ども同士が質問したり，答えたりする場面がなかったが活動の中に取り入れたほうがよかったのか。また，取り入れるのならばどのように設定すればよかったのか。
●　導入からめあてまでの時間は適切だったか。
○　これまでに活用していた「ふり返りカード」をやめて，本単元から、その時間のめあてに沿ったふり返りの言葉を取り入れるようにした。そうすることで，児童も迷わずに考えることができた。
●　児童の中には，「日本語と英語のちがいがわからなかった」とあったが，特に支援が必要な児童に対して，どのように支援していけばよいか。今回の実践だけでなく，今後の学習活動においても同じように課題がある。

第４学年　外国語活動実践記録①

指導者　内村　壽恵
日田　顕太朗
古賀　世怜奈
日本人 ALT　江口　ひとみ

１　単元名　What's this?　クイズ大会をしよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１５名，女子１３名，合計２８名）に対して，外国語活動に関する意識調査を行った。「外国語活動の時間は好きか」という問いに対して，２６名の児童が「好き」，２名の児童が「どちらかというと好き」と回答した。「あまり好きではない」，「きらい」と回答した児童は見られなかった。また，「外国語活動の学習でおもしろいと感じるのは，どんなことか」（複数回答可）という問いに対して，「英語で友達や ALT と会話すること」「ゲームやチャンツをしたり，歌を歌ったりすること」「外国や英語のことについて知ること」「自分の知らない言葉を勉強するから」「できるようになってくることが楽しい」「話せるようになったり，わかるようになることが楽しい」などが挙げられた。これらのことから，学級児童の全員が，外国語活動の学習に高い関心をもち，ゲームやチャンツなど，様々な活動を楽しんでいることが分かる。英語を話せるようになりたいという思いが強く，友達や ALT とのやり取りの中で，積極的に英語を言おうとする姿があることも分かる。また，児童はこれまで，Lesson1 “ALPHABET” 中で，身の回りにあるアルファベットの大文字を探す活動や，アルファベットカードを使ったゲーム等を通して，それぞれのアルファベット文字（２６文字）に関心をもち，アルファベットの文字の音や形に慣れ親しんできた。そのため，学級のほとんどの児童が，それぞれの文字を認識し，発音することができている。

○　本単元は，アルファベットの小文字を取り扱う単元である。既習のアルファベットの大文字を基にして，身の回りにある，アルファベットの文字で表記された看板や標識，持ち物の中から，アルファベットの小文字に焦点をあて，展開していく。ゲーム活動を通して，児童は，身の回りの様々にアルファベットの小文字が使われていることに気付くとともに，楽しみながら，自然とアルファベットの小文字に慣れ親しんでいくことができると考える。また，本単元では，動物や野菜，学習で用いる道具など，身近なものについても取り扱う。“What's this?” “It's～” の表現を用いて，ある物は何かを予想するクイズなどの活動を通して，それぞれの語彙や表現に慣れ親しむようにするとともに，自分の思いを相手に伝えることの楽しさを感じることができると考える。

○　指導に当たっては，第１・２時では，学習のめあてを「クイズ大会をするために，小文字ともっと仲良くなろう。」と設定し，見通しをもって学習を進めることができるようにする。また，アルファベットの小文字探しなどの活動を通して，身の回りには，アルファベットの大文字だけでなく，小文字も使われていることに気付かせ，単元への興味が深まるようにする。そのために，“Hi friends! Plus” の小文字表を使い，ポインティングゲームや，小文字かるたゲーム，頭文字かるたゲームなどのゲーム活動を取り入れる。また，アルファベットの音や形に，より慣れ親しむように，“Hi friends! 1” の “What's this?” (p26-p27) の絵カードを用いたかるたゲームを行う。

第３・４時では，クローズアップクイズ，「背中の絵は何？」ゲーム，シルエットクイズ，漢字クイズ，パズルクイズ，ブラックボックスクイズ等を通して，“What's this?” で尋ねたり，その答えを “It's～” で答えたりする表現に慣れ親しむようにする。

第５時では，“What's this?”　“It's～” の表現を使った活動の場を設定し，それらの表現に慣れ親しむことで，自信をもって考えを伝え合うことができるようにする。また，改善すべき点についてグループで話し合う場を設定し，より自信をもって次の活動へ進めるようにする。

第６時では，児童がコミュニケーションを楽しむことができるように，ワークショップ形式でのクイズ大会を行う。一人の児童が何度も英語を用いたやり取りを行うことができるように，小グループに分けて活動を行うようにする。自分で考えたクイズを出したり，友達が考えたクイズを当てたりする活動を通して，お互いに一生懸命に考えを伝え合うことを体験し，伝え合った喜びや達成感を味わうようにしたい。また，この単元を通して，クラスルームイングリッシュに慣れ親しめるようにする。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

○　主体的・対話的で深い学びの工夫について

本単元では，導入段階においては，日常生活でよく見かけるアルファベットの文字に目を向けさせる。そこで，日常生活の中にあふれる外国語表記の単語を見せ，大文字や小文字を探し当てるゲームをさせ，アルファベットの文字に対する抵抗をなくす努力をする。

学習の中では，教師やＡＬＴだけでなく，児童が前に出てクイズを出したり，What's this?をすることで，コミュニケーションを積極的にとれるようにする。学習の時間の中で，様々なゲームを体験させることにより，相手に思いを伝えるために，日本語やジェスチャーも交えながら，児童がコミュニケーションを図ろうとしている行動を評価する。単元のゴールでは,「グループでクイズを作ってクイズ大会をしよう。」と設定する。クイズ大会の場面では，グループごとにクイズを考えて，発表し合うことができるようにする。そのためには，様々なクイズを出し，自分たちで考えることができるワークショップ形式をとる。そのことで，相手意識をもって，自分たちの本当の伝えたい思いを積極的に伝え合えるような場の設定としたい。

○　学習評価の工夫について

学習評価については，振り返りカードや見取りシート，話し合いカードを使い，児童の様子をより細かく見ることができるようにする。また，話し合いカードの中に，クイズの進め方や工夫の項目を設け，確認できたり，自分がやったことを振り返ったりすることができるようにする。さらに，学習に積極的に参加することができたか，学習のめあてが達成できているかを自己評価するようにする。単元全体の活動を通して，“What's this?”，“It's～.”という表現を使い，児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとしているかを評価したい。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　ある物について，積極的にそれが何かと尋ねたり答えたりしようとしている。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　ある物が何かを尋ねたり，それが何か答えたりしている。
言語や文化に関する気付き【気】	○　様々な物の言い方から，言葉の面白さに気付いている。 ○　身の回りにはアルファベットの大文字以外に小文字で表現されているものがあることに気付いている。

５　単元計画（総時数６時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準〈方法〉
1	自分たちの身の回りの生活にも使われていることに気付き，アルファベットの小文字の読み方を知る。 ○　小文字の読み方を知る。 ○　ポインティングゲームをする。 ○　小文字かるたゲームをする。 ○　身の回りの物を紹介する。			○	身の回りにはアルファベットの大文字以外に小文字で表現されているものがあることに気付いている。 ＜発言分析，振り返りカード分析＞
2（本時）	様々な物の言い方から，身の回りの言葉に慣れ親しむ。 ○　小文字の読み方を確認し，小文字神経衰弱ゲームをする。 ○　かるたゲームをする。 ○　アルファベット伝言ゲームをする。		○		アルファベットの小文字の読み方を聞いたり言ったりしている。 ＜行動観察，振り返りカード点検＞
3	様々な物の言い方から，言葉の面白さに気付くとともに，身の回りの物を表す語句を知る。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　クローズアップクイズをする。 ○　ポインティングゲームをする。 ○　「背中の絵は何？」ゲームをする。			○	ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞
4	身の回りの物を表す語やある物が何かを尋ねたり答えたりする。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　シルエットクイズをする。 ○　漢字クイズをする。 ○　パズルクイズをする。 ○　ブラックボックスクイズをする。		○		ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
5	ある物が何かを尋ねたり答えたりするクイズを考える。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　ピクチャークイズをする。 ○　クイズ大会の準備をする。	○			ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞

6	互いに尋ねたり答えたりしながら，クイズ大会をする。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　クイズ大会を行う。	○			ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜行動観察，振り返りカード点検＞

６　本時の学習

（１）　日時　平成２９年１０月４日（水）　第６校時　４の２教室

（２）　目標　アルファベットの小文字が，自分たちの身の回りの生活にも使われていることに気付く活動を通して，その言い方や形に慣れ親しむようにする。

（３）　準備　小文字のアルファベットカード　絵文字カード

（４）　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点　【観点】評価規準（評価方法） ★　特別な教育的支援を要する児童・生徒への特に困難とされる場面での支援のポイント	
	HRT	日本人外国語指導助手
1　前時の学習を振り返り，本時のめあてを確かめる。 ・　チャンツをする。“Alphabet” 	○　意欲的に発言したり，ジェスチャーをしたりしている児童を褒める。	○　a～z を発音する。 ○　アルファベットカードを読む。
めあて　アルファベットの小文字を使って、いろいろなゲームを楽しもう。		
2　アルファベットの小文字を使って，いろいろなゲームをする。 ・　小文字神経衰弱ゲームをする。 小文字カードを使って，同じ文字の組合せを作る。（１３組） ・　かるたゲームをする。 	○　裏返したカードの小文字を積極的に言っている児童を中間評価で褒め，全体によりよい行動を示す。 ○　ALT と共に教師用絵カード（Hi, friends!1 Lesson7 p26, 27 のいろいろな物の名前１５語）を用いて，デモンストレーションをし，ゲームの仕方を示す。 ★　机間指導を通して，児童の行動を見取る。活動が困難な場合，寄り添い，声かけをしたり，他の児童とつなげるなどの支援をしたりする。	○　教師用絵カードを用いて，デモンストレーションをする。 ★　上手く英語を言えない児童には，寄り添い，手本を示す。

	＜デモンストレーション＞ HRT: Let's play karuta game! f is for fish. ALT: OK .good HRT: good! Next! ALT: c is for cat. HRT: OK.	
【慣】アルファベットの小文字の読み方を聞いたり言ったりしている。 ＜行動・発言分析、振り返りカード分析＞		
・　アルファベット伝言ゲームをする。 背中に文字を書いて，伝える。 	○ ALT と共に，伝言ゲームのデモンストレーションをする。 ○ 相手にしっかりと伝わるように書くことを伝える。	
＜アルファベット伝言ゲームの手順＞ ①　先頭の児童は、小文字のカードを見て、次の児童の背中に書く。 ②　背中に書いてもらった児童は、次の児童の背中に小文字を書いていく。 ③　最後の児童は前に出て、小文字を発表する。	＜デモンストレーション＞ HRT: Let's play Dengon game! (ALT の背中に文字を書く。) ALT:　O HRT:OK! 	
3　本時の学習を振り返る。	○　振り返りカードを活用して本時の振り返りができるようにする。	

7　実践のまとめ

（1）　B研→A研に向けての変更点

◎　時間短縮の工夫

本単元では，小文字の学習の２時目であり，かるたゲームや神経衰弱ゲーム，背中伝言ゲームなど活動がたくさんあった。B研では，４人１グループにする時間やアクティビティの準備をする時間がかかりすぎていた。A研では，初めからグループの形でアクティビティを行うようにした。また，神経衰弱ゲームで使用するカードを封筒に分けて入れて用意しておくことで流れをスムーズにすることができた。

◎　導入での振り返りの内容

B研では，めあてを設定するのに時間がかかってしまった。これは児童がなぜ小文字の勉強をするのかよく分かっていなかったからだと考えられる。前時では，学校の中にある英語をグループごとで探す学習をした。その学習の中で，児童は大文字よりも小文字の方が多いことに気が付くことができ，スムーズにめあてを出すことができた。

◎　デモンストレーションの削除

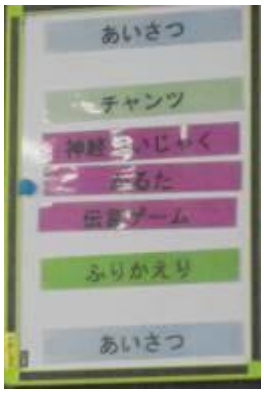
Ｂ研では,本単元の大きな目標である「クイズ大会をしよう」にむけて,こんなクイズがあるということでブラックボックスゲームを紹介した。ゲームを見せることで児童が自分達でやってみたいという意欲を充分に引き出すことができた。しかし,本時ではブラックボックスゲームは行わなかったので,「紹介したのに,どうしてしないのか。」と児童に疑問点を残してしまった。そこで,A研では,次時に行うようにした。

（２） 光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　学習活動と評価の可視化

学習活動の流れを示したボードを掲示し,児童が本時の流れを見通せるようにしている。また,それぞれの活動が終了する時に,磁石を動かしていき,今がどの活動であるか分かるようにしている。見通しがもてることで,次はどの活動をするかが分かりやすくなり,楽しみながら活動に取り組むことができた。

コミュニケーションボードでは,挨拶やチャンツ,アクティビティなど活動の前にみんなで声に出して確認することで,意識しながら楽しく活動することができた。また,活動の途中で,元気よくスマイルができている児童を紹介することで,より意識して行うことができ,効果的だった。



学習活動と評価の可視化

コミュニケーションボード

◎　デモンストレーションを取り入れた説明

神経衰弱ゲームやかるたゲーム,伝言ゲームでの活動の前に,ＨＲＴと江口先生がデモンストレーションを行い,活動の見通しをもてるようにした。ＨＲＴと江口先生とのやりとりを見ることで,スムーズに活動ができた。

（３） 成果と課題（○成果　●課題）

○　本単元では,総時数を４時間から６時間へと増やした単元構成になっているため,小文字の学習をした後,“What's this?”“It's ～.”の表現を取り扱った。２時間で,いろいろなゲームを通して小文字を学習したことで,アルファベットへの抵抗が少なく,単元のゴールとして設定した「クイズ大会をしよう」では,小文字を使ったクイズなど,楽しく活動に取り組むことができた。

○　クイズ大会の形式をワークショップ型にしたことで,クイズを出す側も,積極的に呼びかけをしたり,クイズを出したりすることができ,また,答える側では,英語を話すことが苦手な児童でも,積極的に自分からクイズの所に行き,尋ねたり答えたりすることができた。

○　チャンツでは,オリジナルのリズムや単語を取り入れたため,児童が主体的や意欲的に活動することができるようになった。

●　本単元では,導入では小文字を覚え,慣れ親しむ学習を取り入れたため,１時間の中でより主体的・対話的で深い学びになる工夫はあるのかが課題である。

○　振り返りでは,「自分ががんばったところやできるようになったところ」,「友達の活動を見て良かったところ」を書くように伝えることで,どのような事を書いたらいいかが分かりやすくなった。振り返りカードには,言えるようになった言葉を書く児童や,友達のクイズの出し方や答え方などの良かったところを見つけて書くことができていた。

○　本単元を通して,活動の途中で,コミュニケーションボードや活動のことで良かった児童を紹介するなど,中間評価を取り入れることで,児童がより意欲的に活動することができるようになった。

●　振り返りカードを見ると,どの児童がどのようなことを頑張ってできるようになったかが分かったが,クイズ大会の時にどのくらいコミュニケーションがとれているかなど,一人一人の評価を明確にするにはどうしたらいいかが課題である。

第４学年　外国語活動実践記録②

指導者　古賀　世怜奈
内村　壽恵
日田　顕太朗
ALT　Ga-Yen-Dang

１　単元名　What's this?　クイズ大会をしよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１４名，女子１３名，合計２７名）は，外国語活動の時間をとても楽しみにしている。意識調査では，「外国語活動は好きですか。」という問いに対して，全員が「好き」「どちらかというと好き」と回答した。主な理由として，「知らない英語が分かるから」「友達と英語で話せるから」「交流が深まるから」「ゲームをして楽しく英語を覚えることができるから」「友達の好きな物が分かるから」などが挙げられた。外国語活動の学習を通して，英語に親しむことに楽しさや喜びを感じていることが分かった。

アルファベットの大文字については，１学期に行った“What do you want?”の学習で，多くの児童が大文字探しの活動に積極的に取り組んでいた。文字に対する興味・関心は，高い傾向にある。また，本学級では，英語を使ったコミュニケーション能力を高める活動として，分からないことを簡単な英語のフレーズを使って尋ねたり，教え合ったりする活動を積極的に取り入れている。普段の外国語活動の時間にも，簡単な教室英語を取り入れることで，児童には，積極的に英語を話そうとする態度が育ってきている。

○　本単元は，“Hi, friends! 2”の Lesson 1　Do you have “a”?で登場するアルファベットの小文字に慣れ親しむようにすることと，“Hi, friends! 1”の Lesson 7　What's this?で，ある物についてそれが何かと尋ねたり，答えたりする表現に慣れ親しむことをねらいとしている。また，“What's this?”“It's～”の表現でクイズを出したり，答えたりする活動を通して，自分の考えを相手に伝えることの楽しさを感じることができる教材である。この表現に慣れ親しむ過程で，学校生活の中でよく使われるもの，見かけるものについての英語表現に触れるとともに，英語と日本語の音の違いや成り立ちの類似点にも気付くように単元を構成している。

単元の終末には，児童が実際に身の回りの物についてクイズを作り，お互いに答え合う活動を設定することで，児童同士が積極的にコミュニケーションを図り，英語でコミュニケーションを行う楽しさや面白さを体験的に味わうことができる教材である。

○　指導に当たっては，単元の初めに，ゴールを「グループでクイズを作ってクイズ大会をしよう。」と設定し，単元を通して行うべき活動とゴールへの見通しをもつことができるようにする。

「出会う」場面では，自分たちの身の回りの生活には，たくさんのアルファベットが使われていることに気付くようにし，単元への興味が深まるようにする。そのために，“Hi friends! Plus”の小文字表を使い，ポインティングゲームを行ったり，小文字の読み方に親しみをもつことができるように，ブラックボックスゲームやミッシングゲームを入れるようにする。さらに，“Hi friends!1”の“What's this?”の絵カードを使い，かるたゲームを取り入れることによって，小文字の読みにより親しみがもてるようにする。

「くり返す」場面では，クローズアップクイズ，「背中の絵は何」ゲーム，シルエットクイズ，漢字クイズ，パズルクイズ，ブラックボックスクイズ等，様々なゲームやクイズの活動を通して，“What's this?”で尋ねたり，その答えを“It's～”で答えたりする表現に慣れ親しむようにする。

「伝え合う」場面では，“What's this?”“It's～”の表現を使って，クイズ大会を行う。児童が意欲をもってコミュニケーションを楽しむことができるように，ワークショップ形式で行う。また，児童が積極的に交流できるように，小グループでの活動を取り入れる。自分たちで考えたクイズを出したり，友達が考えたクイズを当てたりする活動を通して，伝え合う喜びや達成感を味わうことができるようにする。また，単元を通して，教室英語に慣れ親しむことができるようにする。

3　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

○　主体的・対話的で深い学びの工夫について

新学習指導要領では,「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界,他者との関わりに着目して捉え,コミュニケーションを行う目的や場面,状況等に応じて,情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること」が，外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方とされている。小学校段階では，相手意識をもってコミュニケーションをとることが大切であるとされる。

相手意識をもって，自分たちの本当の伝えたい思いを積極的に伝え合えるような場の設定として，単元のゴールでは，クイズ大会をする場を設ける。クイズの種類ごとに小グループを作り，一人一人が自分が出題するクイズを考えて，発表し合うことができるようにする。相手意識をもって，自分たちの本当の伝えたい思いを積極的に伝え合えるような場の設定としたい。

○　学習評価の工夫について

振り返りカードや見取りシート，話し合いカードを使い，児童の様子をより細かく見れるようにする。また，話し合いカードの中に，クイズの進め方や工夫の項目を設け，確認したり，自分がしたことを振り返ったりすることができるようにする。さらに，学習に積極的に参加することができたか，学習のめあてが達成できているかを自己評価できるように，本時で使った教室英語を選べるような振り返りカードを使用する。単元全体の活動を通して，“What's this?”,“It's～.”という表現を使い，児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとしているかを評価していく。

4　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　ある物について，積極的にそれが何かと尋ねたり答えたりしようとしている。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　アルファベットの小文字の読み方を聞いたり言ったりしている。 ○　ある物が何かを尋ねたり，それが何か答えたりしている。
言語や文化に関する気付き【気】	○　身の回りにはアルファベットの大文字以外に小文字で表現されているものがあることに気付いている。

5　単元計画（総時数６時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準〈方法〉
1	自分たちの身の回りの生活にも使われていることに気付き，アルファベットの小文字にの読み方を知る。 ○　チャンツをする。“ABC” ○　小文字の読み方を知る。 ○　ポインティングゲームをする。 ○　身の回りの物を紹介する。			○	身の回りにはアルファベットの大文字以外に小文字で表現されているものがあることに気付いている。 ＜発言分析，振り返りカード分析＞
2	様々な物の言い方から，身の回りの言葉に慣れ親しむ。 ○　小文字の読み方を確認し，小文字神経衰弱ゲームをする。 ○　かるたゲームをする。 ○　アルファベット伝言ゲームをする。		○		アルファベットの小文字の読み方を聞いたり言ったりしている。 ＜行動観察，振り返りカード点検＞
3	様々な物の言い方から，言葉の面白さに気				

	付くとともに，身の回りの物を表す語句を知る。 ○　クローズアップクイズをする。 ○　ポインティングゲームをする。 ○　「背中の絵は何？」ゲームをする。 ○　チャンツをする。“What's this?”			○	ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞
4	身の回りの物を表す語やある物が何かを尋ねたり答えたりする。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　シルエットクイズをする。 ○　漢字クイズをする。 ○　パズルクイズをする。		○		ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
5	ある物が何かを尋ねたり答えたりするクイズを考える。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　ピクチャークイズをする。 ○　クイズ大会の準備をする。	○			ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
6（本時）	互いに尋ねたり答えたりしながら，クイズ大会をする。 ○　チャンツをする。“What's this?” ○　クイズ大会を行う。	○			ある物が何かを尋ねたり，それが何かを答えたりしている。 ＜行動観察，振り返りカード点検＞

6　本時の学習

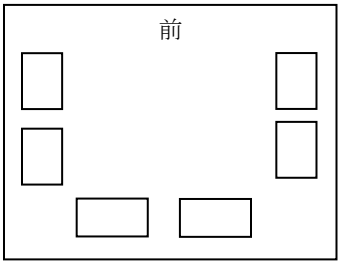
⑴　日時　　平成２９年１１月１７日（金）　１４：２０～１５：０５　４の１教室

⑵　目標　　ある物について積極的にそれが何かを尋ねたり，答えたりする。

⑶　準備　　クイズ大会に使用する物　デジタル教材　振り返りカード

⑷　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点　【観点】評価規準＜評価方法＞ ★　特別な教育的支援を要する児童・生徒への支援	
	HRT	ALT
1　英語で挨拶をする。 2　前時学習を振り返り，本時のめあてを確かめる。 ・　チャンツをする。 “What's this?” 	○ ALT と一緒に英語の雰囲気作りをする。 ○　ある物を尋ねたり答えたりする言葉を使ってクイズ大会をすることを確認する。 ○　「コミュニケーションのポイント」を示した掲示物を確認できる機会を設け，児童が常に意識できるようにする。 	○全体に挨拶をする。 ○担任とともに，クラスの雰囲気が楽しくなるよう，手助けをする。 ○それぞれのクイズの進め方を確認し，尋ね方や答え方を確認できるようにする。
めあて　ある物をたずねたり答えたりする言葉を使って，クイズ大会をしよう。		

3　クイズ大会をする。 ・　クイズの進め方を確認する。 ・　グループ毎にクイズを用意し，ワークショップ形式でクイズ大会を行う。 クイズの種類 ・漢字クイズ ・ブラックボックスクイズ ・シルエットクイズ ・背中の絵クイズ ・パズルクイズ ・ピクチャークイズ ＜活動の場＞  4　振り返りをする。 	○　それぞれのクイズの進め方を確認し，尋ね方や答え方を確認できるようにする。 ○　前半と後半に分かれ，１０分立ったら，出題者と解答者が交代することを説明する。 ○　事前に役割，発表順番を決めておき，スムーズに活動ができるように手助けする。 ★　机間指導で，児童の行動を観察する。A児が話すことが困難な時には，寄り添い，助言をする。 【コ】　ある物について，積極的にそれが何かと尋ねたり答えたりしようとしている。 ＜行動・発言観察，振り返りカード点検＞ ○　積極的に話したり，聞いたりしていた児童の活動の様子を取り上げ，賞賛する。 ○　振り返りカードに書く際に，「がんばったところ，できるようになったところ」や「友達の活動を見てよかったところ」などの振り返る視点を与え，児童がより具体的に内容を書くことができるようにする。	

7　実践のまとめ

（1）　光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　学習活動と評価の可視化

学習活動の流れを示したボードを掲示し，児童が本時の流れを見通せるようにしている。また，それぞれの活動が終了する時に，掲示物の中に丸を加え，活動についての評価が分かるようにした。見通しがもてることで，次はどの活動をするかが分かりやすくなり，楽しみながら活動に取り組むことができた。

学習活動と評価の可視化

コミュニケーションボード

コミュニケーションボードでは，挨拶やチャンツ，アクティビティなど活動の前にみんなで声に出して確認することで，意識しながら楽しく活動することができた。また，ボードが常に掲示されていることで，児童は，活動をしながら「アイコンタクトに気を付けて挨拶をした。」「先生とも笑顔でできた。」という言葉も聞こえ，効果的だった。

◎　デモンストレーションを取り入れた説明

本単元では，クイズ大会を行う前に，担任と ALT での会話のやりとりを行った。担任がプレゼントを渡し，ALT が“What's this?”と尋ねる。児童にプレゼントを見せ，児童が“It's a panda.”と答える。その後，めあてにつなげた。担任と ALT とのやり取りがあることで，本単元で繰り返し練習した，ある物

を尋ねる言い方や答える言い方をもう一度児童と確認することができた。また，スムーズにめあてにつなげることができ，クイズ大会への意欲を高めることができた。

（２）　成果と課題（○成果　●課題）

チャンツの時の選ぶ単語

○　チャンツの際には，オルガンにある１６ビートのリズムに合わせて歌う。自分たちで選んだ単語を使って歌うことで，楽しく積極的に参加することができるようになった。本時では，「消しゴム」「グローブ」「猫」を選び，チャンツを行った。また２回目では，似ている単語を選ぶようにし，「鳥」「バット」「こうもり」を選んで行った。単元の中で覚える単語も増え，また，毎時間チャンツで出てくる単語が変わるため，チャンツが苦手な児童も嬉しそうに単語を選ぶ姿が見られ，意欲的に発音することができるようになった。

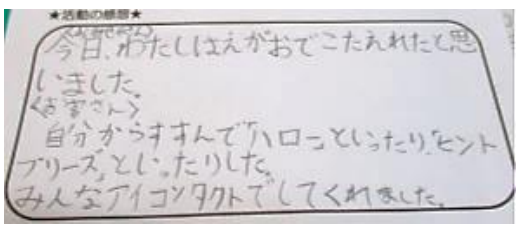
○　本単元では，「クイズ大会をしよう」での６時目を行ったため，コミュニケーションのやりとりがどのくらいできるかが心配だった。しかし，クイズ大会では，ジェスチャーをつけてクイズを出したり，分からない時はヒントを聞いたり，今まで学習した英語を積極的に話す姿が見られた。

○　クイズ大会の形式をワークショップ型にしたことで，クイズを出す側も，積極的に呼びかけをしたり，クイズを出したりすることができ，また，答える側では，英語を話すことが苦手な児童でも，積極的に自分からクイズの所に行き，尋ねたり答えたりすることができた。

○　チャンツでは，オリジナルのリズムや単語を取り入れ，自分たちが選んだ単語を歌うことができるので，児童が主体的や意欲的に活動することができるようになった。

●　今回は，活動の場をワークショップ型で行ったが，児童が積極的にコミュニケーションができるような場として適切だったのかが課題である。

●　日頃から褒め言葉などのクラスルームイングリッシュ英語を使ってきたが，児童がより定着できるように，まだ積極的に使っていく必要があると考える。



児童の振り返りカード

○　振り返りでは，「自分ががんばったところやできるようになったところ」，「友達の活動を見て良かったところ」を書くように伝えることで，どのような事を書いたらいいかが分かりやすくなった。振り返りカードには，言えるようになった言葉を書く児童や，友達のクイズの出し方や答え方などの良かったところを見つけて書くことができていた。

○　クイズ大会の前半が終わった後に，中間評価を設定した。クイズを出す側と答える側をみんなの前で見せることで，友達のよさを見つけることができ，クイズ大会の後半では，そのよさを取り入れてコミュニケーションをしている姿が多く見られるようになった。

●　振り返りカードを見ると，どの児童がどのようなことを頑張ってできるようになったかが分かったが，クイズ大会の時にどのくらいコミュニケーションがとれているかなど，一人一人の評価を明確にするにはどうしたらいいかが課題である。

第５学年　外国語活動実践記録①

指導者　福田　峻也
永冨　祐子
下川　恵菜
日本人 ALT　江口　ひとみ

１　単元名　What do you want?　ほしいものをたずねよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１４名，女子１５名，計２９名）は，週に２時間の外国語活動の学習をとても楽しみにしている。普段の学校生活の中でも，すれ違った ALT に対し，進んで“Hello”，“How are you?”と挨拶をするなど，積極的に英語を用いてコミュニケーションをとろうとしている。１学期に行った外国語活動に関するアンケートでは，２９名中２８名が「好き」または「どちらかというと好き」と答えており，身近な生活の中にもたくさんの英語があることに気付き，意欲的に学習に取り組んでいる。また，相手の誕生日を英語で尋ねたり，自分の誕生日を答えたりする活動を通して，言語や文化に対する興味・関心が高まると共に，英語を使ってコミュニケーションが図ることに自信を感じている児童も多い。

しかし,友達との交流活動の中で,相手の質問に対して正しく答えられるかという不安を抱き，活動に消極的な児童もいる。そのような児童に対しては，担任がそれぞれの児童の様子を細かく見取り，一緒に質問の復習をするなど，交流活動の手助けをする。また，中間評価でモデル児童を抽出し，交流の手本を全体で共通理解する。自分の表現に不安を抱いている児童も，友達の交流の仕方を参考にし,「自分も英語をつかって友達と話すことができた。」という達成感を得ながら活動ができるよう，支援していきたい。

○　本単元は，アルファベットの小文字が身近に多く存在していることに気付き，その音声や形に慣れ親しみながらコミュニケーションを図ろうとすることをねらいとしている。アルファベットは児童の生活の中でも多く存在し，アルファベットで表記されたお店の名前やアーティスト名などを１つ１つ挙げていくことで,外国語や文字に対する興味・関心を高めることができる。また，次期指導要領改訂を見据え,児童がアルファベットの小文字の音や形に慣れ親しみながら,「書く活動」を行うことができる単元である。単元を通して，児童が無意識にアルファベットの小文字を書くのではなく，４線の上に正しく書くことを意識できるよう繰り返し指導していく。本単元の最後では，それぞれの児童が，ケーキを作るために本当に欲しいものを考え，子どもの主体性を尊重しながら，尋ねる側と答える側の両方の活動を設定することができる。

○　指導に当たっては，まず「出合う」段階で，身近にあるアルファベットを見つけたり，写真を提示したりしながら，アルファベットが身近な存在であることに気付かせ，アルファベットの小文字に対する抵抗感をなくすことができるようにする。

「繰り返す」段階では，次期指導要領改訂を踏まえ，アルファベットの小文字を４線の上に書き写す活動を行う。文字の種類によって，線の上で書く場所が異なることから，児童に基準線となる第三線を赤で引かせる。書き写す活動の中で，必ず基準線に赤線を引くことで,「どの線の上に書けばよいか」を意識しながら書き写す活動ができるようにする。

「伝え合う」段階では,「オリジナルのケーキを作ろう」という活動を行う。オリジナルケーキを作る活動を設定し，児童一人一人が本当に必要な物を考えることができるようにする。ケーキを作るための材料を集めるという活動の中で，児童は想像を膨らませ，意欲的に英語でコミュニケーションをすることができる。単にカードを集めるだけの活動ではなく，児童が自分の欲しい材料を選び，アルファベットの小文字の知識と関連付けながら，友達とコミュニケーションをとることで，児童が目的意識をもち，活動に取り組めるよう指導していく。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

○　主体的・対話的で深い学びの工夫について

学習の全体を通して，本時の活動内容を順序ごとにホワイトボードに記入し，教室の前方に掲示する。それぞれの活動の際には，番号の横に目印をつけ，児童が本時の学習の流れの見通しをもち，今何をすればよいのか，視覚的に理解できるようにする。また，振り返りの時間を毎時間確保し，児童一人一人が本時の学習を振り返り，気付いたことを自分の言葉で記述する。その後，自分の気付きをペアの友達に紹介し，全体へ共有する。一人一人の気付きを全体に共有することで，児童の言葉を用いて本時のまとめをするとともに，教師からの評価を加え，次時への見通しをもてるようにする。

○　学習評価の工夫について

学習評価については，児童に振り返りカードを書かせ，それを元に評価をする。振り返りカードには，本時のめあてを記入する欄を設け，児童が毎時間のめあてを意識しながら，本時の活動を振り返ることができるようにする。振り返りカードには，「活動を楽しむことができたか」「進んで英語を話したり聞いたりしたか」「めあては達成したか」の３つの観点を，４段階で自己評価させる。また，気付いたことを記入する際には，本時で学んだこと，キーワード等を全体で確認し，児童一人一人が自分の言葉で振り返ることができるようにする。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	○　自らアルファベットの小文字を読んだり，欲しいものを尋ねたり答えたりしている。
外国語への慣れ親しみ	○　アルファベットの小文字とその読み方を一致させたり，欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ○　３１～１００までの言い方に慣れ親しむ。
言語や文化に対する気付き	○　身の回りにはアルファベットの小文字で表現されているものがあることに気付く。

５　指導計画と評価計画（総時数５時間）

	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準（方法）
1	世界には様々な文字があることや，３１～１００までの言い方を知る。 ○　ナンバーゲームをする。 ○　「動物の数を数えよう」ゲームをする。 ○　チャンツをする。“How many penguins?” ○　「どの動物を表す文字か，考えよう」ゲームをする。			○	世界には様々な文字があることに気付いている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞
2	アルファベットの小文字とその読み方とを一致させるとともに，３１～１００までの言い方に慣れ親しむ。 ○　チャンツをする。“How many penguins?” ○　チャンツをする。“Alphabet Chant” ○　ミッシングゲームをする。		○		数字やアルファベットの大文字とその読み方とを一致させるとともに，欲しいものを答えている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
3	アルファベットの小文字とその読み方とを一致させるとともに，欲しいものを尋ねたり，答えたりする表現を知る。 ○　チャンツをする。“Alphabet Chant”				

	○　チャンツをする。“What do you want?” ○　かるたゲーム ○　ラッキーカードゲーム		○		アルファベットの小文字とその読み方とを一致させるとともに，欲しいものを尋ねたり答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
4	積極的にアルファベットの小文字を読もうとするとともに，欲しいものを尋ねたり，答えたりする表現に慣れ親しむ。 ○　“Alphabet Chant” ○　チャンツをする。“What do you want?” ○　チェーンゲームをする。 ○　カード集めゲームをする。 ○　見つけたアルファベットの小文字を書く。		○		アルファベットの小文字を読んだり，欲しいものを尋ねたり答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
5（本時）	積極的にアルファベットの小文字を読もうとし，欲しいものを尋ねたり，答えたりしようとする。 ○　チャンツをする。“Alphabet Chant” ○　チャンツをする。“What do you want?” ○　オリジナルのケーキを作る。	○			自らアルファベットの小文字を読んだり，欲しいものを尋ねたり答えたりしようとしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞

６　本時の学習　平成２９年９月２２日（金）　　第５校時　　国際交流室

⑴　目標　自分の欲しい食材カードを選び，オリジナルケーキを作る活動を通して，アルファベットの小文字とその読み方を一致させ，欲しいものを尋ねたり答えたりすることができるようにする。

⑵　準備　果物カード，ケーキ台紙，アルファベットカード

⑶　展開

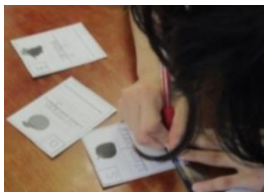
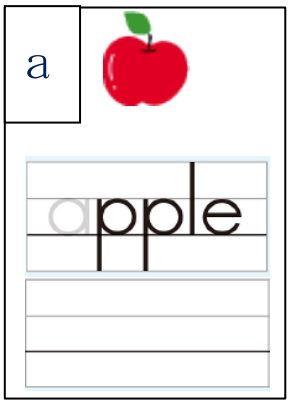
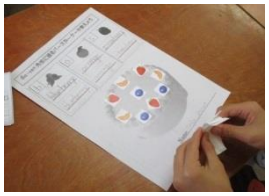
<table>
<tr><td rowspan="2">主な学習活動・内容</td><td colspan="2">○　指導・支援上の留意点【観点】評価規準＜評価方法＞
★　特別な教育的支援を要する児童への支援
◇　新学習指導要領実施に向けての取組</td></tr>
<tr><td>HRT</td><td>ALT</td></tr>
<tr><td>1　挨拶と復習をする。
・　アルファベットの復習

2　チャンツをする。
”What do you want?”
”Alphabet Chant”

3　本時のめあてを確認する。</td><td colspan="2">○　英語であいさつをし，雰囲気づくりをする。
○　本時で使う慣れ親しんだ表現を中心に，ペアでインタビュー活動をさせる。ランダムにアルファベットのカードを配り，動き回りながら，友達とカードを交換する。</td></tr>
<tr><td>○　デジタル教材を用いて，一緒に言う。
○　本時のポイントとなる表現を再度確認する。</td><td>○　意欲的に発言したりジェスチャーをしたりしている児童を称賛する。</td></tr>
</table>

	○　本時では不在のALT の動画を見せ，めあてにつなげる。	

めあて　ほしいものをたずねたり答えたりして，オリジナルスイーツを作ろう。

4　オリジナルのケーキを作る。 ・　自分の欲しい果物カードを３種類選ぶ ・　カードの４線の上に小文字を書き写し，カードを完成させる。   	○　ALT と担任でデモンストレーションを行い，簡潔にルールを示す。 ALT：“Hello. What do you want?” HRT：“The “apple” card please.” ALT：“Here you are”. HRT：“Thank you.” ALT：“See you, Bye.” ◇　文字指導については日本人 ALT が主に行う。基準線を明確にするために，赤色で下線を引くようにする。	
・　果物の頭文字を手掛かりに，お店に行って自分がほしい果物シールをもらう。また、果物シールをケーキの上に貼る。 	○　全体をお店（尋ねる）側とお客（答える）側に分ける。途中で交代し、どちらも経験できるようにする。 ○　積極的に活動している児童を中間評価で褒め，全体によりよい行動を示す。 ★　アルファベットとその読み方が分からない児童には，寄り添い，助言をする。	
5　作ったオリジナルケーキをペアの友達に紹介する。 	○　自分が作ったケーキを紹介するときは，なぜその果物を選んだのか，日本語で友だちに説明するように伝える。	
6　オリジナルケーキを全体に発表する。 	○　児童の選んだ食材カードとオリジナルケーキを書画カメラで拡大掲示し，絵を見ながら発表ができるようにする。 自らアルファベットの小文字を読んだり，欲しいものを尋ねたり答えたりしようとしている。 【コ】＜行動観察・絵カード・振り返りカード点検	
7　本時の学習を振り返る。 	○　本時のめあてに沿って、児童を褒める。	○　児童が英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度でよかった点を英語で褒める。

7　実践のまとめ

(1)　B研→A研に向けての変更点

◎　スモートークを用いためあてまでの流れ

本時では「ALT の先生に誕生日ケーキ作る」という活動を設定した。B 研時には時間削減のために，担任が「実は ALT の先生がそろそろ誕生日なんだ。」と導入し，児童にどんなことをさせたいか考えさせた。その後「ケーキを作りたい。」という児童の意見を踏まえ，本時のめあてを設定した。A 研時にはさらにスムーズにめあてへとつなぐために，スモールトークを設定した。担任が既習の“When is your birthday？”“What do you want？“を使い，父親から時計をプレゼントされたエピソードを英語で話した。ほとんどの児童が内容を理解し，児童からは反応があった。その後，数名の児童に対して，担任が同様の質問をした。質問の内容を理解した後，事前に撮影した ALT の動画を流した。児童は既習の“When is your birthday？”“What do you want？“を使い，実際に ALT に尋ねた。すると，児童は自分で尋ねた質問に対する答えから，ALT の誕生日が迫っていることを知り，「ALT の先生が喜ぶようなケーキを作りたい。」と自然に児童の言葉でめあてを設定することができた

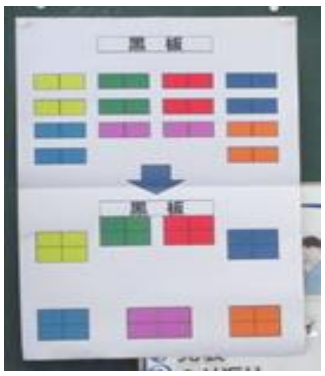
担任のスモールトークを聞く児童

テレビに向かって欲しいものを尋ねる様子

◎　時間短縮のための場の設定と教具の工夫

B 研では，授業時間が５５分となり，予定時間を１０分延びてしまった。このことから，A 研では，学習とは関係ない時間を短縮するために３つの手立てを取った。

１つ目は，場の設定とその提示の仕方である。B 研では，書く活動の後のコミュニケーション活動へ向けて，担任が口頭で指示を行い，場の設定を行った。しかしながら，担任の指示が十分に伝わらず，机の移動に時間がかかってしまった。そこで A 研では，移動前と移動後の場を黒板に図で示し，班ごとに色分けすることで，すべての児童が一目で移動の仕方を理解することができた。B 研に比べ，大幅に時間を節約することができた。



机の移動を視覚的に示した図

２つ目は，教具の工夫である。B 研では，アルファベットの順番を意識させる意図で，児童一人一人が黒板前に移動し自分の欲しい果物カードを取った。しかし A 研では，事前に児童の机の中に全種類のカードを準備しておき，それぞれの児童がその中から必要な３枚のカードだけを取ることで，児童が移動する必要がなかった。

３つ目は，果物シールの改善である。B 研時に使用した果物シールは，切り込みが入っておらず，児童がシールを剥がすのに時間がかかってしまった。そこで A 研時には，事前切り込みの入っているシールを使用した。このことにより，ケーキの作成→発表→ふり返りをスムーズに行うことができた。

剥がしやすいように切れ込みを入れたシール

以上の三点を見直し・改善することで，時間を削減することができ，A 研では４５分ですべての活動を終えることができた。

⑵　光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

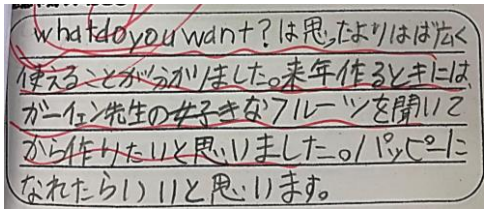
◎　学級担任と ALT の役割を意識した授業展開

児童一人一人のつまずきを学級担任が見取り，それを日本人 ALT に伝えることで，共通理解の元、個別の支援をすることができた。英語の発音や文字指導など，専門的な部分は日本人 ALT が主として指導をした。専門的な立場からの指導により，児童の意欲も高まり，集中して学習に取り組むことができた。

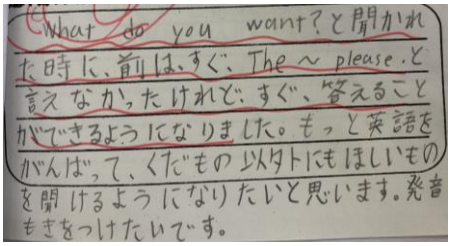
日本人 ALT が支援を行う様子

◎　振り返りの時間の設定

本単元に限らず，外国語活動の時間では，終末の５分を振り返りの時間として設定してきた。児童は本時のめあてを再確認し，それに基づいた自己評価を行った。「気付き」「慣れ親しみ」の段階では，他者とコミュニケーションをとったり，自分から英語を発したりすることに不安を抱いていた児童が，「少しずつ話せるようになりました。」と自分の成長を実感することができた。また，「“What do you want”という表現は意外と便利で，外国に行ったときにも使えそうだなと思いました。」など，自分の視野が広がり，国際交流への自信を感じた児童もいた。このように，毎時間ふり返りの時間を設けることで，児童が自分自身の成長を実感し，また新たな気付きや疑問を学級全体で共有することができ，児童の意欲を高めることができた。



自己の成長を実感している児童のふり返り



自己の成長を実感している児童のふり返り

◎　教室英語を積極的に使おうとする担任と児童の反応

外国語活動の時間では，担任は授業の進行を行うだけでなく，“楽しんで英語を学び，積極的に話そうとする学習者モデル”として授業を行った。担任は“Excellent.”“Good job.”などの教室英語を積極的に使用した。本単元は“What do you want?”“~please.”という表現を学習することから，「もう少し時間が欲しい時は何と言うのかな。」と担任が ALT とのコミュニケーションの橋渡し，“One minute please.”という教室英語も，児童が自然と獲得することができた。本時では，ケーキを見た担任が“I'm hungry.”と伝えた。すると数名の児童がうなずいていたので，“you too?”と尋ねると，児童から“me too, hungry.”という答えが返ってきた。このように，担任が学習者モデルとして積極的に教室英語を話そうとすることで，担任・ALT－児童，また児童－児童のコミュニケーションにも，教室英語が使われるようになった。

◎　「書く活動」の工夫

本時では，次期指導要領改訂を踏まえ，本来の主眼ではない「書く活動」を設定した。アルファベットを４線の上に正しく書くことができることを目的とし，日本人外国語指導助手が文字指導に当たった。文字指導では，アルファベットを「１階建て」「２階建て」「地下１階」「中２階建て」の４種類に仲間分けし，それぞれの特徴を共通理解した。また，基準線（第３線）を意識させるため，一人一人が基準線のみを赤でなぞるよう指導した。すべての児童が文字の形や大きさ，全体のバランスを考えながら，４線の上にアルファベットを書き写すことができた。

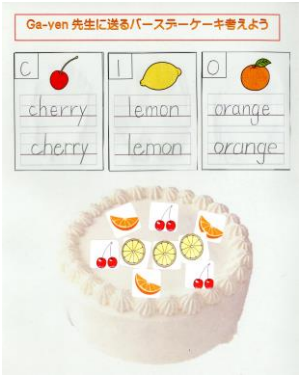
文字指導を行う日本人 ALT

アルファベットの仲間分け

⑶　成果と課題（○成果　●課題）

○　本時では，児童が目的意識をもってコミュニケーションをすることができるよう，導入の仕方や活動の内容を工夫した。導入では，スモールトークを行い，担任が誕生日に腕時計をもらったエピソードを英語で話した。その後，実際に本時では不在の ALT に誕生日と欲しい物を尋ね，「ケーキが欲しい。」と答えたことから，スムーズに本時のめあてへとつなげることができた。また，色々な果物の中から果物を選択する必然性を生み出し，積極的なコミュニケーションにつなげることができた。

○　書く活動では，必然性をもつようにする工夫を行った。児童が友達にケーキをプレゼントする時に，自分が書いた英語も一緒にプレゼントするということを事前に伝えることで，相手意識をもって書くことができた。



児童が使用したワークシート

●　コミュニケーション活動の中で，シールをもらうことに焦点が行きすぎてしまい，本来デモンストレーションで示したコミュニケーションをせずに，単なるシールの受け渡しをしているペアがあった。これは，１時間の中の活動量が多すぎたために，中間評価の時間を確保することができなかったことが原因であると考えられる。光貞スタンダードにもあるように，コミュニケーション活動の際には，必ず中間評価を設け，コミュニケーションのポイントを確認する必要がある。

●　“What do you want?”という表現は，本時までに十分に慣れ親しんでいた表現であった。しかし，板書に文字列で“What do you want?”という表現を示したため，間違えたくないという心理から，板書を確認しながらコミュニケーションをする児童が数名いた。コミュニケーションをする場合は，基本的に両手に何も持たず，ジェスチャーを用いながら相手の目を見てできるよう，板書の内容も工夫すべきであった。

○　振り返りでは，英語でコミュニケーションをすることの楽しさや，日常生活でも英語を使ってみたいという意欲の高まりを感じている児童がいた。その一人一人の気付きをペアや全体に交流することで，外国語活動への関心をさらに高め，児童の言葉を使って本時のまとめをすることができた。

●　本時の振り返り活動では，担任が児童に対して「めあてに対して自分ができたこと，改めて気づいたことなど，何でも記述していいよ。」と伝えた。しかし，児童の振り返りの中には，「美味しそうなケーキが作れて良かったです。」など，本時のコミュニケーションではなく活動そのものに対するふり返りも多く見られた。担任がふり返りの視点を明確に示さなかったことが原因と考えられる。視点を明確にした発問を行うべきであった。

○　児童が書く４線の上に正しくに英語を書くために，手本となる英語を黒板に示すのではなく，それぞれの果物カードに手本を示した。これにより，児童は上下に視点を動かず，上に書いてある手本と同様に書き写すことができた。また，文字の大きさやバランスを意識させる上でも，手本をワークシート内に提示したことは効果的であった。

○　自分が欲しい果物をお店に買いに行くという活動の中で，店の名前を「a ショップ」「o マーケット」など，アルファベットの頭文字で示した。apple が欲しい児童は a ショップに行き，コミュニケーションを通してケーキを作るためのシールをもらった。これは，apple という単語の頭文字から，a というアルファベットの名称を連想させることをねらいとして設定したものである。児童のふり返りでは，「apple はアップルと読むのに，a ショップに行かなきゃいけなかったので，お店を探すのが少し難しかったです。」という記述が見られた。これにより，児童が英語の発音とアルファベットの名称の違いに気付くことができたと考えられる。

第５学年　外国語活動実践記録②

指導者　下川　恵菜
永冨　祐子
福田　峻也
日本人 ALT　江口　ひとみ

１　単元名　He can swim.　できることを紹介しよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１４名，女子１６名，特別支援学級１名，合計３１名）は，４年生の頃から英語体験活動を通して外国語に触れており，外国語活動の学習に馴染みがあるため，毎時間楽しく学習に取り組む様子が見られる。意識調査では，外国語活動の学習に対して，全員が「好き」「どちらかと言うと好き」と答えている。その理由として，「楽しくゲームをしているうちに，いつの間にか英語を話すことができていた。」や「友達といろんな英語を話すのが楽しい。」「分からないこともあるけど，ゲームが楽しい。」などの回答が多かった。また，学習の様子から，男女の仲がよく，ペアや小グループでの活動を意欲的に行うことができる。しかし，複数ではできていても，個人で自分の思いや考えを伝えるなどの活動になると，自信の無さから積極的に活動できない児童もいる。身近な人にインタビューをし，みんなに紹介する場面では，配慮が必要な児童も数名いる。

○　本単元は，ALT や友達などの「できること」や「できないこと」を知ることで，文化の違いなどに気付くことができる教材である。また，英語で自分の「できること」「できないこと」をみんなに紹介することで，自分のできることを自信をもって発表するとともに，友達と自分の同じことや違うことを知り，自他に関してますます関心を高めることができる教材である。

　また，学習指導要領の改訂や外国語活動の教科化にともない，５年生で第三者を表す表現が取り扱われることになった。本校では，光貞カリキュラムとして，年間７０時間の外国語活動の時間を設定している。本単元でも，現行の学習計画に加えて，第三者を表す表現に初めて出合い，身近な人を he/she を使って紹介する活動も取り入れている。

○　指導に当たっては，まず，swim や cook，play soccer などの動作を表す語をジェスチャーを使いながら学習していく。また，チャンツやポインティングゲーム，ジェスチャーゲームなどの活動を通して，動作を表す表現に段階的に慣れ親しんでいくようにする。

　次に，can を使った「できる」「できない」の表現を知り，自分の「できること」「できないこと」を表現していく。英語で表現することへの抵抗感をもたないように，まずは担任や日本人外国語指導助手の「できること」「できないこと」を紹介していく。そして，自分のことが表現できるようになったら，友達の「できること」「できないこと」を予想し，“Can you～?”を使って，できるかどうかを尋ねたり自分のことを答えたりしながら，表現に慣れ親しんでいくようにする。

　単元後半では，第三者を表す表現と出合い，身近な人にインタビューをして紹介する活動に入る。ここでは，he や she をそのまま教えるのではなく，教師が話す人物の紹介を聞いて，それらの違いに気付くようにしていきたい。本単元での身近な人とは，みんなが共通して知っている身近な人として，学校内の教師に限定する。インタビュー活動や他者のできることを紹介する活動を通して，さらに自他のよさに気付き，コミュニケーションへの意欲の向上を図るようにする。また，インタビューの対象を学校内の教師に広げることで，これから初めて出会う人でも戸惑うことなくコミュニケーションをとることができるような，よい経験となるようにする。

○　新学習指導要領の全面実施に向けての先行的な取組として，「書く」活動を取り入れる。音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を，相手に伝える目的をもって手本を参考に書き写す。その際，アルファベット文字は４線に示し，手本を見ながら書き写すことができるようにする。また，第三者を表す代名詞，“he”“she”を用いて，友達の「できること」「できないこと」を紹介する活動を設定する。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

○　主体的・対話的で深い学びの工夫について

自分の「できること」「できないこと」を言う活動では，ペアからグループ，全体と自己表現がしやすいように相手を徐々に広げていく。新学習指導要領には，外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を，「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること。」とされている。特に，小学校においては，「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え」に示される相手意識をもった活動を仕組むことが大切である。そこで，できるかどうかを尋ねたり答えたりする活動では，尋ねる相手の「できること」「できないこと」を予想してから活動する。そして，インタビュー活動を行った後に子どもたちで，Who am I クイズをすることによって，楽しみながらより一層，他者理解を深める場を設定していく。

単元後半では，身近な人にインタビューをして，紹介する活動を設定している。ここでも，インタビューする相手の「できること」「できないこと」を予想することを通して相手意識をより一層もつことができるようにする。インタビュー後は，紹介に向けての結果をまとめ，ペアの友達，班の友達へと紹介していく。そして，ランダムなグループをつくり，その中で自分のことも含めながら他者紹介として Who is he/she クイズをする。その中で数名は，全体の前で他者紹介を行う。このように，段階を踏んだ場の設定をしていくことで。

○　学習評価の工夫について

学習評価については，振り返りカードを使って自己評価を行う。「活動を楽しむことができたか」「進んで英語を話したり聞いたりしたか」「めあては達成したか」などの質問項目を４段階で評価し，気付いたことやわかったこと，友達の学び方でよかったことなど，めあてに即した振り返りを記述する。また，新学習指導要領の内容にある書く活動を取り入れ，評価の参考にする。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　「できること」や「できないこと」について，進んで尋ねたり紹介したりしている。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　動作を表す言葉や「できる」「できない」という表現を聞いたり言ったりしている。 ○　できるかどうかを尋ねたり答えたりしている。
言語や文化に関する気付き【気】	○　英語と日本語とでは，言葉の使い方が違うことに気付いている。 ○　「できること」や「できないこと」で，人にはそれぞれ違いがあることに気付いている。

５　指導計画と評価計画（総時数７時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準＜方法＞
1	動作を表す語やできるかどうかを尋ねたり答えたりする表現，「できる」「できない」の表現を知る。 ○担任と日本人 ALT のデモンストレーションから “Can you～?”“Yes, I can. / “I can～（動作を表す言葉）. No, I can't. “I can't～（動作を表す言葉）.” の意味を推測させる。 ○動作を表す言葉を知る。 ○ポインティングゲームをする。				

	○ジェスチャークイズをする。 ○ペアの友達に自分のできることを言う。 ○Let'Listen１（Hi,friends!2, p11）でどんなことができるか聞き取る。			○	外国語と日本語では,言葉の使い方が違うことに気付いている。 ＜発言分析,振り返りカード分析＞
2	動作を表す語や「できる」「できない」という表現に慣れ親しみ，できるかどうかを尋ねたり答えたりする表現を知る。 ○前時の振り返りをする。 ○キーワードゲームをする。 ○チャンツをする“Can you swim?” ○ペアの友達の「できること」「できないこと」を予想して，尋ねる。 ○Let'Listen2（Hi,friends!2, p11）でどんなことができるか聞き取る。 ○Who am Ⅰクイズをする。		○		動作で表す言葉や「できる」「できない」という表現に慣れ親しむ。 ＜行動観察,振り返りカード点検＞
3	できるかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ○前時の振り返りをする。 ○チャンツをする。“Can you swim?” ○○×ゲームをする。 ○たくさんの友達にインタビューをする。 ○Who am Ⅰクイズをする。 ○第三者の言い方（he/she）について知る。		○		できるかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ＜行動観察,振り返りカード点検＞
4（本時）	第三者の言い方に慣れ親しみ，友達の「できること」について言ったり聞いたりする。 ○前時の復習をする。 ○チャンツをする。“Can you swim?” ◇友達の「できること」をhe/sheを使って紹介する。 ◇例を参考にhe/sheを書き写し,紹介した友達の「できること」をカードにまとめる。		○		第三者の言い方に慣れ親しみ,友達の「できること」について言ったり聞いたりしている。 ＜行動観察･振り返りカード点検＞
5	身近な人に「できること」「できないこと」をインタビューする準備をするとともに，インタビューで用いる表現を言ったり，例を参考に書き写す活動をしたりする。 ○前時の復習をする。 ○チャンツをする。“Can you swim?” ◇Who is he/she?クイズをする。 ◇インタビューに行く先生を決め，インタビューカードをつくる。 ◇ペアの友達とインタビューの練習をする。		○		できるかどうかを尋ねたり答えたりすることができる。 ＜行動観察･振り返りカード点検＞
6	身近な人の「できること」「できないこと」を紹介するために，インタビューで用いる表現を言ったり，例を参考に語句を書き写す活				

	動をしたりする。 ○　前時の復習をする。 ○　チャンツをする。“Can you swim?” ◇　例を参考に紹介する先生の「できること」「できないこと」を書き写す。 ◇　小グループになって，インタビューをした先生について he/she を使って紹介する。	○			「できること」「できないこと」を表す言葉や,第三者を表す言葉を用いながら進んで紹介したり,友達の発表を聞いたりする。 ＜行動観察･振り返りカード点検＞
7	身近な人の「できること」「できないこと」を紹介しようとする。 ○　前時の復習をする。 ○　チャンツをする。“Can you swim?” ◇　グループでインタビューの内容をもとに，自分の紹介も含めながら Who is he/she クイズをする。	○			身近な人の「できること」「できないこと」について進んで尋ねたり,第三者を表す表現を使って紹介したりしようとする。 ＜行動観察･振り返りカード点検＞

６　本時の学習

⑴　日時　　平成２９年１１月１７日（金）　　１４：２０～１５：０５　　国際交流室

⑵　目標　　友達の「できること」を紹介する活動を通して，第三者を表す表現に慣れ親しむ。

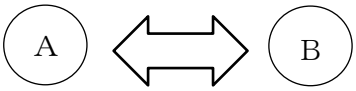
⑶　準備　　Hi,friends!2 デジタル教材　他己紹介カード　振り返りカード　４線黒板

⑷　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点【観点】評価規準＜評価方法＞ ★　特別な教育的支援を要する児童への支援 ◇　新学習指導要領に向けての取組	
	HRT	日本人 ALT
1　挨拶をし,前時の学習の復習をする。 ・　絵カードを見ながら，動作を表す表現を言う。 	○　英語で挨拶し，雰囲気づくりをする。	○　英語で挨拶し，雰囲気づくりをする。
・　チャンツをする。“Can you swim?”	○　オリジナルチャンツを子どもたちと一緒に作る。	○　意欲的に発言したり，ジェスチャーをしたりしている児童を称賛する。 ○　he/she の正しい発音を確認する。
2　本時のめあてを確認する。 めあて　友達のできることを紹介しよう。		
3　友達を紹介する。 ・　ペアになり「できること」を自己紹介する。	○ALT とデモンストレーションを行い，児童が理解できていないところは，日本語で説明する。	○　デモンストレーションを行う。

＜デモンストレーション＞

T1：I can play the piano.
T2：OK! You can play the piano.
T1：I can play basketball.
T2：OK! You can play basketball.
T2：I can play baseball.
T1：OK! You can play baseball.
T2：I can cook.
T1：OK! You can cook.



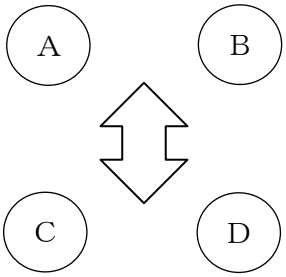
○　ペアでお互いのできることを紹介し合うことができるようにする。

・　グループになり，ペアの友達の「できること」を紹介する。

◇　グループを作り，自分の「できること」とペアの友達の「できること」を第三者を表す表現を使って紹介できるようにする。

＜デモンストレーション＞

A　：He can play baseball.
　　He can cook.
C，D：Nice!
B　：She can play the piano.
　　：She can play basketball.
C，D：Good!



○　デモンストレーションを行う。
○　積極的に活動しているグループを中間評価で褒め，全体によりよい行動を示す。
★　つまずきのある児童に寄り添い，三人称を使って言えるように支援する。
★　動作を表す言葉が分からない場合は，ジェスチャーでもよいことを知らせる。

○　デモンストレーションを行う。

・　AとBはそれぞれCとDに相手のことを紹介する。（CとDも同様）
・　新しいペアを見付け，友達を紹介する。

【慣】　第三者の言い方に慣れ親しみ、友達の「できること」について言ったり聞いたりしている。
＜行動観察・振り返りカード点検＞

4　ペアの友達のできることカードを作る。

◇４線の上に，３本目の線を意識してhe/sheを書き

○最初の文字が大文字であることに気付かせ，３本

・　第三者を表す言葉を例を参考に書き写す。 ・　動作を表す部分にカードを貼る。 5　本時の学習を振り返る。 	写すように支援する。 ○児童が本時の英語表現を繰り返し言えたことなどを褒める。	目の線を意識して he/she を書くよう説明する。 ○児童が積極的に英語を使おうとしていた態度を褒める。

7　実践のまとめ

（1）光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎４線を用いた文字指導

アルファベットを４線上に示した掲示

５，６年生からアルファベットを書く活動が導入されたが、書き慣れていないため４線上に誤って書いてしまう児童が多く見られた。そこで、４線を意識できるように、日本人外国語指導助手を主として①上から三番目の線に赤線を引く②「１階建ての文字」「２階建ての文字」「地下１階建ての文字」「中２階建ての文字」とアルファベットをグループ分けしたカードの提示③アルファベットを黒板に提示する際、全て４線上に示す３つのポイントを抑えて指導を行った。そして、文字を書く際には、「単語と単語の間にスペースがあること」や、「文末にピリオドがあること」、「文章の始まりは大文字であること」など、児童に気付かせることで理解を深め、書く活動へと移行させた。この取り組みにより、誤りが減った上に、書くスピードも速くなった。また、文字に対する気付きが増え、興味関心が高まっていた。

◎コミュニケーションポイントの可視化

コミュニケーションボード

ジェスチャーを用いて発表する児童の姿

友達の発表に褒め言葉をかける児童

本校の外国語活動では、コミュニケーションを行う際のポイント「スマイル」「アイコンタクト」「ジェスチャー」「たくさんの人と」「男女なかよく」「先生とも」をホワイトボードに提示している。アクティビティーに入る前には、このポイントを必ず確認して子どもたちに意識させるようにした。さらに、中間評価で数人の児童が発表する際も、教師だけでなく児童にもポイントをもとにどこがよかったかを意識して見るように声かけを行った。この取り組みにより、特に「スマイル」「アイコンタクト」「ジェスチャー」のポイントを意識してコミュニケーションを図る児童が増えた。

◎クラスルームイングリッシュの活用

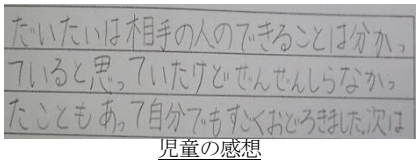
授業の中で、教師が主として児童に対し“Good.”や“Nice.”“Great.”など褒め言葉に当たる英語を積極的に使うようにした。また、児童が発表を行ったが正しい答えではなかった場合は、“Nice try.”や“That's OK.”などの励ましの言葉を使うようにした。児童は、最初は恥ずかしがっていたが、数人の児童が褒め言葉を使った際に、教師が取り上げることで少しずつ浸透していった。「できること」や「できないこと」を尋ねる活動では、尋ねたことに対して相手が「で

きない」と答えた際に“That's OK.”や“No problem.”などの励ましの言葉を使い、気持ちよくコミュニケーションを図ることができていた。

（２）成果と課題

ペアで活動する児童

○　自分の「できること」「できないこと」を言う活動とインタビューをした人物の紹介をする活動では、「ペア」「グループ」「全体」と段階を踏んだ場を設定した。そのため、英語でコミュニケーションを図ることに消極的な児童でも自己表現することに少しずつ慣れ､恥ずかしさや不安が軽減され、活動することができた。また、ペア活動の段階から、コミュニケーションのポイントを意識させることで、繰り返しポイントを抑えながら活動することができた。

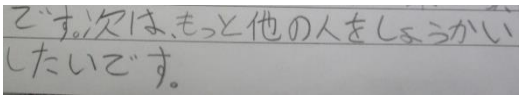


児童の感想

○　インタビューする際には他者理解を深めるために、相手の回答を予想させた。そのため、インタビューのときには、必然的に自分の予想と比べることとなった。予想通りの答えもあれば、予想と違うこともあり、「この人はこんなことができるんだ。」など、友達の新たな一面を知ることができた喜びをたくさん味わうことができていた。

楽しくチャンツをする様子

○　チャンツでは、デジタル教材に収録されているものではなく、オリジナルチャンツを児童たちと作っていった。また、“play baseball”や“play soccer”など動作を表す言葉を言うときには、ジェスチャーをつけることによって、児童はより意欲的に取り組むことができていた。



児童の感想

●　自己表現しやすいように段階を踏んで場を設定したが、全体での発表では、発表する児童が偏っていた。更なる工夫が必要である。

○　毎時間、振り返りカードを用いて、４段階評価とめあてに即した振り返りを記述式で行った。児童の達成度や気付きなどを教師が把握することができた。また、「次は○○○をしてみたい。」などの記述から次時の導入に活用することができ、児童の主体的な学習へつなげることができた。

手本を示した紹介カード

○　書く活動では、「友達のできることを紹介カードに書こう。」など必ず児童に目的意識をもたせて取り組んだ。そのため、児童は「書かされている。」ではなく、「たくさんの友達に紹介するために書く。」という意識をもって書くことができた。

○　he と she の区別ができ、きちんと４線の上に書くことができるように、男の子と女の子のイラストとともに文字の手本を示した。また、その手本を縦に並べて示したことでどの子も抵抗なく文字に親しませることができた。

●　振り返りの時間を授業時間内に確保することができないことがあった。その要因として、１時間の授業の活動量の多さがあげられる。主眼をもとに活動内容を絞っていく必要がある。

●　コミュニケーション活動の際に、教師が側にいなければ活動することができない特別な支援を要する児童がいる場合、他の児童への見取りが不十分になってしまった。そのため、教師が他の児童のところへ行ってもどの子も活動が行えるように、クラス全体として「間違えてもいいよ。」「こんな風に言うんだよ。」といった教え合いができるような雰囲気づくりをしていかなければならないと考える。

●　書く活動の際は、英文を見せながら、文字に対する気付きを促した。児童は多くのことについて気付いていた。文字に親しむこと以上のことを求めず、書く指導を適切に行っていかなければならない。

第６学年　外国語活動実践記録①

指導者　　能美　公一
田中　美加
坂本　修一

１　単元名　Let's go to Italy.　友だちを旅行にさそおう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１５名，女子１６名，計３１名）は，学級としてのまとまりもよく，全員が意欲をもって学習に取り組んでいる。穏やかな児童が多く，協調性がある反面，自分の考えを人前で話すことに苦手意識をもっている児童が多い。外国語活動のアンケートでは，全児童が英語の学習に対して「好き」か「どちらかというと好き」と答えている。その理由として，「英語で行うゲーム活動が楽しい」という旨の回答が多く，「自分のことをみんなに発表する活動が楽しい」という旨の回答は見られなかった。アンケート結果から，本学級の児童の多くは，ゲームを通して英語に慣れ親しむことは好きだが，英語でコミュニケーションを図ろうとする意識はあまり高まっていないと考える。「間違っていたら恥ずかしい」などの英語に対する苦手意識や抵抗感を，ゲームや活動を通して楽しく英語で自分の思いを伝える等の指導の工夫を行うことで，英語で話してみたい，英語を話すことが楽しいと思えるようにしたい。

○　本単元は，行きたい国やその理由について紹介し合うことで，様々な国の名所や文化等についての興味・関心を高めていくことをねらいとしている。また，日本と比較しながら学習を進めることで，改めて日本の言語や文化を振り返る機会にすることもできる。

本単元で取り扱う“want to ～”は，“Hi, friends! 1”の Lesson6 What do you want? や Lesson9 What would you like?と関連している。“want to ～”よりも“would like to ～”の方が丁寧な表現とされるが，“want to ～”がもつ言いやすさやリズムへの乗りやすさは，児童にとって慣れ親しみやすい表現であると考えられる。さらに，本単元は，中学校第２学年の東京書籍“NEW HORIZON 2”における Unit3:My Future Job につながっている。この Unit3 では，将来の夢や職業について，「～するために…」「～したい」などの自分の思いを，不定詞を用いて表現することがねらいとされており，本単元で取り扱う“want to ～”を用いた表現を多く含んでいる。

次期指導要領解説には，「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」について，「単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず，学校教育外においても，生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うことを目標としている」とある。本単元においては，単元構成や活動場面を工夫して，「英語で思いを伝えられて嬉しい」，「英語ではどんな言い方をするのかをもっと知りたい」などと，成功体験や主体的に学び続ける意欲を児童が実感できると考える。

○　指導に当たっては，児童が自分の行きたい国の観光名所や食文化などを調べたり，自分の考えを英語で一生懸命に表現したりできるように，国名クイズを解いたり，自分たちで作ったりする活動を取り入れることで，様々な国やその国の国旗や文化を知る意欲を高められるようにする。また，ステレオゲームやラッキーカードゲーム，チャンツを通して，行きたい国について尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しませる。その後，たくさんの友達とのインタビュー活動の場を設定し，児童一人一人が相手の反応を見ながら学んだ表現をトレーニングすることで，自信をもって考えを伝え合うことができるようにする。単元末では「おすすめの国の紹介」の場を設定し，児童がこれまでの学びを生かして，おすすめの国を紹介したり，友達の紹介を熱心に聞いたりすることができるようにする。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

〇　主体的・対話的で深い学びの工夫について

本単元では，“Hi, friends! 1”で従来取り扱われている１０ヶ国に限定せず，国際交流室に掲示している絵カード（ドイツや韓国などの国旗が描かれているもの）の国や，児童が興味をもってい

るその他の国についても紹介することを認め，児童一人一人が主体性をもって外国のことを学べるようにする。また，ペア・グループ・全体など学習形態の変化を積極的に取り入れ，たくさんの人とのコミュニ―ケーションの機会を設定し，行きたい国について尋ねたり答えたりする表現への慣れ親しみを深められるようにする。また，“I want to go to ～.”と“I want to see(eat) ～.”を同時に導入するのではなく，“I want to go to ～.”の表現に慣れた後に，“I want to see (eat) ～.”の表現を取り扱い，外国語の学習に難しさを感じている児童にとっても学びへの抵抗を少なくしたい。

○　学習評価の工夫について

本来は４時間で設定されている本単元の総時数を８時間に設定し，どの児童でも単元を通して無理なく楽しみながら英語の表現に慣れ親しめるように，スモールステップの指導を心がける。

また，行動観察に加え，毎時間の終末に行う振り返り活動や，ワークシートへの記述を評価に活用する。担任一人で様々な学習形態における児童の姿を見取る必要があるため，授業中に見取ることができなかった児童の考えや気付き等を振り返り活動やワークシートから見取り，難しさを感じている児童へ声かけを行ったり，書く活動（４線に正しく文字を書く，大文字と小文字を正しく使い分けて書く）に課題が見られる児童への添削を行ったりして，次時以降の学習を円滑に進められるようにする。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　自分が行きたい国を理由とともに紹介したり，友達のおすすめの国の発表を聞いたりしている。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　世界のどの国に行きたいかを尋ねたり，答えたり，紹介したりする表現に慣れ親しむ。
言語や文化に関する気付き【気】	○　英語と日本語との国名の言い方の違いや，他者への紹介では主語を You にした表現がふさわしい場合があることに気付く。

５　指導計画と評価計画（総時数８時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準＜方法＞
1 ・2	国名や世界遺産の言い方を知るとともに，英語と日本語の国名の言い方に気付く。 ○《Let's Play(1)》で，知っている国旗について発表し，（　）に国名を記入する。 ○キーワードゲームをする。 ○《Let's Listen(1)》で，どの国の世界遺産か考える。 ○《Let's Play(2)》で，国旗クイズを作って発表する。 ○チャンツをする。“Let's go to Italy.”			○	国名の英語と日本語との言い方の違いに気付いている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞
3 ・4	行きたい国について尋ねたり，答えたりする表現について知り，友達との会話を試す。 ○国名の言い方を復習する。 ○チャンツをする。“Let's go to Italy.” ○「ロールプレイングスキット」を視聴する。 ○《Let's Play(3)》で，行きたい国の尋ね方と答え方を知り，友達にインタビューする。 ○「～を見たい（食べたい）」の言い方を知り，行きたい国の理由として付け加える。 ○ラッキーカードゲームをする。		○		行きたい国について尋ねたり，答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞

5（本時）	行きたい国について尋ねたり答えたり，理由を伝えたりする表現に慣れ親しむ。 ○　国名の言い方を復習する。 ○　チャンツをする。“Let’s go to Italy.” ○　ラッキーカードゲームをする。 ○　友達へのインタビュー活動をする。 ○　入国審査の場面で，自分の行きたい国とその理由を発表する。 ◇　自分の行きたい国とその理由について，ワークシートに記述する。	○			行きたい国について尋ねたり，答えたり，理由を伝えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
6	おすすめの国を紹介する表現について知り，紹介シートづくりの見通しをもつ。 ○　国名の言い方等を復習する。 ○　チャンツをする。“Let’s go to Italy.” ○　《Let’s Listen(2)》で，フランスについての説明を聞き，分かったことを発表する。 ◇　《Activity》で，自分が行きたい国とその理由について紹介する準備をする。			○	他者への紹介では，主語を You にした表現がふさわしいことに気付いている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞
7	「おすすめの国の紹介シート」を作ることをもとに，次時に向けて紹介の練習をする。 ○　国名の言い方等を復習する。 ○　チャンツをする。“Let’s go to Italy.” ◇　紹介シート作りと，紹介の練習をする。	○			おすすめしたい理由を詳しく調べたり，よりよい紹介をできるように進んで練習したりしている。 ＜行動観察・振り返りシート点検＞
8	おすすめの国について自分の思いがはっきりと伝わるように紹介したり，友達の紹介を熱心に聞いたりする。 ○　チャンツをする。“Let’s go to Italy.” ◇　おすすめの国を紹介する。 ○　単元の振り返りをする。	○			おすすめしたい国を理由とともに紹介したり，友達のおすすめする国やその理由を熱心に聞いたりしようとしている。 ＜行動観察・振り返りシート点検＞

６　本時の学習

⑴　日時　平成２９年１０月２５日（水）　　１４：３５～１５：２０　　国際交流室

⑵　目標　友達とインタビューし合う活動を通して，自分が行きたい国を理由とともに紹介したり，友達の行きたい国の発表を聞いたりすることができるようにする。

⑶　準備　教師用・児童用絵カード（国旗），デジタル教材，ワークシート，見本のパスポート

⑷　展開

主な学習活動・内容	○指導・支援上の留意点【観点】評価規準＜評価方法＞ ★特別な教育的支援を要する児童への支援 ◇新学習指導要領実施に向けての取組

1　国名に関するチャンツやゲームを通して，前時までの復習をする。
・国名の言い方を復習する。
・チャンツをする。“Let’s go to Italy.”
・ラッキーカードゲームをする。

○　国名に関するゲームやチャンツを通して，日本語とは異なる国名の言い方や，行きたい国についての会話の仕方を想起できるようにする。

○　行きたい国についての会話（ラッキーカードゲームを含む）は，座席が近くの友達としか行ってこなかったことを確認することで，もっとたくさんの友達と行きたい国についての会話をする意欲を高められるようにする。

めあて　　行きたい国とその理由について，友達と伝え合おう。

2　担任と児童とのデモンストレーションを参考にして，友達とインタビュー活動を行う。

【担任と児童とのデモンストレーション】
T&C：Hello.
T：Where do you want to go ?
C：I want to go to ～.
T：Why?
C：I want to see (eat) ～.
※下線部の役割を入れ替えて，再度インタビュー活動を行う。
T&C：Thank you. (See you.)

○　インタビュー活動のデモンストレーションを行い，児童が活動の見通しをもてるようにする。
○　「コミュニケーションのポイント」を示した掲示物を確認する機会を設け，児童が「元気よく　スマイルで」や「男女なかよく」などを意識できるようにする。

★　インタビューする場面では，コミュニケーションを苦手にしている児童の近くに担任が行き，インタビュー相手とのマッチングをしたり，うまく会話表現を言えないときに助言したりする。

【コ】行きたい国について尋ねたり，答えたり，理由を伝えたりしている。＜行動観察＞

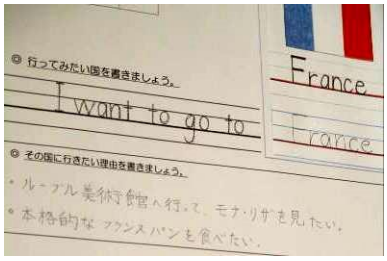
○　活動開始から数分後にインタビュー活動を一旦止めて，上手に行っていたペアに模範例として学級全体の前で再度インタビュー活動を行うようにする。この模範例をもとに，活動中に意識すべき良い点について学級全体で共通理解できるようにする。

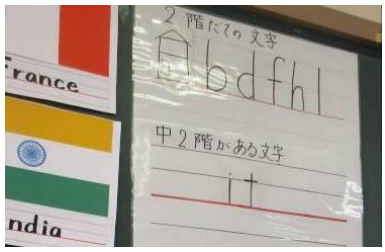
3　入国審査の場面で，自分の行きたい国とその理由を発表する。

【担任と児童との入国審査のやり取り】
T：Hello. Passport please.
　What's your name?
C：My name is ～.
T：When is your birthday?
C：My birthday is ～.
T：Where do you want to go ?
C：I want to go to ～.
T：Why?
C：I want to see (eat) ～.
T：OK.　(スタンプを押す)
　Here you are.
C：Thank you. See you.

○　旅行者役を児童，入国審査官役を担任という設定で活動を進め，児童が行きたい国についての会話を学級全体が知れるようにする。
○　名前や誕生日についても担任が尋ね，既習事項であるそれらの応答も児童が行えるようにする。
○　自分の行きたい国とその理由を発表できた児童には，パスポートに見立てたプリントに記念スタンプを担任が押す。発表した児童がコミュニケーションへの達成感を得られるようにするとともに，やり取りを見ていた他の児童が同じ活動に挑戦する意欲を高められるようにする。

4　行きたい国を日本人外国語指導助手へ伝えるために，ワークシートに記入する。





◇　隔週で児童の指導をしてくださっている日本人外国語指導助手（ひびきの小と兼務）が不在であることから，本時の学習内容を指導助手に伝えるために，自分が行きたい国を振り返りシートに記入できるようにする。
◇　“I want to go to”についてはワークシート上の文字をなぞって書くように，国名については自分で選んだカード（国旗と英語表記入り）を見ながら書くように促す。
◇　児童が４線を意識して文字を正しく書けるように，「２階だての文字」や「中２階がある文字」など，児童にとって馴染みのあるキーワードで例示された掲示物を黒板上に貼り，学級全体で確認する場面を設ける。
◇　国名の頭文字を大文字で書いていない児童や，小文字を正しく書けていない児童に対して，机間指導を行う。
○　その国に行きたい理由については，日本語での記述でよいことを伝える。

5　本時の学習を振り返る。

○　ワークシートに授業の感想を書く際に，「上手にできたと思うところ」や「難しいと感じたところ」，「友達の参考にしたい上手なところ」などの振り返る視点を与え，児童がより具体的な内容を記述できるようにする。
○　ワークシートに記述した感想を数名に発表するよう促し，学級全体が自分の感想との共通点や相違点を比べられるようにする。

７　実践のまとめ

(1)　Ｂ研→Ａ研に向けての変更点

A：Where do you want to go ?
B：I want to go to ～.
A：Why?
B：I want to see (eat) ～.
ラッキーカードゲームでのやり取り

◎　本時で活用する「尋ね方と答え方」の復習

本時のラッキーカードゲームは，右に示した尋ね方と答え方を活用しながら進める。前時までに児童はこのゲームを経験していたため，Ｂ研ではこのゲームを通して受け答えの復習を効果的に進めることができた。しかし，どのように尋ねればよいかを忘れている児童や，質問に答える際に国名だけを言う児童の姿も一部で見られた。そこでＡ研では，ゲーム開始前に担任と学級全体の双方向で，尋ね方と答え方の復習を行った。そのため，やり取りに関する児童の理解が深まり，ゲームを円滑に進めることにつながった。

◎　入国審査の場面における児童への動機づけと役割設定の工夫

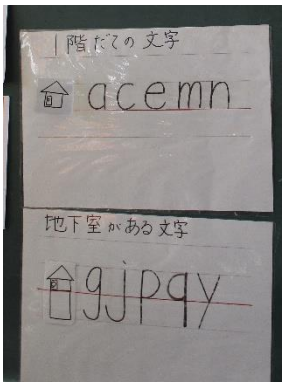
入国審査の疑似体験は，社会とつながる有意義なものであると考えられる。この活動には，Ａ研とＢ研のどちらにおいても学級全体が高い関心を示し，Ｂ研では旅行者役だけでなく審査官役も児童が務めた。一方で，児童の意欲に応える形でこの活動を計５組分行ったため，終末の振り返り活動の時間確保に課題が残った。そこでＡ研では，旅行者役のみを児童が務めることにして，授業全体の時間配分を考慮した上で実演は２回とした。多くの児童がこの活動に関心を示していたため，次時において旅行者と審査官役を児童が務める形式で，やり取りを復習する場面を設定している。

パスポートの提示

また，Ａ研では，児童が具体的にその場面を想像し，進んで旅行者役に立候補するように，担任が実物のパスポートを学級全体に向けて提示した。自分のパスポートを持っていない児童が多いためか，学級全体が大きな関心を示し，旅行者役を務めようとする意欲的な態度につながった。

◎　４線を意識して正しく文字を書くための事前確認

Ｂ研では，ワークシートを拡大印刷したものを掲示した上で，“I want to go to”についてはワークシート上の文字をなぞって書くように，国名については自分で選んだカードを見ながら書くように促した後に，書く活動へ移行した。カードには国旗とともに国名が４線上に英語表記されたものがあるため，多くの児童が国名を正しく記述することができた。



文字指導に関する掲示物

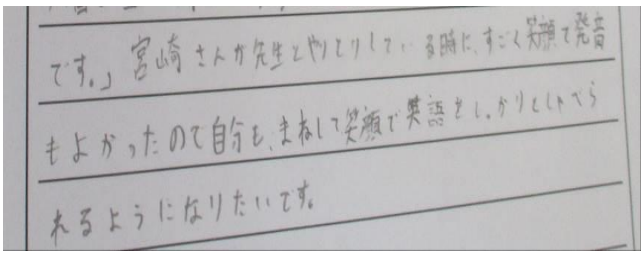
Ａ研では，児童が４線を意識して文字を正しく書く意識をさらに高められるように，「１階だての文字」や「地下室がある文字」など，児童にとって馴染みのあるキーワードで例示された掲示物を黒板上に貼り，学級全体で確認する場面を設けた。また，“Italy”（全４タイプの小文字が含まれている）を例に，どの文字が「地下室がある文字」なのか等を児童に尋ねたり，国名の頭文字は大文字で書くことを確認したりして，理解の深化を図った上で書く活動へと移行した。

学習活動と評価の可視化

(2)　光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

◎　学習活動と評価の可視化

本校の外国語活動では，学習活動の流れを示した掲示物を導入時に紹介し，本時がどのように展開していくのかを児童が見通せるようにしている。第６学年では，それぞれの活動が終了する度に，この掲示物の中に担任が二重丸などを描き加え，その活動についての評価を可視化


デモンストレーションにより見通しをもてた児童の感想

できるようにした。この取組により，達成感を得ている児童の姿を担任がすぐに確認できる上，楽しみながら活動に取り組む雰囲気づくりへと進めることができた。

◎　デモンストレーションによる説明

インタビュー活動を始める前に，担任と指名した児童で手本となるデモンストレーションを行い，学級全体が活動の見通しをもてるようにした。これをもとに，「コミュニケーションのポイント」を示した掲示物にある「元気よく スマイルで」や「男女なかよく」などを意識して活動することに，児童は見通しをもつことができていた。

(3)　成果と課題

○　本単元では，総時数を４時間から８時間へと増やした上で単元構成を進めたため，“I want to go to ～.”と“I want to see(eat) ～.”を同時に導入せず，“I want to go to ～.”の表現に慣れた後に，“I want to see (eat)　～.”の表現を取り扱った。そのため，外国語の学習に難しさを感じている児童にとっては学びへの抵抗が少なくなったようで，単元末に設定した「おすすめの国の紹介」では，全ての児童が他者の力を借りずに紹介することができた。

○　本単元では，ワークシートを持たずに児童同士のインタビュー活動をするように促した。そのため，アイコンタクトやジェスチャーを意識した活発なコミュニケーションが進められるようになっていた。特に本時のような，“Why?”を用いて双方向のやり取りを続ける場面においては，ワークシートを持たないことで自然な会話が成り立ちやすくなると感じた。

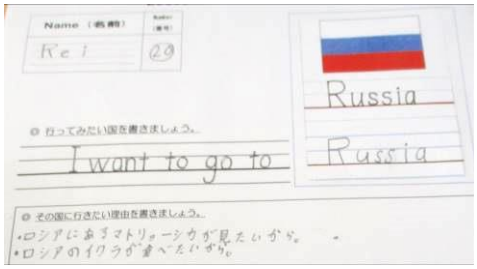
○　単元構成の段階で，社会科などの他教科との関連を図り，おすすめの国の紹介シートづくりを進めるための調べ学習の時間を十分に確保することができた。また，国際交流室の資料や和英辞典，コンピュータの使用も認めるなど，調べ学習を進める上での環境づくりにも努めたことが，単元末で児童一人一人が多様性のある紹介をできたことにつながったと考える。

●　発音の良し悪しにこだわる児童が多く，単元序盤は友達とのコミュニケーションに恥ずかしさや不安を感じている姿が見られた。「小学校段階では発音にこだわらず，日本語訛りの英語でよい」という指導を繰り返し，児童がより積極的な態度でコミュニケーションに臨めるようにしたい。

●　第６学年は中学校進学を視野に入れる段階であるため，小中連携の視点から，中学校の英語科教員との連携を図り，授業づくりについて意見交換を進められればなおよい。

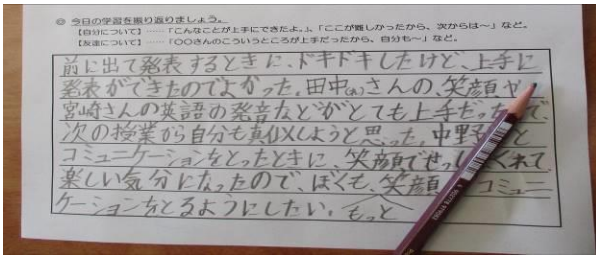
○　１単位時間の中に中間評価を設定したことで，友達のよさを見つける児童の姿，その後の活動でそのよさを取り入れたコミュニケーションを心がける児童の姿が，多く見られるようになった。

○　書く活動では，児童が文字を正しく書けるように，予め４線上に英語表記された国旗カードを準備し，自分が行きたい国名をそのカードを見ながら書けるようにした。カード上段には国旗と英語表記があり，下段には記入スペースがある。カードをワークシートへ貼り付ける際に，ほとんどの児童が，ワークシート側の４線とずれが生じないように，慎重に位置を確認して貼り付けていた。書く活動を始める前に，「２階だての文字」などの全４タイプの小文字について確認したことが，児童が４線を強く意識することにつながったと考えられる。



４線を意識した書く活動

○　毎時間の終末に，授業の中での成長や今後の抱負に関する振り返りの視点を示し，シートへの記入時間を５分以上確保していたため，児童一人一人がどんなことに喜びや難しさを感じていたのかを，担任が詳しく把握することができた。また，入国審査の活動を次時にも復習として加えるなど，学級の実態に沿っ


振り返りシートの一例

た学習計画の立案にもつなげることができた。

- 書く活動においては,「単語や文法を覚えるために書く」ということにならないように，相手意識をもてる場面を選ぶことが大切である。一方で,目的意識も毎回もてるようにするというのは,場の設定が難しいことがある。児童が自然に「書きたい」と思える場面を，今後も考えたい。
- 児童の振り返りシートを見ると，めあてとの整合性がとれていない内容が書かれていた。振り返りの視点の与え方や，めあてそのものの妥当性をよく考えた上で授業展開をする必要がある。

第６学年　外国語活動実践記録②

指導者　坂本　修一
田中　美加
能美　公一

１　単元名　What time do you get up?　　一日の生活を紹介しよう

２　指導観

○　本学級の児童（男子１５名，女子１６名，合計３１名）は，意識調査の結果より，２９名の児童が，外国語活動の学習を「好き」または「どちらかというと好き」と回答している。理由は，「ゲームが楽しいから」「友達のことを知ることができるから」「新しいことをたくさん知ることができるから」というものが多かった。一方，２名の児童は「あまり好きではない」または「嫌い」と回答しており，その理由は，「何と言っているのかわからなくて，ついていけないから」であった。

これらのことから，本学級の児童の多くは，外国語活動に意欲的に参加しており，英語を用いて他者とコミュニケーションを図る楽しさや外国の言語や文化について理解を深めることの楽しさを味わうことができているといえる。しかし，学習に戸惑いがあり，楽しいと思っていない児童がいることもわかった。

○　本単元では，世界には時差があることに気付き，世界の様子に興味をもつとともに，生活を表す表現や一日の生活についての時刻を尋ねる表現に慣れ親しみ，積極的に自分の一日を紹介したり，友達の一日を聞き取ったりすることをねらいとしている。そこで，家庭では，それぞれの児童が違った時間帯に違った生活をしていることから，放課後や休日のお互いの生活時刻の違いについて興味をもち，一日の生活について，友達に尋ねたり答えたりする活動を設定する。また，積極的にコミュニケーションをとることができる単元である。使用する英語表現としては，１～６０までの数字や“get up” や “go to school” 等，１６以上の生活を表す表現，“What time do you~?”といった時刻を尋ねる表現などである。

○　指導に当たっては，本単元で取り扱う英語表現に慣れ親しむようにするために，毎回の授業の挨拶時に現在の時刻について児童に尋ねるようにしたり，前時までに学習した英語表現について復習したりする。また，様々な動作の英語表現をリズムよく復唱したり，時間を尋ねる表現についてチャンツを使用したり，様々なゲームをしたりすることで，本単元で取り扱う英語表現を楽しみながら学習することができるようにする。

第１時，第２時では，ナンバーゲームやジェスチャーゲーム，チャンツ等の活動を通して，時刻の言い方や“get up”，“go to school”など，生活を表す表現を知り，慣れ親しむようにする。

第３時，第４時では，“What time do you～?”という，一日の生活について時刻を尋ねる表現を使って，コミュニケーションを図る活動を通して，表現に慣れ親しむようにする。ここでは，児童の表現への慣れ親しみの度合いを考慮しながら，友達にインタビューをする活動を，段階的に行っていく。友達の生活の時刻について聞く活動を通して，他者とコミュニケーションを図る楽しさを感じることができるようにする。

第５時では，Hi, friends! 2, p24 の Let’s Listen 3 を活用して，世界各国の都市での，生活時刻についてデジタル教材の音声や動画を用いて聞いたり観たりする活動を設定し，世界には時差があることや世界はつながっていることに気付くようにしたい。

第６時，第７時では，これまでに学習した，時刻の言い方や生活を表す表現を使って，自分の一日の生活時刻について発表する場面を設定する。ジェスチャー等を使って，相手に伝わるように工夫して，自分の一日を紹介できるようにする。また，本単元を通して，インタビューや発表の際は，充分に慣れ親しんだ表現を用いて，無理なく進めることができるように配慮していく。

○　新学習指導要領の全面実施に向けて，高学年では，先行的に「書く」活動を取り入れる。その際，アルファベット文字は４線に示し，手本を見ながら写し書きすることから，段階的に無理な

く書く活動を設定する。また，相手意識をもって書くことができるよう場面設定を工夫する。

３　本単元における主体的・対話的で深い学び・学習評価の工夫

○　主体的・対話的で深い学びの工夫について

本単元では，自分の一日を紹介するという単元目標を設定し，活動に取り組んでいく。外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方について，新学習指導要領では，「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること。」と示されている。その中で，小学校では「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉える。」ことが重要とされている。そこで，相手意識をもってコミュニケーション活動を行い，他者との関わりについて考えることができるようにする場面を設定する。

まず，平日の起床・登校・就寝時刻についてインタビュー活動を行い，次に，休日の生活時刻について，インタビュー活動を設定する。インタビュー活動を通して，他者とコミュニケーションをとることの楽しさを感じ取ることができるようにする。インタビュー活動の振り返りの場面では，インタビューをして一番印象に残った質問についての英語表現を，「書く」場面を設定することで，相手意識をもって書く活動ができるようにする。

また，世界地図を掲示しながら，世界の都市の時刻やそのときの行動を紹介することで，世界では様々な人がそれぞれの地域で様々な生活をしていること，そして，自分達もその一員であることを感じ取ることができるようにする。

さらに，自分の一日を紹介したり，友達の発表を聞いたりすることで，伝える喜びを味わうともに，友達の発表を積極的に聞く態度の育成を図るようにする。

○　学習評価の工夫について

学習評価については，インタビューを行う際に，本単元で取り扱う英語表現を用いて，積極的に他者と関わろうとしているか行動観察を行う。単元末の場面では，学習したことを生かして，自分の一日の生活を書いたり，進んで発表したりしているかどうかを評価する。

また，学習の振り返りをする場面では，毎回，振り返りシートを用いて，学習の記録を残すようにする。その際，めあてに沿って振り返りを書くように伝えることで，児童一人一人の学習の理解度やめあての達成度等を把握するための資料として活用する。

４　目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度【コ】	○　相手に伝わるように工夫して，生活時刻について積極的に尋ねたり，答えたり，紹介したりしている。
外国語への慣れ親しみ【慣】	○　時刻を表す表現や生活を表す表現を知り，聞いたり，言ったりしている。
言語や文化に関する気付き【気】	○　世界には，時差があることや世界はつながっていることに気付いている。

５　指導計画と評価計画（総時数７時間）

時	目標と主な活動	評価			
		コ	慣	気	評価規準＜方法＞
1	時刻を表す表現に慣れ親しむ。 ○　一日の生活を英語で紹介するために必要なことを話し合う。 ○　《Let's Play１　ナンバーゲーム》で，１～６０の言い方を確認し時刻の言い方を知る。 ○　《Let's Listen１》を行い，時刻を表す				

	表現に慣れ親しむ。 ○　時刻を聞き取って，時計に数字や針を書き込む。 ○　ジェスチャーゲームをして生活を表す表現の言い方を知る。		○		時刻を表す表現を知り，聞いたり言ったり書いたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
2	生活を表す表現に慣れ親しむ。 ○　時刻を表す表現の復習をする。 ○　《Let's Play２　おはじきゲーム》をして，生活を表す表現に慣れ親しむ。 ○　《Let's Listen２》を行い，自分とさくらの生活時刻を比べる。 ○　時刻の尋ね方について知る。 ○　チャンツをする。"What time do you get up?"		○		生活を表す表現を知り，聞いたり言ったりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
3	時刻を尋ねる表現に慣れ親しむ。 ○　ミッシングゲームをして生活を表す表現に慣れ親しむ。 ○　チャンツをする。"What time do you get up?" ○　《Activity１》で，指導者の一日についてインタビューをする。 ○　平日の起床・登校・就寝の時刻について友達にインタビューをする。		○		時刻を尋ねる表現を知り，聞いたり言ったりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
4（本時）	相手に伝わるように工夫して，インタビュー活動を行う。 ○　ラッキーカードゲームを行い，生活を表す表現の復習をする。 ○　チャンツをする。"What time do you get up?" ○　ステレオゲームを行い，時刻の尋ね方について復習する。 ◇　休日の生活時刻について友達にインタビューをする。	○			相手に伝わるように工夫して，生活時刻について積極的に尋ねたり，答えたりしている。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞
5	世界には時差があることや世界はつながっていることに気付く。 ○　生活を表す表現や時刻の言い方，尋ね方について復習する。 ○　チャンツをする。"What time do you get up?" ○　《Let's Listen３》を行い，時差があることについて知る。 ○　《Activity１》で行った，指導者の日本での生活時刻は，他国では何時なのか考える。			○	世界には時差があることや世界はつながっていることに気付いている。 ＜発言分析・振り返りカード分析＞

6	相手に伝わるように自分の大好きな一日について紹介する表現に慣れ親しむ。 ○　生活を表す表現や時刻の言い方について復習する。 ○　チャンツをする。“What time do you get up?” ◇　自分の大好きな一日についての紹介カードを作る。		○		自分の一日の生活とその時刻について，ワークシートに表現している。 ＜行動観察・ワークカード点検＞
7	相手に伝わるように工夫して，自分の大好きな一日について紹介する。 ○　生活を表す表現や時刻の言い方について復習する。 ○　チャンツをする。“What time do you get up?” ○　自分の大好きな一日について，ジェスチャーをしながら，みんなの前で発表する。	○			相手に伝わるように工夫して，自分の一日を紹介している。 ＜行動観察・振り返りカード点検＞

６　本時の学習

⑴　日時　　平成２９年１１月１７日（金）　１４：２０～１５：０５　　６の１教室

⑵　目標　　相手に伝わるように工夫して，生活時刻について積極的に尋ねたり，答えたりする。

⑶　準備　　ワークシート，振り返りカード，生活の英語カード

⑷　展開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点【観点】評価規準＜評価方法＞ ★　特別な教育的支援を要する児童への支援 ◇　新学習指導要領実施に向けての取組
1　挨拶をする。 ・　子ども達同士でも挨拶をする。 コミュニケーションのポイント ・ Smile（笑顔） ・ Eye contact（アイコンタクト） ・ Big voice（大きな声） ・ Gesture（ジェスチャー） ・ With everyone（誰とでも） ・ With teachers（先生とも）	○　コミュニケーションのポイントを確認することで，ポイントを意識しながら，挨拶するようにする。
2　前時までの学習を想起し，本時のめあてを確かめる。 めあて　休日の生活時こくについて，友達にインタビューをしよう。	○　前時の学習で，平日の起床・登校・就寝時間についてインタビューしたことを想起するようにし，他にどのようなことを聞きたいか尋ねることで，休日での友達の生活時刻について興味をもつようにする。
3　生活を表す表現を確かめる。 ・　ラッキーカードゲームをする。	○　今までに学習した英語表現について，楽しみながら復習するようにする。

4　生活の時刻についての尋ね方を確かめる。

・ チャンツをする。

“What time do you get up?”

・ ステレオゲームをする。

5　休日の生活の時刻について友達にインタビューをする。

デモンストレーションの内容

質問者：Hello.
回答者：Hello.
質問者：What time do you get up?
回答者：At 6:30.
質問者：6:30?
回答者：Yes.
質問者：Ok, thank you.
回答者：Thank you.

（質問者は担任，回答者は特定の児童が行う）

6　本時の学習を振り返る。

・　振り返りをワークシートに書き，発表する。

○　集中して友達の答えを聞く活動の中で，楽しみながら時刻を尋ねる表現に慣れ親しむようにする。

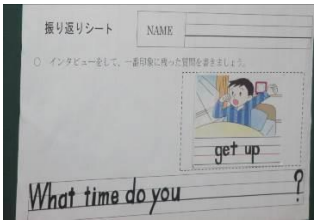
○　デモンストレーションを行うことで，インタビューの仕方のイメージをもつようにする。

★　インタビューをする場面では，担任はA児の近くに行き，インタビュー相手とのマッチングをしたり，うまく表現できていないときに助言をしたりする。

○　コミュニケーションのポイントを意識している児童や，理由まで聞いている児童を中間評価で褒めることで，全体によりよい行動を示すようにする。

【コ】　相手に伝わるように工夫して，生活時刻について積極的に尋ねたり，答えたりしている。
＜行動観察・振り返りシート点検＞

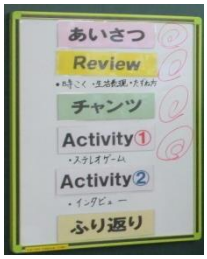
◇　振り返りの中で，インタビューをして，一番印象に残った生活表現を英語で書き写すようにする。



７　実践のまとめ

(1)　光貞小「授業のスタンダード」に基づいた児童の変容

コミュニケーションのポイントの可視化

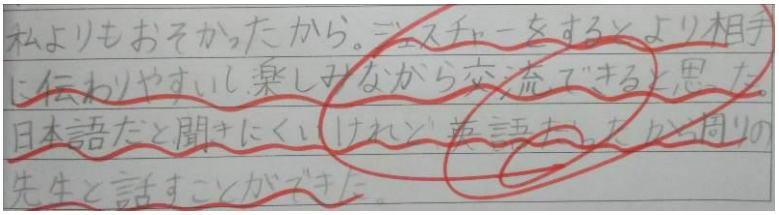


学習活動の可視化

◎　コミュニケーションのポイントと学習活動の可視化

本校の外国語活動では，黒板にコミュニケーションのポイントを掲示して，ポイントを意識させながら学習活動を進めるようにしている。この取組により全ての活動において，ポイントを意識して活動する児童が増えた。特に，“Gesture”（ジェスチャー）“With everyone”（誰とでも）“With teachers”（先生とも）を意識して活動できている児童の数は，授業を重ねるごとに増えていった。

コミュニケーションのポイントを意識して活動した児童の感想



また，学習活動の流れを示した掲示物を導入時に紹介し，本時がどのように展開していくのかを示すようにしている。この取組により，児童からは「次に何をするのか分かりやすい。」「流れがあった方が安心する。」などの声があがり，見通しをもって活動することができた。

◎　教室英語の活用

教室英語を多くの児童が使うことができるように，担任が積極的に教室英語を話したり，教室に掲示したりするとともに，児童に対しても積極的に話すよう促した。この取組により，授業を重ねるごとに教室英語を話す児童が増えていった。具体的には，発表した児童に対する，“Good.” “Great.” “Nice.”など言葉や“Nice try.” “Nice challenge.”などの積極性を褒める言葉，“Yes.” “You are welcome.”などの返事を表す言葉が多く聞かれた。さらには，児童から「もう一度お願いします（“One more please.”）って何と言うのですか。」と質問があるなど，日本語ではなく，英語を積極的に使おうという姿が見られた。

教室英語の掲示

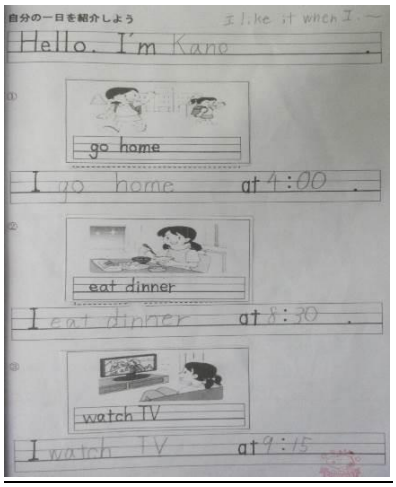
◎　担任（Ｔ１）の役割を意識した授業展開

本単元の指導は担任のみで行った。単元の序盤はデジタル教材の“Hi, friends! 2”のロールプレイングスキットやチャンツ等を活用し，学習を進めていった。これらの取組によって，児童は英語の正しい発音の仕方をデジタル教材から学び，真似して発音することができた。また，活動の説明の際には，児童を一人指名し，担任と児童とで手本となるデモンストレーションを行った。デモンストレーションを行う際には，先述したコミュニケーションのポイントを意識して行ったり，再度ポイント児童に確認したりした。これらの取組によって，児童は見通しをもって活動することができた。

デジタル教材の音声に合わせて歌う様子

デモンストレーションの様子

(2)　成果と課題（○成果　●課題）



自分の一日を紹介するワークシート

○　本単元では，総時数を５時間から７時間へと増やした上で単元構成を進めたため，生活を表す表現や時刻の言い方，尋ね方について学習する時間を多く取り入れた。生活の時刻について尋ねる場面では，まず第３時にチャンツと同じ表現である，起床・登校・就寝時間についてインタビューをして，第４時では，児童が聞いてみたい休日の生活時刻についてインタビューをした。児童の表現への慣れ親しみの度合いを考慮しながら，段階的に活動を行っていったことで，児童全員が積極的に活動することができた。

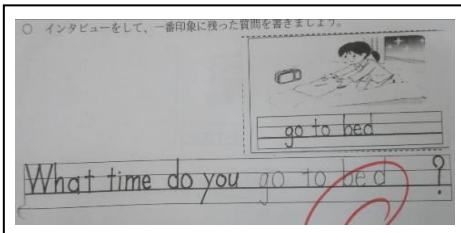
○　本単元の単元末に設定した「自分の大好きな一日についての紹介」では，生活表現を英語で記したカードをワークシートに貼り，ワークシートを見て発表を行ったことで，全ての児童が自分の一日について，学習した表現を使って紹介することができた。

○　本単元では，ワークシートを持たずにインタビュー活動を行った。そのため，目を合わせたりジェスチャーをつけたりするなど，ポイントを意識した活発なコミュニケーションが進められるようになった。

●　休日の生活時刻についてインタビューする場面では，起床時間と就寝時間ついてインタビューをしている児童が多く，偏りが見られた。児童が他の生活についても尋ねたいと思えるような，発問や教材の工夫を考えていきたい。

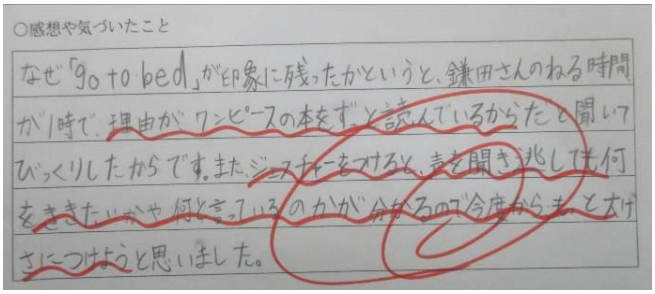
●　より自然なコミュニケーションをするため，頷いたり聞き返したりするなど，相手の言葉を受けて会話を広げられるようにしたい。

○　１単位時間の中に中間評価を設定したことで，コミュニケーションのポイントを再確認したり“Why?”と理由まで尋ねて，より会話を広げている児童を紹介したりした。この中間評価によって，よりよいコミュニケーションを心がける児童の姿が，多く見られるようになった。



４線を意識した書く活動

○　書く活動では，児童が文字を正しく書けるように，予め４線上に英語表記された生活カードを準備し，インタビューをして一番印象に残った質問をそのカードを見ながら書けるようにした。カード上段には生活の様子と英語表記があり，下段には記入スペースがある。この取組によって，全ての児童が４線を意識して手本と同じように，書くことができていた。


○感想や気づいたこと

なぜ「go to bed」が印象に残ったかというと、鎌田さんのねる時間が1時で、理由がワンピースの本をずっと読んでいるからだと聞いてびっくりしたからです。またジェスチャーをつけると、声を聞き逃しても何をききたいかや何と言っているのかが分かるので今度からもとなげさにつけなると思いました。
振り返りシートの一例

○　毎時間の終末では，視点を示した上で学習の振り返りを行った。シートへの記入時間を十分に確保していたため，児童一人一人の学習の理解度やめあての達成度等を把握するための資料として活用することができた。

●　書く活動においては，カードを貼る際に，点線の中にうまく貼れなかったり，記入スペースにカードを貼ろうとしていたりする児童が見られた。カードを貼る際には，貼る場所についても丁寧に説明していきたい。

◇　光貞小「授業のスタンダード」ができるまで

◇　英語教育リーディングスクール推進委員会　環境部の取組

◇　英語教育リーディングスクール推進委員会　調査部の取組

◇　本年度の成果と課題

◇　光貞小「授業のスタンダード」ができるまで

５月１７日（水）に行った提案授業を基盤にして，「授業のスタンダード」についての意見を出し合った。各学年別に出された意見は以下の通りであった。

共通理解して「授業のスタンダード」に組み込んだ方がよいこと

（１年）
○　授業の流れを示すと担任と児童が分かりやすい。
○　掲示カードの利用
○　ボディパフォーマンスを取り入れて，子どもたちの興味を引き付ける。
○　担任も分からないから一緒に学ぶのだという気持ちを出していく。

（２年）
○　活動の時のルールを決める。（スマイル，元気よく，アイコンタクト，男女一緒に）
○　授業の流れを決める。
○　挙手（“Let me try!”），じゃんけん，あいさつなどの仕方を１年間継続する。

（３年）
○　GOAL の共通理解。
○　アイコンタクトなどのイラストの提示

（４年）
○　ALT とのかけ合い
○　「本日の活動」の流れ
○　話し方の図（笑顔で，元気よく，アイコンタクト，男女いっしょ，たくさん，先生と）

（５年）
○　始まり，終わりのあいさつの仕方。
○　コミュニケーション・ポイントツールの提示
○　活動の流れの提示
○　めあてを日本語で毎回書くこと
○　振り返りの時間（振り返りカード）
○　アクティビティの説明（①ＡＬＴが説明する。②担任が子どもに尋ねる。「この後どうするの。」）

（６年）
○　４５分間の活動の流れがわかる様，ホワイトボードを用いて，赤磁石で示し掲示することはよいと思う。（英語表記でもよいかも）
○　アイコンタクトなどの掲示はよいアイデアだと思う。（日本語の説明はなくてもよいかも）

改善した方がよいこと

（１年）
○　ゲームの説明がみんなからよく見えるように工夫するとよい。
（⇒どの子からも見えることは，説明がわかる以前に必ず配慮すべきことです。「黒板で示す」や「教師用絵カードで示す」，「どの子からも見える場所で説明する」など，工夫が必要です。研修の中で，「書画カメラを使って，テレビ画面で示す」というアイデアも出ました。）

（２年）
○　ゲームのルールの提示の仕方
（⇒「どの子もわかること」が大切です。みなさんで工夫・改善していきましょう。）
○　日本語と英語の使い分け，比重
（⇒子どもに身に付けさせたい表現は，積極的に教師が英語で言いましょう。教室英語が少しずつ増え

ていくとよいです。）

○　ＡＬＴの活用の仕方

（⇒ＡＬＴの役割は以下の通りです。）

①英語を話すモデル　②学級担任とのデモンストレーションを行う

③言語や文化の違いに気付かせる　④児童のリアルなコミュニケーション相手となる

（３年）

○　場の設定について

（⇒活動の種類や内容に合わせて工夫していきましょう。それぞれをパターン化して，「授業のスタンダード」としていけたらよいと考えます。）

（４年）

○　ゲームの説明

（⇒「どの子もわかること」が大切です。みなさんで工夫・改善していきましょう。）

○　学習環境

（⇒学習環境の工夫が必要です。提案授業時は，児童数以上の机があり，活動の妨げになっていました。（また，机のある学習が望ましいとされていますが，活動の種類や内容によっては，机のない場合の学習の方がよい場合もあります。）

○　子ども同士（ペア）の関わり

（⇒子ども同士の関わりを増やす工夫が必要です。様々な場面で関わる機会を見付け，活動に組み込んでいきましょう。）

（５年）

○　モデルペアの抽出（ゲームの中間で，子ども達の発する言葉がいい加減になっていないか。）

（⇒活動中に中間発表を設け，手本となる児童を紹介したり，教師とＡＬＴがうまく活動ができていない例を示したりすることは大切です。ぜひ「授業のスタンダード」に取り入れましょう。）

○　振り返りや本時の内容は大切なフレーズだけでも掲示した方がよいのではないか。

（⇒指導主事からの助言の通り，本時の主となる表現に関しては，４線を活用して示していきましょう。）

（６年）

○　あいさつの際に，日付や曜日，天気等も確認してもよいかも。（教室掲示しているので）

（⇒学年や進度に応じて，あいさつ時の活動内容を工夫していくとよいと思います。どこまでを「授業のスタンダード」としていくかについては，後日の推進委員会で話し合いましょう。）

○　ゲームの説明は全部日本語に訳すより，ＡＬＴの説明をジェスチャー等で理解できるところまで理解させてはどうか。

（⇒子どもに意味を考えさせる場面はとても大切です。学級担任はＡＬＴの通訳ではなく，「子どもと一緒に考える」という態度で臨むことが好ましいです。意図的に子どもの思考場面を取り入れていきましょう。）

○　実物投影機（書画カメラ）があるとよいのではないか。（神経衰弱等のゲームの時，下に置くと見えないので）

（⇒よいアイデアありがとうございます。活用できる環境を整えていきます。）

○“Yes，I do.”，“No，I don’t.”などの表現は黒板に示した方がよいのではないか。

（⇒4 線に示すとよいです。（指導主事の助言より））

疑問等

（１年）

○　日本語での説明，英語での説明，比重などについて。

（⇒子どもに身に付けさせたい表現は，積極的に教師が英語で言いましょう。）

○　５年生のゲームであれば，３・４年生は，どのようなものか。

（⇒子どもの習熟度に合わせて，活動で取り入れるゲームを選んでいくとよいです。）
○　担任の英語力がどのくらい必要か。（発音・ジェスチャー）
（⇒「教室英語」を少しずつ広げていけるよう，子どもと一緒に学んでいきましょう。また，ジェスチャーについてはＡＬＴと同じように「大きく」示し，子どもに真似させましょう。）
○　ＡＬＴの活用
（⇒ＡＬＴの活用については，前述の「ＡＬＴの役割」を参考にしてください。）
（２年）
○　日本語と英語の比重はどのくらいがよいのか。（どの程度日本語で話したらよいのか）
（⇒子どもに身に付けさせたい表現は，積極的に教師が英語で言いましょう。）
○　“Yes, I do.”,“No, I don’t.”の提示の仕方について。
（⇒4線に示すとよいです。（指導主事の助言より））
○　振り返りカードの作成の仕方について。
（⇒ある程度，例があればよいと考えています。後日，推進委員会にて提案させていただきます。）
○　板書のパターンについて。
（⇒活動の種類や内容に合わせて，工夫していくとよいと思います。「めあて」,「まとめ」や「振り返り」はパターン化した方がよいと思います。）
（３年）
○　日本語と英語の使い分けについて。
（⇒子どもに身に付けさせたい表現は，積極的に教師が英語で言いましょう。）
（４年）
○　ＡＬＴとのかねあい
（⇒学級担任とＡＬＴの役割を理解して，授業計画を立てましょう。）
○　学習の仕方のスタイル
（⇒机のある学習が望ましいとされていますが，活動の種類や内容によっては，机のない場合の学習の方がよい場合もあります。活動の種類や内容に合わせて指導計画を立てましょう。）
○　担任一人で学習する時の話し方
（⇒発音の手本を示すときは，デジタル教材“Hi, friends!”を活用しましょう。「教室英語」や本時の学習の主となる表現については，積極的に言うようにしましょう。）
（５年）
○　前回の板書は毎回書くのか。
（⇒本時のめあてに向かうための振り返りです。他教科と同様，必ずしも板書する必要はありません。）
○　“Yes, I do.”“ No, I don’t.” の板書は必要か。
（⇒指導主事からの助言の通り，本時の主となる表現に関しては，４線を活用して示していきましょう。）
（６年）
○　活動の流れはあった方がよいか。
（⇒あった方がよいです。みなさんで共通理解の上，ぜひ光貞小「授業のスタンダード」に組み込みましょう。）
○　ＡＬＴがいないときの指導はどのようにしたらよいか。（間違った発音を教えてしまいそう。）
（⇒デジタル教材“Hi, friends!”を活用して，発音の手本を示すときには活用しましょう。
本時で主に取り扱う表現でない表現に関しては，発音の正確さより，なんとか英語で伝えようとする態度を示すことの方が大切です。）
○　おわりのあいさつの仕方はどのようにすればよいか。
（⇒改めて推進委員会にて，「あいさつ」の例を提案させていただきます。）
○　授業の中でできるだけ日本語を使わない方がよいと以前聞いたことがあるが，どの位までならよいか。

（⇒子どもに身につけさせたい表現は，できるだけ英語で言うようにしましょう。子ども）
○　英語を日本語に訳すことはどうか。

指導第一課　山田百合子指導主事より

○　授業の流れを見える化する。ミニボードに本時の活動内容を掲示し、矢印マークを用いて活動進度を示すことは効果的。
○　「めあて」、「まとめ」と「振り返り」のある授業を心がける。
○　活動中に中間発表を設ける。手本となる児童を紹介したり、教師とＡＬＴがうまく活動ができていない例を示したりすることで、一人一人の活動の確認や修正の機会を作る。
○　活動の「始め」と「終わり」のあいさつは、統一したものがあるとよい。学年に応じて、また段階的に、教師主体から児童主体のあいさつにしていく。
○　文字のまとまりを示し、子どもの気付きを促すこと。（英語を板書するときは、４線に示す。）
○　学習環境を工夫する。（机のある学習が望ましいとされていますが、活動の種類や内容に合わせ工夫をしていく。）

これらの意見を基に，５月３１日（水）に行った，英語リーディングスクール推進委員会の中で，光貞小「授業のスタンダード」を作成した。

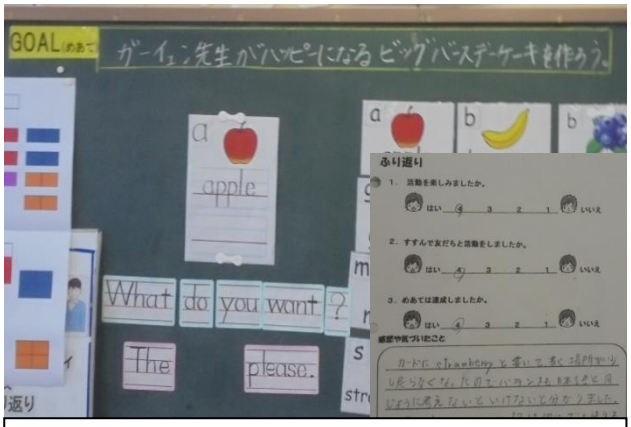
「授業のスタンダード」を作成した初期の頃は、担任の指導に対する負担感は大きなものだった。慣れない教室英語の一つ一つを、児童の前で使用することや、コンピュータを操作し、デジタル教材のチャンツを流すことなど、実践を重ねながら少しずつ身に付けていった。

そのようにして、授業研究を通して、少しずつ「授業のスタンダード」を確立していくことができた。

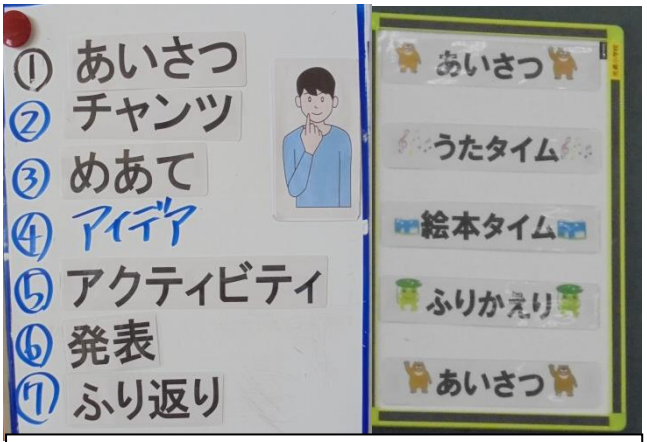
以下に、今現在の光貞小「授業のスタンダード」を示す。

◇　光貞小「授業のスタンダード」活用の様子

学級担任（Ｔ１）とＡＬＴ（Ｔ２）
の役割を意識した授業展開

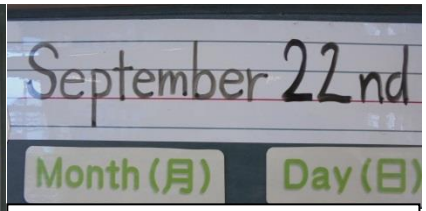


「めあて」や「振り返り」のある授業展開



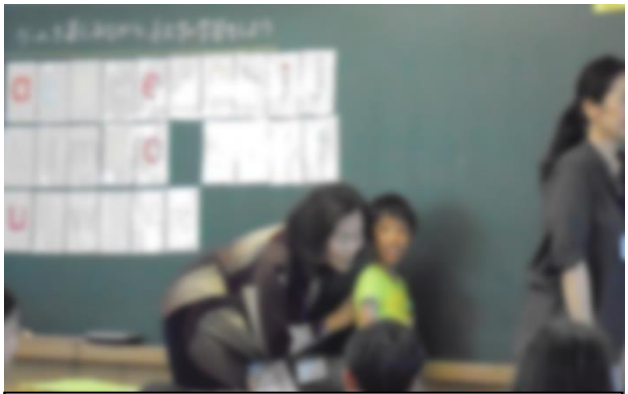
学習内容の可視化

コミュニケーションのポイント
を示した掲示物



４線に示した
アルファベット文字

（褒め言葉・励ましの言葉を中心とした）
クラスルームイングリッシュ



デモンストレーションによる説明

絵本の活用

◇　環境部の取組

１　学年掲示及び教室掲示（教室で活用する英語カード）の作成・入れ替え

⑴　各学年の掲示計画

学年	１学期	２学期	３学期
１年	色	動物	身体
２年	果物	色	動物
３年	１～２０	身体	文具
４年	１～２０	国旗	服
５年	月・１～３１	店・建物	食べ物
６年	動作	国旗	職業・物語

⑵　教室掲示

学年	あいさつ	気分・様子
１・２年	Hello. Good morning. Good bye.	I'm good/ fine/ sick.
３・４年	Hello. Good morning. Good afternoon. Good bye.	I'm good/ fine/ sick happy/ hungry/ sleepy /tired/ sad.
５．６年	Hello. Good morning. Good afternoon. Good bye. See you.	３・４年生と同じ

各学級共通の掲示

学級札

あいさつ表現

気分や体の調子を尋ねる表現

２　児童の実態や学習内容に応じた学年掲示

＜１年生＞

色

＜２年生＞

果物

＜３年生・４年生）＞

文具

アルファベット（大文字・小文字）

＜５年生＞

建物

＜６年生＞

物語

３　英語への興味・関心を高めるための校内掲示

ＡＬＴの紹介，下足箱（あいさつ），世界のあいさつ，階段（数・月・曜日・あいさつ・教科）

4　玄関・職員室付近の英語環境等

玄関マット，ウェルカムボード，日めくりカレンダー，アルファベット，世界地図等

絵本（ディスプレイ用），絵本棚，教具棚

◇　調査部の取組

調査結果・分析

【外国語活動の指導についてのアンケート】（教職員用）（６月、１２月実施）

調査項目	６月	１２月	差
・教室英語を積極的に使用することができますか。	４７	９４	＋４７
・学級担任の役割を理解して、外国語活動の授業を行うことができますか。	５８	８８	＋３０
・ＡＬＴの役割を理解して、連携してＴＴ授業を行うことができますか。	６７	１００	＋３３
・補助教”Hi,friends!”を活用して、授業を行うことができますか。	７４	７１	－３
・補助教材”Hi,friends!Plus”を活用して、授業を行うことができますか。	３３	５４	＋２１

（※　示した数値は、「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」の合計割合。）

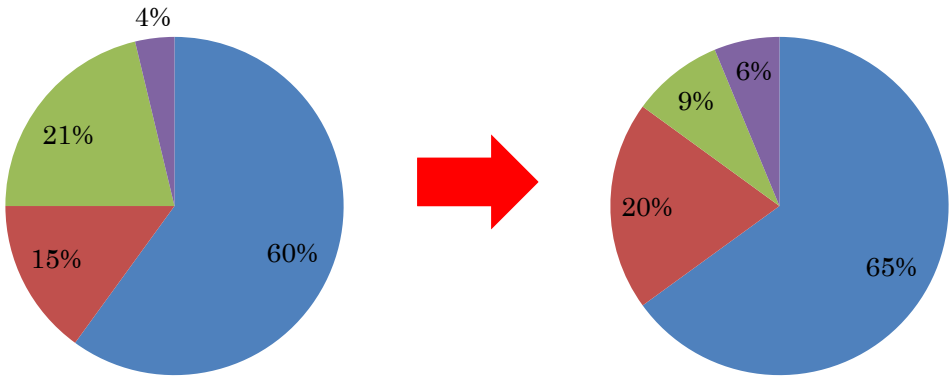
＜６月から１２月までの傾向（記述内容から）＞

○　ＴＴとしてどのような役割を果たすべきか、担任として何をするかが明確になった。
○　スタンダードがある、分かりやすかった。
○　打ち合わせに充分な時間をとることができ、担任とＡＬＴの役割を考えていくことにつながった。
○　打ち合わせがより詳しく、入念にできるようになってきた。
○　担任の役割を少しずつ理解できるようになった。
○　授業の流れが分かりやすくて、前よりも流せるようになった。
○　クラスルームイングリッシュが増えた。
●　教材の作製時間が十分に確保できるか。打ち合わせ時間の確保。
●　来年度以降、先行実施を踏まえ、高学年の評価方法をどのように行うか。
●　インタビュー活動など、クラス全員が一斉に行う一人一人の評価の仕方。
●　授業の雰囲気は教科化になる上で今のままで良いのか。

【英語体験活動及び外国語活動についてのアンケート】（児童用）（６月、１２月実施）

※　「英語体験活動は好きですか」「外国語活動は好きですか」という質問に対して、それぞれ「好き」（青），「どちらかというと好き」（赤），「あまり好きではない」（緑），「きらい」（紫），と回答した児童の割合。また、円グラフ下の文章記述は、児童の学習中などの発言分析や行動観察での、担任による見取りである。

１年

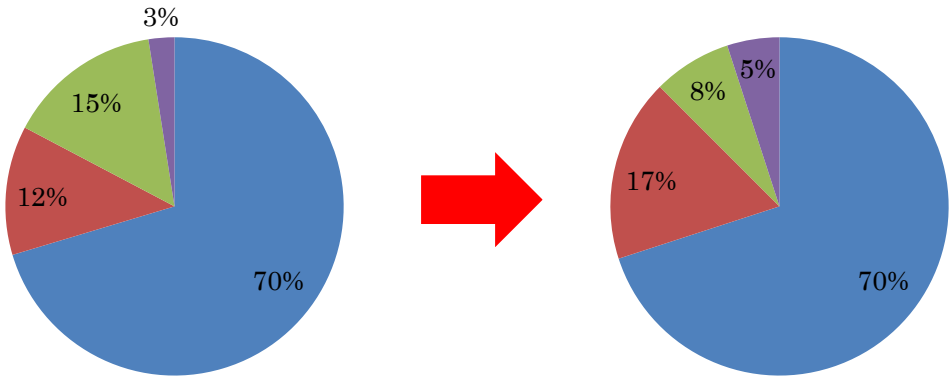


○　ALT や日本人 ALT に慣れ、それにより関わりが楽しくなった児童が多い。
○　ALT や日本人 ALT とともに学ぶことが楽しいと感じている児童が多い。

○　大型絵本は、児童にとってわくわく感があり、良かった。また、英語の歌を取り入れたことが良かった。

●　英語を聞いたり言ったりすることに抵抗を感じている児童がいる。

２年

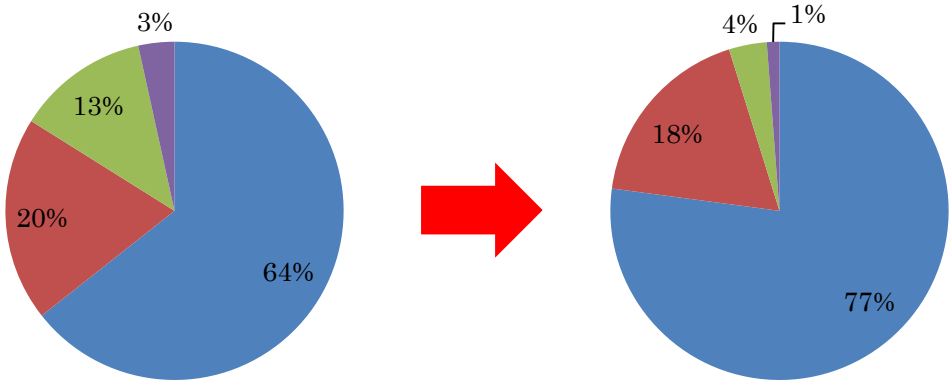


○　絵本を通して、多くの新しい言葉を知ったり、使ったりすることが楽しいと思えるようになってきている。

○　英語の本を読んでもらうことが好きな児童が増えている。

●　英語の歌を歌ったり、英語のゲームをしたりする中で、英語で言うことが難しいと思っている児童は、減っていない。

３年



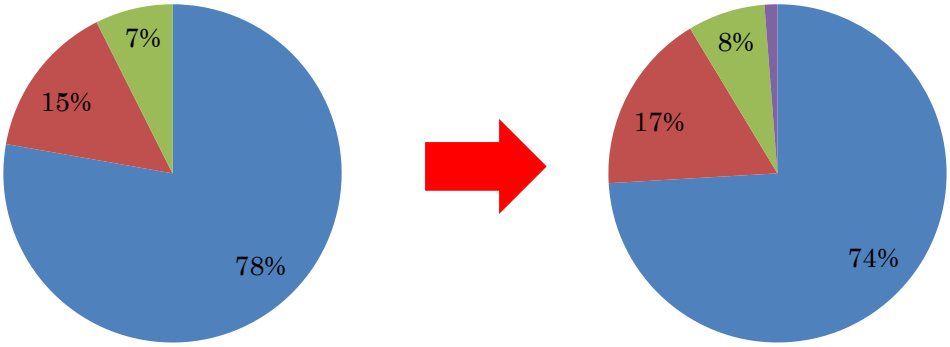
○　２学期から、絵本の読み聞かせを始めたことで、外国語にとても興味・関心を持てるようになった。

○　繰り返し絵本を聞くことで、ストーリーに出てくる単語（色、動物、体の部位など）を自分から進んで言えるようになった。

○　外国語の時間以外にも、ＡＬＴの所に行き、絵本を読んでもらったり、英語では何と言うのかというような質問をしに行ったりするようになった。

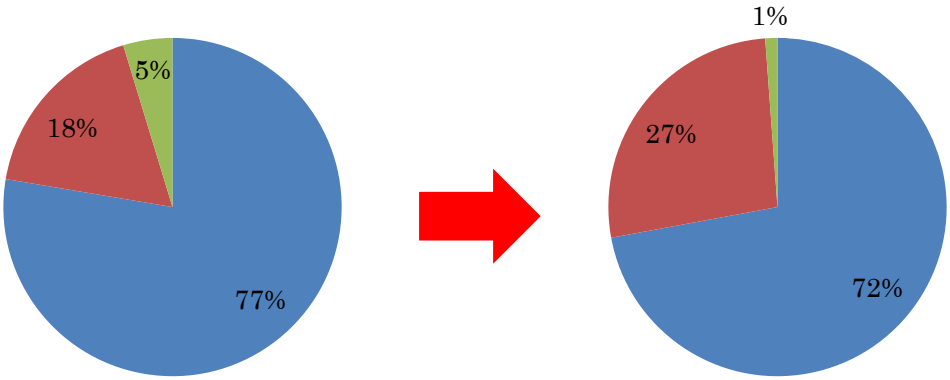
○　あいさつや返事など、日常の会話の中に自然と英語を使えるようになった。

４年



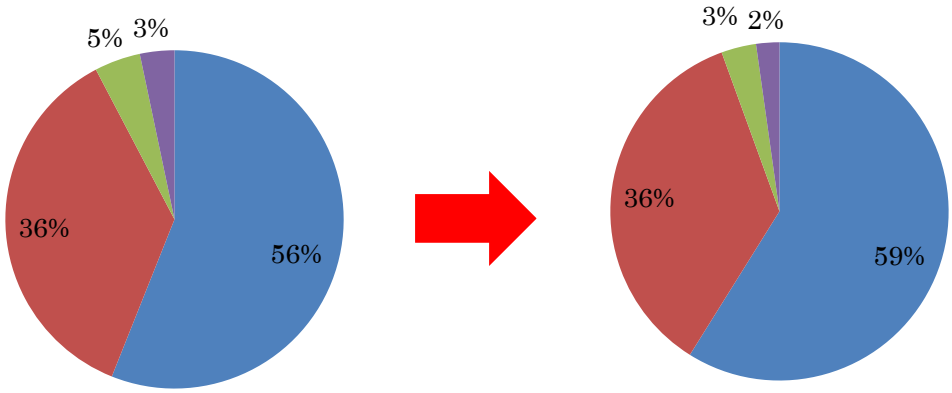
○　チャンツやゲーム、ワークショップなどを通して、楽しく英語を覚えるようになってきた。
○　初めは苦手だった児童も、少しずつ言えるようになってくるにつれて、英語で伝えることができて嬉しいという児童が増えてきた。
○　英語を習っていない児童にとっては、英語を使って楽しくコミュニケーションをとる機会を楽しみにしている。
●　自信をもって英語を言える児童と、そうでない児童の差が少しずつみられるようになった。英語を話すことに恥ずかしさを感じ始めた児童がいた。
●　英語表現に十分に慣れ親しむことができていない児童がいた。

５年



○　外国語活動を楽しく感じている児童が多かった。
○　英語を書けるようになったと感じている児童が多かった。
　自分から何とかして英語を聞こうとする姿勢が見られた。
○　外国の文化に興味をもち、進んで知ろうとする児童が増えた。
●　誰とでも英語で気軽に話せるようになったと感じている児童は少なかった。

６年

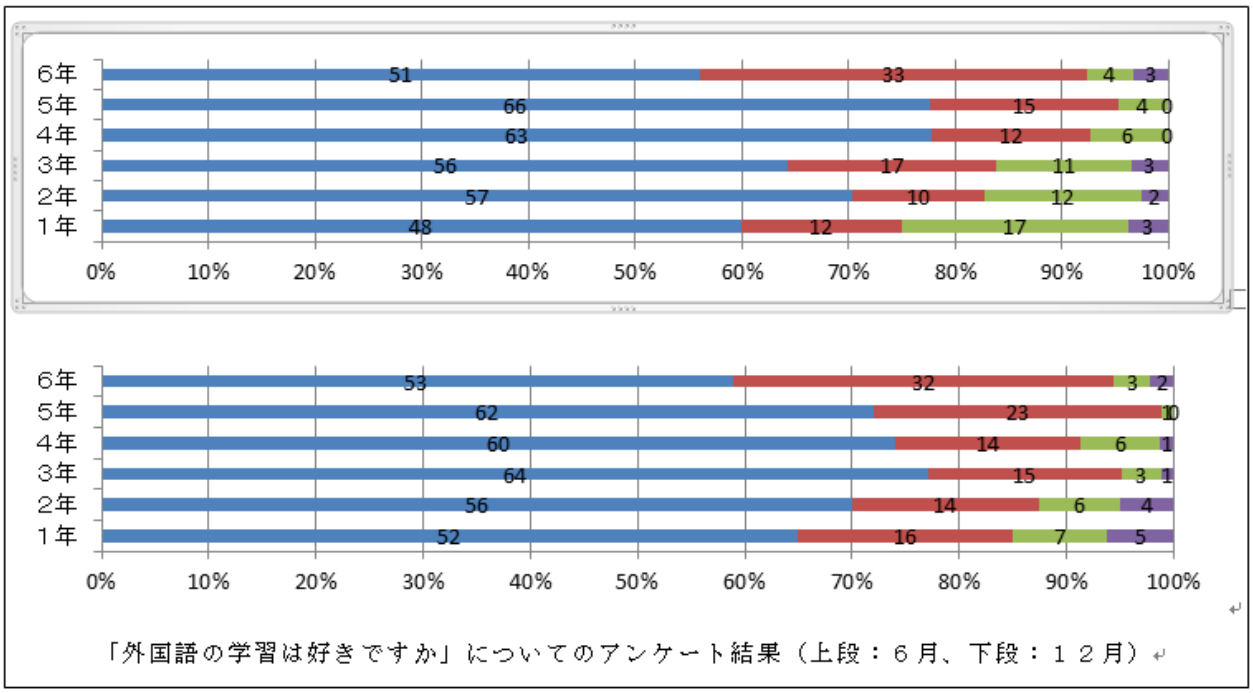


○　外国語活動の学習が楽しくなったと、感想を言う児童が多くいた。
○　日本と外国の文化の違いを知ることが楽しいと感じている児童が多くいた。
●　同じことを繰り返すことが多いので簡単すぎるという感想をもつ児童がいた。
●　楽しいが、中学校や高校の英語に役に立つようなもっと難しいことが学びたいと考える児童がいた。

◇　本年度の成果と課題

１　成果

（１）「外国語活動についてのアンケート」から見る児童の変容



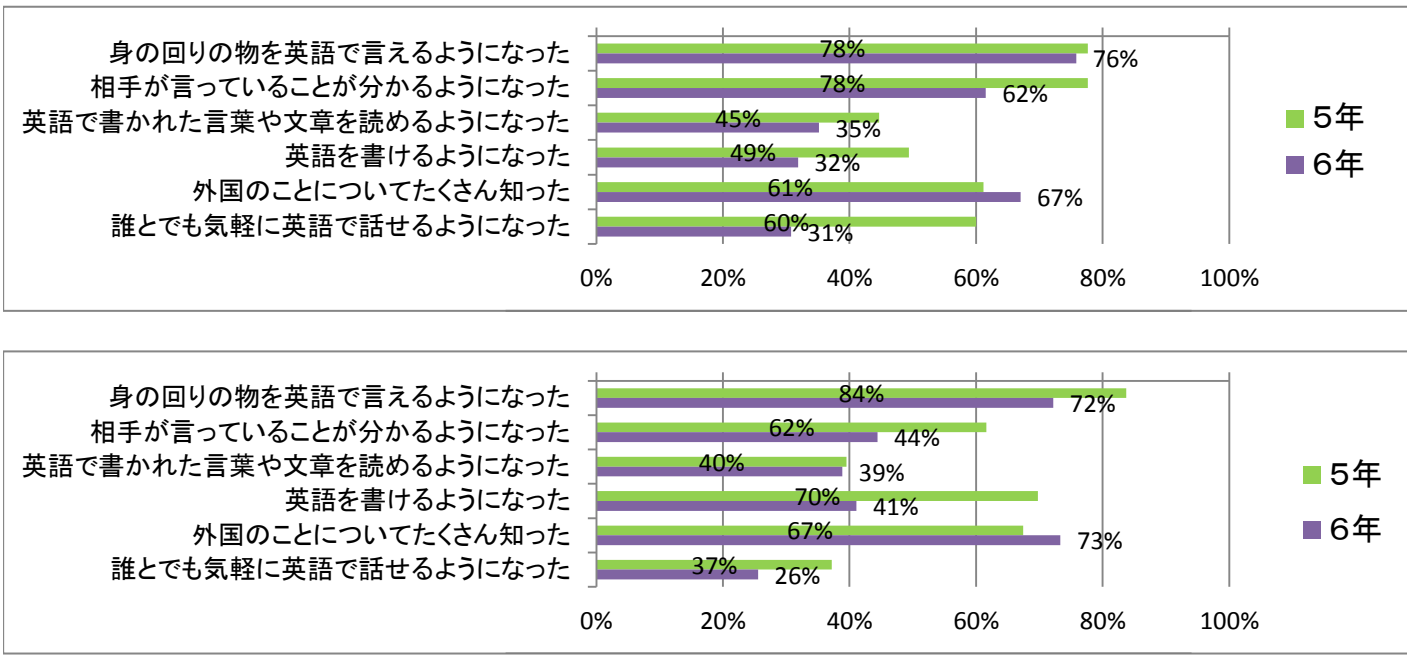
「外国語の学習は好きですか」についてのアンケート結果（上段：６月、下段：１２月）

全学年の児童に対して６月と１２月に行ったアンケートの結果である。この結果を比較すると，学年に差はあるものの，全体的に児童は外国語の学習を「好き」「どちらかというと好き」と捉えるようになっている。

低学年児童に対して行った「英語体験活動で好きなことはどんなことですか」についての自由記述では，「新しい言葉を覚えること」，「英語の歌を歌うこと」，「英語の本を読んでもらうこと」が主に挙げられた。英語の歌を通して新しい言葉を覚えたり，絵本を使った活動を通して児童と教師がやり取りをしたりするなどの，授業のスタンダードに基づいた学習活動が，英語に対する児童の関心を高めることにつながっていると考えられる。

中学年児童に対して行った「外国語活動の学習を通してできるようになりたいことは何ですか」についての自由記述では，「身の回りの物を英語で言えるようになりたい」，「相手が言っていることが分かるようになりたい」，「誰とでも気軽に英語で話せるようになりたい」が主に挙げられた。これら他者とのコミュニケーションへの意欲が向上していることの表れと考えられる。

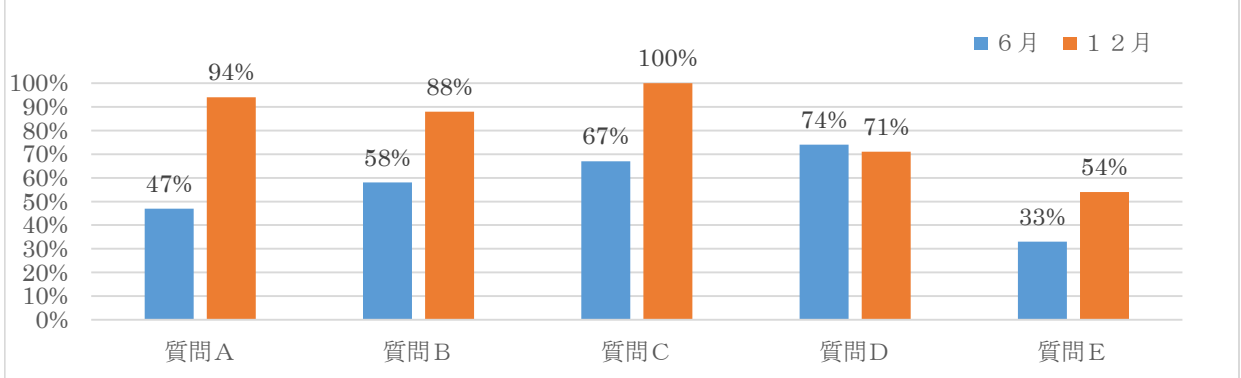
高学年児童に対しては，「外国語活動の学習を通してできるようになったこと」についての自己評価及び自由記述を行った。「英語を書けるようになった」と「外国のことについてたくさん知った」については，両学年とも１２月の段階で肯定的な回答が増加している。４線を意識した文字指導や，興味をもった国についての発表活動などが，児童が成長を感じることができている要因と考えられる。



高学年児童のアンケート結果（上段：６月、下段：１２月）

（２）全教職員による主題研究の推進

本校では，外国語に親しむ児童を育成するために，まず教師が外国語活動の授業実践に対する考察を深めることが肝要であると考えた。そこで，研究組織と主題研修の在り方について，見直しを図った。主題推進委員会を立ち上げ，全教職員が３部会のいずれかに所属することで，一層の研究推進をねらった。主題研修においては，外部講師を招聘し，学習指導案検討や協議会における指導講話の場を設定した。本校では，北九州市指導第一課指導主事である山田百合子先生より，年間を通じた指導を受けた。研究授業の実施にあたり，全ての授業者が，山田先生と指導案検討を数回行ったため，授業のスタンダードを意識した展開について，具体的に話を進めることができた。全学年の学級担任に対して６月と１２月に行ったアンケートの結果は以下の図の通りである。



質問Ａ：教室英語を積極的に使用することができますか。
質問Ｂ：学級担任の役割を理解して、外国語活動の授業を行うことができますか。
質問Ｃ：ＡＬＴの役割を理解して、連携してＴＴ授業を行うことができますか。
質問Ｄ：補助教材“Hi、friends!”を活用して、授業を行うことができますか。
質問Ｅ：補助教材“Hi、friends!Plus”を活用して、授業を行うことができますか。

教職員へのアンケートにおける「よくできる」と「できる」の割合

５つの質問項目について，「よくできる」「できる」「あまりできない」「できない」の４項目で自己評価を行った。質問Ｄの除き，どの質問項目においても肯定的な回答の割合が２０％以上増えており，教職員が外国語活動の授業に対して自信を深めていることが分かる。この結果は，本校の全教職員が主題研究推進における各自の役割を自覚し，一丸となって研究を進めたことの成果と考えられる。

また，教職員の指導力向上とそれに伴う「授業のスタンダード」の確立に向け，今年度は研究授業の数を昨年度より大幅に増やした。昨年度はＡ研を第６学年のみで行ったが，今年度は全学年でＡ研を実施した上，第３学年以上でＢ研と同一週にＡ研を設定した。Ｂ研の協議会で出された意見を集約し，それらの意見を参考にＡ研の授業を構成し直したため，より有意義な活動設定や，効率的な学習展開等につながった。以下に，協議会後の授業改善例を２つ示す。

①　第３学年の授業改善（質問項目の順序立て，中間評価の実施）

インタビュー活動の際，Ｂ研では動物，果物，色，形の４種類の中から児童が聞きたいものを自由に選んでインタビューをしたが，ワークシートの記入欄が多く活動時間内で記入できた児童がほとんどいなかった。そのため，協議会では，中間評価を取り入れる，聞く項目か記入欄の数を減らす，「全部書けなくてもいいよ。時間内に何人の人とできるかな。」と子どもの意欲を高めるような声かけをするなどの改善策が出された。そこでＡ研では，まず動物と果物についてインタビューをするように設定を変更した。また，インタビュー活動の途中で中間評価を取り入れ，中間評価後の質問項目に色と形を加えた計４つをインタビューできるようにした。

中間評価の場面で，友達の望ましい活動の様子を見ることができたため，その後の活動でそのよさを取り入れる姿が多く見られるようになった。また，「笑顔で，元気よく」「たくさん」「男女仲よく」と，コミュニケーションボードで再確認し，「ワークシートにできるだけたくさん書きたいね。」と声をかけることで，インタビュー活動の後半ではよりよいコミュニケーションを心がけ，意欲的に取り組む児童の姿が多く見られるようになった。

②　第６学年の授業改善（入国審査の場面における児童への動機づけと役割設定の工夫）

入国審査の疑似体験は，社会とつながる有意義なものであると考えられる。この活動には，Ａ研とＢ研のどちらにおいても学級全体が高い関心を示し，Ｂ研では旅行者役だけでなく審査官役も児童が務めた。一方で，児童の意欲に応える形でこの活動を計５組分行ったため，終末の振り返り活動の時間確保に課題が残った。そこでＡ研では，旅行者役のみを児童が務め，授業全体の時間配分を考慮した上で実演は２回とした。また，Ａ研では児童が具体的にその場面を想像し，進んで旅行者役に立候補するように，担任が実物のパスポートを学級全体に向けて提示した。学級全体が大きな関心を示し，旅行者役を務めようとする態度につながった。

（３）「授業のスタンダード」の確立

○　担任（Ｔ１）と ALT（Ｔ２）の役割を意識した授業展開

担任と ALT（日本人外国語指導助手を含む）による事前の打ち合わせを通して，それぞれの役割が明確になり，円滑な授業進行につながったことが，上述のアンケート調査における肯定的回答の増加と考えられる。原則的に担任が授業の進行を行い，ALT が T2 となることで，児童一人一人のつまずきを担任が見取ったり，授業の中でそれを ALT と共有したりすることができ，きめ細やかな個別指導につながった。また，英語の発音や外国の文化の紹介などは，ALT が主として示範した。専門的な立場からの指導により，児童がより意欲的に学習に取り組むことができた。

○　学習活動と評価の可視化

当初のボード活用は，児童が１単位時間の授業展開に見通しをもてるようにすることと，現在の活動を確認することをねらいとしていた。研修を進める中で，終えた活動についてボ

ード上で即時評価を行う学級の取組が注目され,学習活動に加えて評価も可視化することが,本校における新たなスタンダードとなった。評価の可視化により，達成感やよりよい活動への意欲を児童が高めることにつながった。

○　「めあて」や「振り返り」のある授業展開

児童が目的意識をもって学習活動を行えるように，導入時に必然性のある場面を意図的に設定した。児童が主体となって学習のめあてを立てることができた。また，毎時間の振り返り活動を通して，児童は前時までの自分と本時の自分を比較し，新たにできるようになったことを記述した。一人一人が授業を通しての自分の成長を感じることで，外国語活動への意欲を高めることができた。教師は，振り返りカードの点検によって，授業中には見取ることのできなかった一人一人の気付きを把握することができ,学習評価につなげることができた。

○　教室英語（褒め言葉・励ましの言葉を中心に）

研究授業の参観や指導主事による校内研修を通して，各教職員が場面においてどのような教室英語を用いればよいのかを具体的にイメージできるようになった。外国語活動における担任の役割は，授業の進行だけでなく,「楽しんで英語を学び，積極的に話そうとする学習者モデル」を実践することも求められる。本校では，どの担任も“Excellent.”“Good job.”などの教室英語を積極的に使用した。このように，担任が学習者モデルとして積極的に教室英語を話そうとすることで，担任・ALT と児童の間だけでなく，児童同士のコミュニケーションにも，教室英語が使われるようになった。

○　デモンストレーション（中間評価を含む）による説明，コミュニケーションのポイントを示した掲示物

担任と ALT がデモンストレーションを行い，望ましくない例をあえて見せた場面があった。児童は望ましくない理由について,「目を合わせていない。」「元気がない。」などと発言した。そこで，コミュニケーションのポイントである「元気よく，スマイル」「アイコンタクト」を掲示物で確認した後に，望ましい姿でのデモンストレーションを見せ，インタビュー活動へと移行した。そうしたことで,児童はインタビュー活動の見通しをもつことができた。

○　絵本の活用

絵本を使った活動は，絵を視覚的に捉えて英語の意味を推測したり，同じ表現を繰り返し言ったりすることができるため，児童にとって分かりやすく，語彙や表現を自然と増やすことにつながった。本校では，どの学年も ALT が中心となって読み聞かせを行い，担任は ALT が発音する英語を繰り返したり，児童の頑張りを教室英語で褒めたりする役割を担った。１学期は，絵本の活用中の指導について不安を抱えていたが，ALT との綿密な打ち合わせや校内研修を通して，担任の望ましい役割を２学期は確立することができた。

○　４線に示したアルファベット文字

高学年では,「１階だての文字」や「地下室がある文字」などのキーワードで例示された掲示物を黒板上に貼って，書く活動の度に指導を重ねたことが，４線を意識して児童が文字を正しく書く意識の向上につながった。また，児童が４線上に正しく文字を書けるように，ワークシート上に貼れる手本を配布したことは，文字の大きさやバランスを意識させる上で効果的であった。

２　課題

（１）英語教育の推進について

● 平成３０年度より，新学習指導要領の段階的な先行実施が始まる。それに伴い，新たに配布される新教材を活用のもと，指導や評価の在り方を校内で確立することが求められる。

● 第６学年の児童は中学校進学を視野に入れる段階であるため，小中連携の視点から，中学校の英語科教員との連携を図り，授業づくりについて意見交換を進められればなおよい。

（２）授業づくりについて

● 児童同士のやり取りの際などに，コミュニケーションボードのボードを必要に応じて活用した。ジェスチャーやアイコンタクトなどのコミュニケーションのポイントを，児童へ指導することができた。十分に定着が見られた為，今後は，やり取りの内容や表現に焦点を当てた指導について研究を深めていきたい。

● 導入時に担任がスモールトークを行い，英語を活用する学習者モデルとしての姿を示すことに，教職員全体でできる限り挑戦し，スタンダード化を図りたい。

３　来年度の方向性

◎ 児童のコミュニケーション能力の育成の視点から，主題を推進する。

◎ 「授業のスタンダード」さらに定着させ，さらに分かる授業を目指す。

◎ 中学校へのスムーズな接続を考えた小中連携を目指す。

◎ 今後示されていく英語教育の指針に素早く対応し，英語教育リーディングスクールとしての責務を果たす。